著者　上栖綴人（うえすてつと）

純愛って本当に良いものですよね。
この巻の原稿が一段落したタイミングで、久しぶりに映画を観てきました。日本が世界に誇るアニメ監督の長編引退作品です。
感動するシーンは沢山ありましたが、主人公が紙飛行機を作ってヒロインへと何度も飛ばしながら恋心を育んでゆくシーンでは、その素敵な恋の描き方に胸が温かくなりました。
一方、ウチの刃更君は紙飛行機などは飛ばしませんが、今回もサービスシーンでヒロイン達の意識を飛ばしまくってます。
純愛ですとも。ええ。

イラスト　大熊猫介（おおくまねこすけ）（ニトロプラス）

ニトロプラス所属のグラフィッカー。最近病気してしまいずっと引き篭もって仕事してたので、ネタがない……。あーゲーセン行きたい！　映画観に行きたい！　旅行行きたい！　いきたい！　いく！　イっちゃうぅうー!!

カバーイラスト／大熊猫介（ニトロプラス）
カバーデザイン／濵崎正隆（NARTI;S）

う-2
1-4
新妹魔王の契約者（テスタメント）Ⅳ
上栖綴人
角川スニーカー文庫

9784041010617

ISBN978-4-04-101061-7
C0193 ¥620E

定価：本体620円（税別）
KADOKAWA

19201930062O9

「東城――お前はもっと年上の女に甘える幸せを知るべきだ」体育祭を目前に控え、澪や柚希たちと準備に明け暮れる刃更は、一方で養護教諭の長谷川との距離を縮めていた。長谷川の自宅で手料理をごちそうになり、お風呂にまで誘われてしまう刃更。だがその帰り道、謎の襲撃にあった刃更はある人物から「長谷川千里に気を付けろ」と忠告を受ける。そして迎えた体育祭当日、平和な時間を打ち破るように、突如、正体不明の敵が襲来する!!

角川スニーカー文庫

上栖綴人の本

新妹魔王の契約者Ⅰ
新妹魔王の契約者Ⅱ
新妹魔王の契約者Ⅲ
新妹魔王の契約者Ⅳ

カバー　泉文社

新妹魔王の契約者（テスタメント） Ⅳ

上栖綴人

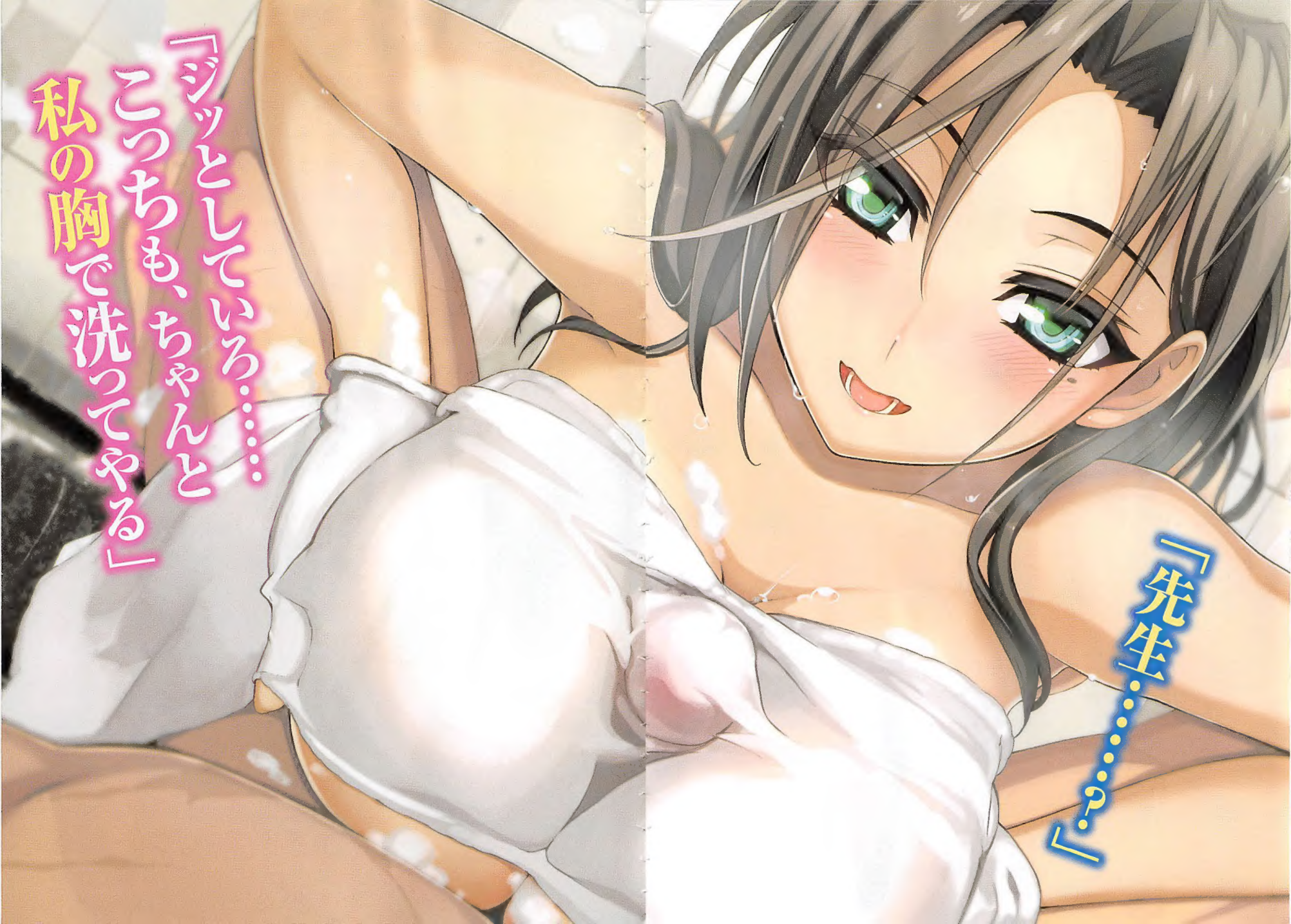
角川スニーカー文庫
18221

新妹魔王の契約者（テスタメント） Ⅳ
上栖綴人
角川スニーカー文庫
18221

Kadokawa Sneaker Bunko

新妹魔王の契約者
テスタメント
IV
The Testament of Sister New Devil

梶浦立華
聖ヶ坂学園の二年生。クールな性格で、生徒会の副会長を務める
野中柚希
幼馴染の刃更が好きな、勇者一族の少女
滝川八尋
(ラース)
刃更達のクラスメイトだが、正体は澪を監視する魔族
成瀬澪
先代魔王の娘で、刃更の"妹"になった少女
坂崎守
刃更達の担任。面倒見がよく、生徒たちからの信頼も厚い
橘七緒
刃更と同学年の生徒。一見、美少女だが、れっきとした男の子
長谷川千里
刃更達が通う高校の、美しすぎる養護教諭
東城刃更
澪と万理亜の"兄"。特異能力《無次元の執行》の使い手
成瀬万理亜
刃更と澪を主従契約させた下の"妹"。ロリエロサキュバス
東城迅
刃更の父で、元・最強の勇者


「ジッとしていろ……
こっちも、ちゃんと
私の胸で洗ってやる」
「先生……？」

「私がお前を塵一つ
残さず消し去ってやろう」
「――そこの忌まわしい、
穢れた『三種の混血（トリプルレッド）』にも」

新妹魔王の契約者（テスタメント）Ⅳ

上栖綴人

角川スニーカー文庫
18221

The Testament of Sister New Devil IV

ConTeNtS

プロローグ
交錯する大戦の両雄 ——— 005

第①章
あなたの為に出来る事を ——— 027

第②章
深まる謎と友情の狭間で ——— 127

第③章
譲れない想いを君と ——— 193

エピローグ
ずっと見たかった光景 ——— 277

あとがき ——— 312

口絵・本文イラスト／大熊猫介（ニトロプラス）
口絵・本文デザイン／濵崎正隆（NARTI;S）

報われなくても、叶わなくても構わない。
それでも俺は、この手を伸ばすよ――……

プロローグ　交錯する大戦の両雄

1

魔王レオハルト。

それは先代魔王ウィルベルトの死後、魔界のトップに君臨した新たな若き魔王だ。

かつて魔界最強の名をほしいままにしながらも、先の大戦で人間界から軍を引いて平穏に暮らす道を選択した穏健派のウィルベルトに対し、大戦終結から十六年――神々への復讐という魔族の本能に忠実な保守派やタカ派層の魔族達は、根強い不満を抱いていた。

――しかし今から一年ほど前、ウィルベルトが死亡した事で魔界の情勢は一変した。

ウィルベルトのカリスマ性によって一大勢力を築いていた穏健派は急速にその力を失い、代わりにタカ派や保守派が一気に力を増したのだ。

そして――それらが合流した新勢力から擁立されたのが、レオハルトだった。

評価されたのは、古くは魔王を輩出した事もある公爵家の直系という血筋と、先の大戦での活躍だ。魔王として後方に控えていたウィルベルトに対し、当時のレオハルトは精鋭部隊を率いて最前線で戦い、ずば抜けた戦果を挙げた。前線における最大の殊勲者はレオハルトと別の高位魔族が二分していたが、もう一方は大戦の途中で消息を絶ったため、大戦の英雄としての栄誉はレオハルトのものとなって――その事がタカ派や保守派の支持を集め、新たな魔王として即位したのである。とはいえ、あの最強の先代ウィルベルトの後に魔王となるのだ。若輩のため及ばない威厳などを補えるよう、権威の象徴となる王城は魔界に現存している城の中で、最も巨大かつ荘厳なものを使用する事になった。

――しかし今、そんなレオハルトの城に激震が走っていた。比喩ではない――玉座の間で生じた凄まじい衝撃が、文字通り城全体を激しく揺らしたのだ。そして、

「――――――」

衝撃を受けて吹き飛んだ壁の穴から、レオハルトは建物の外へと跳んだ。ふわりと中庭に着地して上を見ると、破壊された壁からこちらの後を追って一つの影が外へと飛び出してくる。外套の裾を急降下の空気抵抗にはためかせ、こちらを目がけて大剣を振り下ろしてきたのは、先の大戦に参加した勇者の一族の中で「戦神」と呼ばれた最強の男。

東城迅だ。

そんな迅の斬撃にレオハルトは自身の魔剣の斬り上げで対抗し――ガキィイイイイイイイン！　と金属同士の激音が鳴り響いた。強力な斬撃同士の激突は、力の逃げ場を求めて周囲に轟音と衝撃を撒き散らし、中庭の地面や噴水を破壊する。そんな中、

「はあああああああああああっ！」

レオハルトが強引に魔剣を振り切ると、迅は「おっと」とあっさり身を引き、そのままくるりと後方へ一回転して着地。そして大剣を持った右の肩をグルグルと回しながら、

「あー、やっぱ少し鈍っちまってるかなぁ……意識と実際の動きに差が出ちまう」

苦笑して、大剣の峰でトントンと右肩を叩いた迅と相対していると、

「――レオハルト様！」

「ご無事ですか陛下っ！」

慌てて近衛兵達が駆け付けてくる。武器や魔法で迅に攻撃を仕掛けようとする彼らに、

「下がれ――お前達の歯が立つ相手ではない」

冷静な判断をレオハルトは告げた。既に玉座の間に控えていた親衛部隊は、全員昏倒させられてしまっている。普通の兵士に戦わせたところで、良くて返り討ちで戦闘不能。最悪の場合は、それこそ彼らの命が無駄に散る羽目になる。しかし迅は周囲に目をやり、

「――そうか？　お前さん以外にも、結構やりそうな奴がいるみたいだけどな……」

見透かしたようにそう言い放った。

……感覚まで鋭いか。厄介な男だ。

現在、バルフレアを始めレオハルトの信頼する臣下数名が、周囲の一般兵の背後や建物の陰などに控えていた。いつでも彼らに迅を攻撃させる事はできる。そして、

『（レオハルト様――いかがなさいますか？）』

伝心魔法で指示を求めてくるバルフレアに対し、

「（……お前達も動くな。この男の相手は俺だけでする）」

そう言って、レオハルトは臣下達にも待機を命じた。良い機会だったからだ。

――何せ相手は、かつて最強の勇者と謳われた東城迅である。

この一年――自分達の利権や欲望のために若いレオハルトを魔王として擁立し、都合の良い傀儡として操ろうとしていた老害共は幾分排除できたが、それでもゾルギアのような腐った者はまだ少なからず残っている。もしここで、レオハルトだけで迅を倒せれば、枢機院内に残っているあの目障りな連中を大人しくさせる事ができるかもしれない。

……しかし。

同情か、はたまた義侠心か――迅が成瀬澪や配下の万理亜を保護し、自分の家で息子

と共に暮らさせている事は、監視役のラースから報告を受けて知ってはいたが、

「……息子やウィルベルトの娘を守るために、直接俺を討ちに来たかジン・トージョー」

「いや、そんなつもりはねえよ。俺が魔界に来たのは、ウィルベルトが死んだ後の状況を確認するためだ。お前さんの所に顔を出したのは、その寄り道ついでさ……まあ、ウチの息子共を寄って集って苛めないように釘を刺しに来たってのもあるが」

それにしても、とこちらをまじまじと見ながら迅。

「ウィルベルトの後釜に座って、奴の力を自分の意思とは無関係に受け継いじまった一人娘を――それも自分が魔王の血を引いている事も知らずに、人間として育てられていた女の子をどうこうしようって位だ。てっきり策略ばかり巡らすのが上手いクズ野郎を想像していたんだが……まさか、こんな俠気のありそうな好青年だったとはな」

「――――黙れ」

苦笑した迅に対し、レオハルトは前へ出た。身を低くした瞬発に、地面を蹴る度に加速を入れて即座にトップスピードへ至ると、そのまま迅へ連続斬りを見舞う。

――それは大戦時、多くの勇者の一族を葬ったレオハルトの剣技が生む斬撃の嵐だ。

だが、対する迅はその全てを大剣で受け流してみせた。しかも驚く事に、レオハルトの剣を受ける迅は、剣術とは程遠い――反射神経とパワーだけで無造作に大剣を振る動作

しかしていない。そうしてこちらの剣技を捌き、激しい剣戟音を無数に響かせながら、

「これだけやるなら、その若さで魔王を張れるのも頷ける……何よりお前さん、良い眼をしてるんだよな。うーん、こりゃ腐ってるのは他っぽいな」

迅は見透かしたように笑った。勇者の一族とはいえ人間だ――本来なら魔族より身体的には数段劣る種族で、しかも人の寿命を考えると身体能力のピークは過ぎている筈なのに。迅の身体能力は、現役の魔王であるレオハルトと同等以上だった。

……デタラメだな……これがジン・トージョーか、

強い――戦神の二つ名は伊達ではないという事だ。十六年前まで行なわれていた先の大戦では、最後までレオハルトは迅と戦場で会う事はなかったが、

……これ程の力の持ち主ならば。

あの大戦でレオハルトと同等の戦果を挙げていた高位魔族が消息を絶ったのは、迅に倒されたからだという話も頷ける。あれから十六年が経ち、レオハルトはこれまでずっと研鑽を積んできたが、恐らく今の迅はそんなこちらとそう変わらない力を有している。

大戦以降――いや、大戦中もここまでの強敵と相見えた事はない。

「――――だが！」

レオハルトが、今までより数段上の速さと鋭さのある横薙ぎの剣閃を放つと、それまで

とは異なる金属音が鳴り響いた。レオハルトの魔剣が、迅の大剣を両断したのだ。
「おおっ――!?」
驚きに眼を見開いた迅へさらに斬り返しの一撃を放つが、それは向こうのバックステップによって躱される。そして迅は、レオハルトの魔剣が闇色のオーラを立ち上らせているのを見て、「へえ」と感嘆の声を漏らすと、折れた大剣を地面へと放り、
「ただの魔剣じゃないとは思っていたが……流石は魔王の武器ってところか」
「そういう事だ――悪く思わないで貰おう」
レオハルトの魔剣ロキは、魔界に現存が確認されている魔剣の中でも最強クラスの一本だ。そして戦闘力が互角なら、後は武器の優劣が勝敗を分かつのは必然――だから、
「――喰らい尽くせ、ロキ」
レオハルトがそう静かに呼び掛けると、
『――――』
手の魔剣が応えるように闇を纏い始めた。元最強の勇者を倒す偉業と、その事で得られる求心力や影響力の代償として考えれば、この城が全壊したところで問題はない。
だから――魔剣ロキの闇の波動を極限まで増幅し、レオハルトは解き放った。
――轟っと大気を巻き、空間を歪ませる闇の奔流が巨大な剣身から走った。

それは迅を呑み込み、肉体はおろか霊子の欠片一つ残さず消し去る一撃だ。
勝負は決した――その筈だった。だが、魔王レオハルトは見る。
闇の波動に呑み込まれる直前、東城迅が不敵な笑みを浮かべたのを。そして、
「おおおお

……さて、こんなもんで充分だな。

東城迅は、ここへ来た目的が達せられた確信を得た。

――レオハルト自身に野望があるにせよ、その周囲に黒い欲望じみた思惑があるにせよ、現魔王派が勢力の拡大を続け、穏健派を滅ぼすような事態は避けなければならない。

そのためには、新たな魔王の実力やカリスマ性に対する信頼を一旦揺るがし、配下を動揺させるのが一番だ。だからこそ迅は、周囲に一般兵士というギャラリーがいる中庭を選び、そこでレオハルトと戦ったのである。そして今のレオハルトの一撃は、恐らく彼が周囲に己の力を誇示するために見せた取っておき――迅はそれを撃ち返した。

レオハルトの一撃を跳ね返し、さらには王城の一部にも脅威が存在する事を見せられた。これで現魔王派の上の連中が肝を冷やしたり、下の者達が動揺や不安を得て、

……少しは抑止力になってくれれば良いがな。

そう思いつつ姿を晦まそうとした時だった――東城迅は、ふとあるものを目撃して、

「――――っ！」

次の瞬間、弾かれたように動いていた。

爆発の衝撃の余波によって混乱が渦巻く中――魔王レオハルトはそれを目撃した。

迅が中庭を一瞬で駆け抜け、落ちてゆく瓦礫の中へと突っ込むように飛び込んだのだ。

……混乱に乗じて逃げるつもりか？

城壁の向こう側は崖だが、その下は水堀だ。たとえ落ちても水が落下の衝撃を和らげるだろうし、助かる可能性は高い。だが、落下している大量の瓦礫の中には、一部城壁の形を残した巨大なものもある。迅の身体能力なら、壊れていない他の方角の城壁であろうと楽に飛び越えられる筈だ。一体なぜ――思わず眉を顰めたレオハルトは見る。

宙へと身を躍らせた迅が、瓦礫と共に落下する小さな身体へと手を伸ばし――そして抱き寄せたのを。軽装鎧姿から察するに、城壁の上で見張りをしていた兵士か。とはいえレオハルトの攻撃に巻き込まれた格好だし、敵である迅が気に掛ける必要はない。だが、

……あれは。

迅が抱き寄せたのは明らかに子供だった。幼いながらもその実力の高さを評価され、王城警備に登用された少年兵がいた事をレオハルトは思い出す。

子供とはいえ魔族だ。実力の高さも評価されている。水堀に落ちた位で死ぬ事はない。

だが――一緒に落ちている大量の瓦礫に巻き込まれたり、それこそ爆発の衝撃で気を失っていたりしたら溺れ死ぬ可能性はあった――だからこそ、宙の迅はさらに動いた。

「っおおおおおおおおらあああぁぁぁ――っ！」

少年兵を抱き寄せた状態で、真上に右足を振り上げるようにして蹴撃を放ったのだ。

それは真上から降ってきていた巨大な城壁の一部を粉々に破壊した。爆発にも似た激しい破砕音が響き渡る中、レオハルトは遥か視線の先――宙の迅と眼が合う。

「――――」

レオハルトを見る迅の顔には、不敵な笑みが浮かんでいて――その表情のまま、大量の瓦礫と共に迅は崖下へと落ちていった。それを見て、

「――追いますか、レオハルト様？」

傍らに姿を現したバルフレアが問い掛けてくる。だが、

「……いや、その必要はない。あの男が相手では、無駄骨に終わるだけだ」

レオハルトは首を横に振ると、バルフレアに兵の負傷状況の確認や瓦礫の撤去を指示。最後に迅達が落ちていった方を一瞥すると、踵を返してひとり城内へと戻っていった。

2

成瀬澪は、夜中に眼を覚ましていた。

この日見た夢の内容が余りにも過激すぎたせいだ。だから、

「……やだ、あたし何て夢……っ」

澪は思わず赤面する。布団の中は信じられない程の熱が篭もっていた。夢のせいですっかり火照った躰が、身震いしてしまう程の甘い熱気を発している。しかし無理もなかった。それだけの事を、澪は夢の中でされていたからだ——己の主・東城刃更によって。

——それは、ゾルギアとの戦いの後に刃更の部屋でされた事の続きみたいな夢だった。夢の中の澪は、刃更の部屋のベッドで、強引に快楽を与えられ続けていた。連続して刻まれる激しい絶頂——だが、それならば既に澪も経験している事だ。問題なのは、

……柚希や万理亜、ゼストやシェーラも一緒にだなんて……っ。

刃更だけでも充分に澪を屈服させられるというのに。柚希達までもがそれを手伝っていた。上半身裸の刃更といやらしい下着姿の四人に、澪は着ていた服を一枚ずつ剝ぎ取られ、胸も尻も太股も、恥ずかしい所を全て滅茶苦茶にされた。余りの激しい快感に、澪は信じられない程に乱れて——刃更をお兄ちゃんと呼びながら、何度となく絶頂した。

そして、ショーツを脱がされかけた所で眼が覚めたのである。もし、あのまま眼が覚めなかったら。自分は一体どうなっていたのだろう。夢の続きを想像した澪は、

「っ——ふあああぁぁんっ、っ……な、何……!?」

不意に左胸に生じた甘い痺れに、慌てて布団を捲ると、一体いつの間に潜り込んだのか――澪に寄り添うようにして万理亜が眠っており、赤ん坊のようにこちらの左胸を吸っていた。ご丁寧にパジャマのボタンが開けられている辺り、流石は淫魔といったところか。

よって先程の夢を見せた犯人が判明した事に、無言で拳を振り上げた時だった。

「……お母さん」

こちらの胸から口を離した万理亜が、寝言を呟いたのを澪は聞いた。だから、

「……」

澪は静かに嘆息すると、万理亜を起こさないようにそっとベッドの外へ。そしてパジャマのボタンを閉じると、万理亜に布団を掛け直してから静かに部屋を出た。

――澪がその足で向かったのは一階の浴室だった。おかしな夢を見せられたせいで、少し汗を掻いてしまったからだ。しかし一階へ降りた澪は、脱衣所の扉の下から中の明かりが廊下に漏れているのを見る。誰かが消し忘れた可能性を思いながら扉を開けると、脱衣所には先客がいた。バスタオル一枚だけを巻いた姿で佇んでいるのは、透き通るような美しさを持った少女――野中柚希だ。恐らくは風呂上がりなのだろう。髪はまだしっとりと濡れ、身体からはほんのりと湯気が立ち上っている。そんな柚希を見て、

「……アンタね」

澪は呆れたように言った。別に夜中に入浴していた事を咎めるつもりはない。自分だってこれから入るつもりでここへ来たのだ。問題なのは、

「お風呂に入るなら、せめて鍵くらい掛けなさいよ」

ゾルギアとの戦いの後――眠れずにいた澪を、自分の部屋で襲いかけてしまった事が余程ショックだったのか。すっかり自分の理性を信じられなくなった刃更は、翌日には東城家の脱衣所の扉に鍵を取り付けていた。これで刃更の入浴中に後から万理亜や柚希が一緒に入ろうとしたり、逆に澪達が使用中に刃更が入ってきてしまう事故を防げる。

それなのに、鍵はおろか扉に「女の子入浴中」の札すら掛かっていなかったではないか。

「あたしだから良かったものの、刃更だったらどうするつもりよ？」

「別に刃更になら見られても良い……むしろ、澪よりも刃更の方が良かった」

と、少し不満そうに柚希。

「――そうしたら、久しぶりに刃更と一緒に入る事ができた」

「四日前までみんなで一緒に入ってたでしょうがっ！」

ゾルギアと戦ったのは、まだ三日前の事なのだ。やれやれと嘆息した澪の眼の前で、バスタオルの結び目を解いた柚希が、服の入った籠へと手を伸ばし、

「ちょっと待ちなさい」

「……今度は何？」

思わず制止したこちらに、とあるTシャツを手に柚希がさらりと問い返してくる。

「何で洗濯に回す方の籠から、刃更が今日着てたTシャツを取り出してんのよ？」

「今の私はお風呂上がり。早く服を着ないと風邪を引いてしまう」

「だったら自分の服に着替えなさいよ！　着るものは幾らでもあるでしょうが！」

「……解った」

すると柚希は残念そうに言った。

「こっちの刃更のYシャツは澪に譲る」

「あたしにも着させろって意味じゃなくてっ！」

柚希から刃更の洗濯物をふんだくると、澪は元の籠へと叩き込んだ。そして上だけ着ていたパジャマを脱ぎ、ショーツから片方ずつ足を抜くと、それらも籠の中へ入れ、

「どうしても刃更の服が着たいなら――アイツに頼んで許可を貰ってからにしなさい」

フンと告げると、浴室の扉を開けて中へと足を踏み入れた。

「全く……」

まずはシャワーで汗を落とすと、澪は湯船の温度をチェック。先に入った柚希が追い焚きを済ませていたお陰で適温な事を確認すると、そのままお湯の中に身体を入れた。

そして全身をリラックスさせて一息を吐くと、

……あ、もしかして……。

柚希がこんな夜更けに風呂に入っていたのも、自分と同じように寝汗を掻いてしまったからなのだろうか――それこそ同じような夢を見たせいで。そう思った瞬間、

「んっ……」

湯船の中で心地の良い寒気を得た澪は、ブルっと躰を震わせる。先程の夢の内容と、そこで刃更達によって自分が刻まれてしまった快感を鮮明に思い出してしまった。

……夢、で良いのよね……？

どこか自信が持てないのは、催淫の呪いが発動している時は、甘い熱で意識がぼんやりしているからだ。刃更がくれる快楽に理性や羞恥を塗り潰され、いつも澪は現実感を喪失してしまう――だから、実際にああいう事があったとしてもおかしくはないのである。

だが、成瀬澪はその可能性を否定した――何故なら、ゾルギアとの戦いの後に保護したゼストと万理亜の母シェーラの二人は、既に東城家を後にして魔界へと戻ったからだ。

「……」

湯船から上がった澪は、身体を洗いながらその時の事を思い出した。

二日前――ゾルギアと戦った翌日、澪達はすぐに穏健派の魔族とコンタクトを取った。

そして昨日。ゼストとシェーラを迎えに東城家へ現れたのは、万理亜の姉の部下と名乗った女性魔族と、そしてもう一名の付き添い――滝川八尋だった。

……ラース、ね。

そして澪と柚希は、その場で滝川本人の口から彼の正体について説明を受けた。澪達が比較的穏やかにその事実を受け入れられたのは、刃更から先に滝川が魔族である事や、秘密裏に彼と手を結んでいた事などを聞かされていたからだ。

……だけど。

ゼストとシェーラを迎えに来た女性魔族に対しては、澪・刃更・柚希の三人が態度を硬化させる一幕があった。母親のためとはいえ、ウィルベルトの娘である澪や穏健派に対して裏切りとも取れる行動を取っていた万理亜を、引き渡すように言ってきたからだ。

澪達がこれを拒否すると、「上から命令を受けています」と女性魔族も引かなくて――あわや一触即発になりかけた状況を救ってくれたのは、万理亜の母シェーラだった。

……凄かったわね。

迫力の笑み一発。万理亜より幼い外見なのに、シェーラが今回は自分とゼストだけで退くように告げると、女性魔族は渋々ながらも穏健派のトップ――先代のウィルベルトの兄ラムサスにもう一度判断を仰ぐと譲歩した。

一方――ゼストは魔界へ戻り、証人保護のような形で穏健派に協力する事に異論はないようで、そのまま大人しく連れて行かれた。ただ、この家へ連れて来てから迎えが来るまでの短い間だけだったが、ゼストは刃更に対して常に従順で――主従契約こそ結んでいないものの、まるで刃更を新たな主として忠誠を誓っているかのようだった。

ゼストは美人だしスタイルも良い。それに澪や柚希にはまだ備わっていない大人の女の色気もある。おまけに刃更が別れ際に「何かあったらすぐにこの家へ戻って来い」と告げると、ゼストはそれはもう潤んだ瞳で刃更を見詰めていた。放っておいたらキスするかと思った程だ。あのまま一緒に暮らしていたら、さぞかし良くない事になっていただろう。

しかし――大人の色気というなら、他にも脅威が身近な所にいる。

……まさか、成体化した万理亜があんなに美人だったなんて……。

ゾルギアとの戦いの最中、澪は万理亜の成長した姿を目の当たりにしたのだが、あんな美人に変身できたとは知らなかった。ただでさえ最近の刃更は、段々理性が飛びやすくなっている。あんな万理亜に迫られたら、いつ間違いが起こってもおかしくない。とはいえ、あの姿に変身するにはかなりの力を消費するため、しばらくは無理らしいが。

「危ないところだわ、本当に……」

全身を洗い終えた澪は、シャワーで泡を流すと浴室を出た。脱衣所には既に柚希の姿は

なく、棚にストックされているバスタオルを身体に巻いた澪は、

「……」

ふと気になって洗濯物の籠の中を見る。すると例の刃更のTシャツがなくなっており、

「あの馬鹿……！」

どうやら本当に刃更へ聞きに行ったようだ。ならばこうしては居られない。バスタオル一枚で行ったにせよ、刃更のTシャツだけを着て行ったにせよ、そんな格好の柚希をこんな深夜に刃更の部屋へ入れさせたら、どうなるか解ったものではない。

柚希への対抗心を燃やしながら、それでも成瀬澪は同時に安堵も得ていた。それは、

……柚希に嫉妬しても平気になったのは助かるわね。

主への後ろめたさで呪いが生じる主従契約魔法において、嫉妬という感情は基本的に御法度だ。しかし同じ主と主従契約を結んでいる者同士という事で、以前のように柚希への嫉妬で呪いが発動する事はなくなっていた。自分以外の配下が、慕っている主から褒められたり寵愛を受けたりしているのを見れば、羨まない者はほとんどいない。しかし、その度に呪いが発動していては、二人以上の配下を持つと主従の信頼関係を深める事が難しくなってしまう。配下同士が、主の足を引っ張り合う事にも繋がるだろう。よって主従関係を深めるために生み出されたこの魔法は、そうならないようきちんと考えて作られていた。

だが呪いが発動しないからといって、好き勝手をさせる訳にはいかない。

慌てて柚希の後を追おうとした澪は――そこでふと動きを止めた。洗濯籠の中に、刃更のYシャツが残っているのを見たからだ。

「……っ」

ゴクリ、と生唾を飲んだ。柚希は既に刃更のTシャツを持って行っている。澪は身体に巻いていたバスタオルを解くと、刃更のYシャツをそっと胸に掻き抱いてみた。すると、

……っ、やだ……刃更のシャツってだけで、何でこんなに気持ち良いの……っ？

柚希と違い、隠れて刃更の洗濯物を手に取る行為は、澪にとって僅かだが刃更への後ろめたさへ繋がって。薄っすらと呪いを発動させた澪は、刃更のYシャツで感じてしまう。

呼吸と鼓動を速くした澪は、刃更のシャツへと袖を通してゆく。湧き上がる快楽に無意識に腰を揺らめかせながら、澪は全身で刃更を感じてしまおうとした――その時。

「――澪さまぁ、こちらですかー？」

外から脱衣所の扉が開けられた。次の瞬間、互いの視線を交錯させた澪と万理亜は、

『――――』

二人同時に固まる。柚希が脱衣所から出て行った以上、当然ながら扉の鍵は開いたままだ。今更ながらにその事実に思い至った澪が、頭の中を真っ白にしていると、

「……ふっ」

万理亜が、無駄に慈愛たっぷりな笑みと共にガチャリと扉を閉めて。

直後――扉の向こうで、歓声と共に凄まじい勢いで階段を駆け上る音が生じた。

「な、何だ……っ!?」

全力で階段を駆け上ってくる音に、東城刃更は困惑を得た。別に眠っていたわけではない。つい先刻バスタオル姿でやって来た柚希に起こされ、寝起きばなに刃更のTシャツを着させて欲しいと懇願されたからである。意味も解らぬまま寝ぼけ半分で頷くと、柚希はその場でバスタオルを解いて着ようとしたので、必死にそれを制止して自分の部屋へ帰したばかりだ。今度は一体何事かと刃更が身構えると、扉の向こう――廊下の奥から、

『刃更さん刃更さんっ、聞いて下さいよ刃更さんっ！　Hな夢を見た澪さまが、それはもう嬉しそうにいやんあはんと寝言を連発してたのに、いつの間にやらベッドからいなくなったと思ったら、エロい寝汗を流すためかお風呂に入った挙げ句、脱衣所でとんでもない事をっ。澪さまってば、お風呂上がりに刃更さんの洗濯もぶごるぁべっ……』

「お……おい、どうした万理亜……っ？」

突如訪れた静寂に刃更がベッドから降りようとすると、扉の向こうから慌てた声で、

『へ、平気よ刃更。もう万理亜ってば、おかしな夢でも見て寝ぼけちゃったみたい』

「いや、でも……何か凄く鈍い音が聞こえたような気が――」

『気のせいじゃない？　それより明日は学校なんだから、早く寝ないと駄目よ。私も部屋に戻るわ――万理亜がもう寝ぼけたりできないように、ちゃんと眠らせてあげないと』

お休み――と言い残し、ズルズルと何かを引き摺りながら澪の足音が遠ざかってゆく。

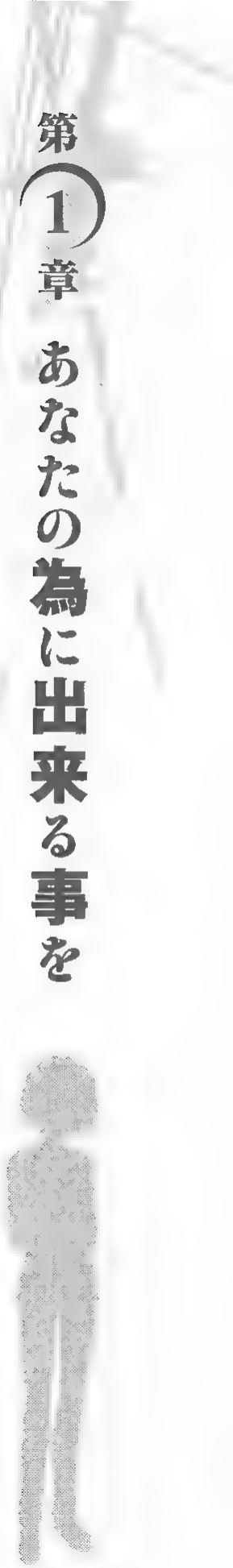
扉の向こうが一体どんな状態だったか気になるのだが、ピチョン……ピチョンと水滴が床に落ちる音が軽いホラーを思わせるため、うっかり扉を開ける事もできない。

万理亜がふざけるのはいつもの事だし、澪もしばき慣れている。

「えっと……だ、大丈夫だよな……？」

朝になって扉を開けた時――廊下が血の海とか嫌だぞ？

第1章　あなたの為に出来る事を



1

聖ヶ坂学園の校舎内に、人口密度の高い空間があった。
活気を帯びたさざめきが満ちているのは、放課後の視聴覚室だ。
――現在、この視聴覚室にはとある任務を任された者らが集いつつある。
来月に開催を控えた体育祭――その実行委員のメンバー達だ。黒板前に置かれた折り畳み式の長机では、夏休み前から事前準備を進めていた生徒会の面々が、今回から委員会に参加する者達へ配る書類の仕分け作業をしていた。委員会の開始時間が迫る中、
「しかし、男子ばっかり凄い人数だよねー……」
左前方の席に座っていた東城刃更は、一列前の席から発せられた感嘆の声を聞いた。

跨ぐようにして後ろ向きに椅子へと座り、刃更の背後――部屋の後方を見ながら言ったのは、クラスメイトの相川志保だ。すると、彼女の隣の榊千佳も同意の頷きをして、

「うん……これってやっぱり、二人がいるからだよね」

そう言って視線を刃更へと向けてくる――正確には刃更ではなく、刃更の左右に。

すると、この視聴覚室の現状を生み出している原因達が口を開いた。

「別に、あたし達がいるからってだけじゃないと思うけど」

「多分、そんなに関係ない」

さらりと言い放ったのは、聖ヶ坂学園の一部の男子から「姫」と呼び慕われている少女達――成瀬澪と野中柚希だ。しかし、二人の言葉には多少の無理がある。こういうイベントで騒ぎたい者は男子に多く見られるものだが、これは明らかに偏りすぎている。

――事の発端は、刃更と澪と柚希の三人が一年B組の実行委員へ立候補したからだった。本来は一昨日にあったLHRで決まらなければいけなかったのだが、誰も希望者がおらず。なるべく自主性を重んじるため、第一回の委員会がある今朝まで粘ったが、それでも決まらなかったため、ならば好都合とばかりに刃更達が手を挙げた。

体育祭については、澪や柚希と家で話していた事があったからだ。

本当ならそれで話は終わる筈だった。ところが、そこからは「じゃあ俺も」「なら俺も」

の嵐になり。見かねた担任の坂崎が、定員を五人に絞ってクジ引きを提案。

そして――最終的に決定したのが東城刃更、成瀬澪、野中柚希、相川志保、榊千佳の五名だった。男女比率がおかしいという異論も出たが、クジが公平に行なわれた事もあり坂崎はこれを却下。どうにか実行委員が確定したのだった。ところが、

……情報が広まるの早すぎだろ。

通話アプリかＳＮＳか知らないが、恐らくこの数時間で、全校中に澪と柚希が体育祭実行委員になった事が広まったに違いない。すると相川が意地の悪い笑みを見せながら、

「ねえ東城、ちょっと後ろ向いてみなよ」

「……勘弁してくれ。こっちは先刻から、後頭部に視線を感じすぎてハゲそうなんだ」

今の俺の後頭部は、間違いなく女の子の胸元以上に男の視線に敏感だぞ。軽く生命の危機を感じるからな。刃更が心底げんなりしながら言うと、

「あはは、大変だね東城君……」

眉尻を下げながら優しい慰めの言葉を掛けてくれた榊に、刃更は嘆息で応えた。

――刃更が相川や榊とこうやって仲良く話すようになったのは、ここ数日の事だ。

ゾルギアの一件で精神を操られてしまっていた時の事を、相川や榊は覚えていない。

だが後日、記憶の一部が曖昧になっている事に不安を抱いた二人は、正気を取り戻した

際に眼の前にいた柚希に説明を求めた。すると必然的に会話の機会が増加し、これまでは澪と仲良くしていた相川と榊は、柚希とも仲良くなっていったのである。

とはいえ柚希は元からそんなに口数が多い方ではない。今も澪達が会話に花を咲かせている中、一人マイペースに本を読んでいる。ただ、そうした柚希の性格を相川や榊も既に理解しており、特に気にする事なく澪との会話を続けていた。そして、そんな澪や柚希と同居している刃更もまた、自然と相川や榊と話をするようになって。そうしたここ数日で起きた関係の変化を思いながら、刃更はふと、澪と話している榊の横顔を見た。

『お願い東城君……私の事も見て』

榊は精神を操られていた時、刃更に好意を抱いているような事を言っていた。

あれは洗脳によるものだったのか、榊の中に元から存在していた感情を利用されたのかは解らない。真実は気になるが、かといって無理に聞き出す訳にもいかない。一つだけ解っているとしたら、榊千佳がとても優しい女の子だという事だ。だから、そんな彼女が無事に助かって、今こうして笑っている——ならば、それで充分だと刃更は思う。

——ところが、そうして榊を見ていた事が気に入らなかったのか。

不意に机の下にある刃更の太股に細い手が置かれた。

「っ——？」

突然の事に一瞬だけ身を固くすると、

「？　どうかした？」

「い、いや……何でも」

隣の澪から不思議そうに問われ、刃更は言葉を濁した。澪が怪訝そうにしながらも相川や榊との会話に戻ると、刃更は己の太股を触っている少女を見た——柚希だ。

逆隣の澪は勿論、前の列に座っている相川や榊からも机の背板で死角となるため、柚希が机の下で刃更の太股に触れている事実に気が付く者はいなかった。

——先日のゾルギアとの戦いの後、刃更は澪や柚希、万理亜とキスをしてしまった。

それからだ——柚希が今まで以上に、積極的に刃更へ迫ってくるようになったのは。

「——————」

刃更が咎める視線を向けるが、柚希は机の上に置いた文庫に視線を落としたまま素知らぬフリ。そして時おり片手でページを捲りつつ、あろう事かこちらの太股を撫で始めた。

……おいっ、ちょっと待て柚希っ！

サリンジャーなんか読みながら、他の奴に内緒で人の内股を撫でてくるとか、いつの間にそんなエロい文学少女に——ちょっ、それ以上されたら俺のライ麦畑が凄い事に……って、何だよ俺のライ麦畑って。刃更が他の三人に気付かれないように、太股を撫でる柚希

の手を摑むと、柚希はそのまま刃更の手に指を絡めてきて、
「……っ」
これはこれで危険な状態だが、かといってこの手を放せば今度はどこを触られるか解らない。仕方なく刃更が、己の左手を柚希の好きにさせていると、
「――よお澪姫」
不意に横から澪へと声が掛けられた。そして刃更の反対側――澪の右隣に無遠慮に腰を下ろした男子に、澪はチラリとそちらを見ると、そっけない声音で言った。
「堂上先輩……どうも」
刃更も知っている顔だった。前に刃更を校舎裏で取り囲んでくれた澪と柚希のファンの内、澪のファンを束ねていたリーダー格の青年だ。確か名前は堂上翔平。
「……三年生は受験があるから、実行委員は一・二年だけだって聞いてますけど？」
視線をあまり合わせないまま澪が問い掛けると、
「そりゃ基本的にはそうなんだろうが、絶対に禁止されているって訳じゃないだろ。澪姫がいるっていうなら、俺らだって参加しない訳にはいかないって――なあ？」
堂上が向こうを振り返ると、そこには見覚えのある他の澪ファン達の姿が。そして、
「柚希姫――」

今度は、逆側からも静かな呼び掛けが来る。

……今度はこの人か。

穂積海司。柚希派のリーダーで、やはり彼もかつて刃更を校舎裏へ連れて行ってくれた三年の男子だ。ただ、こちらは堂上よりも気が回るのか、他の柚希ファンを少し離れた場所に待たせている。刃更がバレないように、そっと柚希から手を放すと、

「僕らも実行委員に参加させて貰う事にした――よろしく頼むよ」

優等生然としながらも柔和な表情を浮かべる穂積に対し、柚希はチラリと一瞥すると無言を返した。うーん、明らかに不機嫌になっている。しかし穂積は、そんな冷たい柚希に満足そうな表情を浮かべると、そのまま他の柚希ファンの下へと戻っていった。

ところが――そんな穂積とは対照的に、堂上は一向に澪の傍から離れようとせず、

「受験とか将来とかも、そりゃあもちろん大事だぜ？　でも俺としてはさ、それ以上にこうして姫と過ごす今っていう時間も大切にしたいって訳だよ」

見た目も言っている事もそれなりに格好良いのだが、微妙に馬鹿っぽく聞こえるのは何故だろう――なんて思いながら堂上を見ていたら、思いきり睨まれたので刃更はスッと眼を逸らした。澪や柚希だけでなく、今は相川や榊も居るのだ。二人の表情には、若干だが堂上達に囲まれた事による怯えの色がある。ここで揉め事は避けるべきだろう。すると、

「おーい堂上……そろそろ自分達の席へ行ってくれるか？　委員会が始められない」
ふと横から助け船が入った。刃更達のクラス担任・坂崎守だ。
「その辺は一年の席、三年は後ろだ。お前達の自主性に免じて、特別に参加を許可してるんだからな。後輩達のお手本として、ルールは守ってくれよ？」
堂上は不機嫌そうな顔をしていたが、坂崎がいつもの爽やかな笑みを崩さずにいると、
「……チッ。ハイハイ解ったよ。じゃあ、またな姫」
やがて舌打ちを一つすると、取り巻きと共に澪の隣から去っていった。だから、
「助かりました先生……ありがとうございます」
「なに、気にしないでくれ。お前らが悪い訳じゃないんだからな」
刃更がお礼を言うと、坂崎は表情を苦笑に変えながら言った。
「でも、何で先生がここに？　実行委員の監督って、二年の体育教師の仕事ですよね？」
「そうなんだが……後藤先生が急なギックリ腰らしくてな。他の体育の先生達は、それぞれ部活の顧問で忙しいし、特に担当を持っていない俺にお鉢が回ってきたんだ」
「あちゃー。マモちゃんてば貧乏クジだー」
やれやれと肩を竦めた坂崎に、ご愁傷様と相川が茶化すと、
「仕方ないさ。こういう仕事は、若手がやらされるもんだ」

そう言って、坂崎は作業している生徒会メンバーの方へと去って行った。すると、
「でも、良かったの成瀬さん……それに野中さんも。その、先輩達にあんな態度取って」
それまで黙っていた榊が、心配そうに二人に問うと、
「良いのよ。あの人、よっぽど自分に自信があるのか知らないけど、馴れ馴れしくすればあたしがなびくとでも思ってるみたい。馬鹿みたい……勘違いもいい所よ」
「こっちも問題ない。以前、彼らにちゃんと言っている――貴方達に興味はないって」
「うっわ……容赦ないね二人共」
「別に。事実を言っただけ」
「そうよ。変に期待させても面倒でしょ」
柚希と澪が、穂積や堂上らをバッサリと一刀両断した時だった。
黒板前の長机の席から、生徒会の腕章を着けた女子生徒が立ち上がって、
「――それでは、そろそろ第一回体育祭実行委員会を始めます」
初めての会合の開催を告げる宣言を行なった。すると他の生徒会メンバー達が、一斉に書類を配り始める。そして、そのレジュメが全員に行き渡ったのを確認してから、
「本年度の体育祭実行委員長を務めます、生徒会副会長の梶浦立華です」
よろしくお願いします、と落ち着いた声音で告げると、室内を拍手が包み込んだ。

――聖ヶ坂学園では、文化祭は春に、体育祭は秋に行なわれる。これは学生生活最大にして生徒会執行部にとって集大成のイベントともいうべき文化祭を、受験を控えた三年の執行部メンバー主導で行なえるようにするためだ。そして秋の体育祭は、翌年の文化祭運営のための登竜門として位置付けられており、経験を積むため三年は手を出さず、二年主導で行なわれる。つまり副会長の梶浦が、今回の体育祭の総責任者という訳だ。

「まず、事前に委員会メンバーのリストを先生から受け取ったところ、どうやら今年は例年の二倍近くの人達に集まって貰えたみたいです」

ただし、と梶浦は釘を刺す口調で、

「人数が多い事はありがたいのですが、一部の部署へ希望者が殺到した場合は、別部署へ回って貰う人が出る事を承知しておいて下さい。今年は例年よりメンバーの統率が厳しくなる事も……関わる人間が多くなれば、それだけ全体の統制が難しくなりますから」

毅然としたその宣言に、室内に僅かなどよめきが生まれる。

……ま、仕方ないだろうな。

梶浦は、不純な動機で参加している者が多い事を理解しているのだろう。おまけに今回は、イレギュラーで堂上や穂積のような三年生までいる。そんな大所帯を二年生が仕切ろうというのだ。トップの梶浦は相当の覚悟と決意で臨む必要がある。

「――では、まずは各部門への割り振りを決めます。お手元のレジュメの二枚目から三枚目が、各部門の担当する仕事内容についての簡単な説明です。今から十分ほど差し上げますので、時間までに内容を確認して自分の希望を決めて下さい」

ではどうぞ、と言って梶浦が着席すると、視聴覚室内が一斉に騒がしくなった。

「――さて、あたし達はどうしよっか？」

前の相川がこちらを振り返って尋ねてくる。すると隣の澪がレジュメから視線を上げて、

「えっと……あたしは、どうしようかな。刃更はどうするの？」

「そうだな……」

問われた刃更は、レジュメに書かれている各部門の説明書きにざっと眼を走らせた。

競技の考案から当日のプログラムの順番などの立案と決定をする『企画運営』。

ホームページやパンフレットなどの作成・更新を行なう『宣伝広報』。

使用する体育用具やテント、放送機器などの各種申請を行なう『機材管理』。

全体の予算管理と当日の記録や得点の集計を行なう『記録会計』。

入り口のアーチの作成や、当日の設営から運営サポートまでをこなす『総務補助』。

恐らく、本来この中で最も人気が高いのは体育祭の内容決定に携われる『企画運営』だろう。作業として負担が軽いのは『機材管理』、次いで『宣伝広報』といったところか。

そして大変なのは間違いなく『記録会計』と『総務補助』だ。この二部門が最も人数を必要とするし、ここにいる大多数がどちらかに配属されるだろう。刃更としては、余っているところや、人手が不足している部門へ配置してくれればそれで良いのだが、

……問題があるとしたら。

澪や柚希目当ての連中が居るとは思っていたが、堂上や穂積らまで参加するとは思っていなかった。刃更が彼らと同じ部門に入れば、恐らく空気は悪くなる。かといって刃更と澪や柚希が一緒になり、彼らが別部門に配属になればやっかまれてしまう。

だが、澪や柚希を連中と一緒にして自分だけ外れるのも可能なら避けたいところだ。下手をすると、委員会全体に迷惑を掛ける事になる。刃更が慎重に考えていると、

「あの……ちょっと良いかな？」

ふと横から呼び掛けられ、刃更は「ん？」と顔を上げた。そして、

……あれ？

声の主を見た刃更は、俄かに混乱を覚えた。声を掛けてきたのは可愛らしい顔をした女子だった。さらさらのショートヘア。眼鏡の奥にある大きな瞳は少し気弱そうな小犬のようで、思わず庇護欲をかき立てられる。そこまでは別に良い。問題なのは――少女が着ている制服が、刃更と同じ男子のものだという事だ。他の四人も刃更と同じ疑問と混乱を得

たのだろう。誰もが適当な言葉を探す中、

「えっ、何で男子の制服着てんの……？」

相川が、誰もが思っていながらも言わなかった事をあっさり口にした。

「あの……紛らわしくてゴメンね。これでもボク、男なんだ」

すると困ったように頬を掻きながら、

「生徒会で庶務をしている橘七緒です。えっと、東城君だよね？　それと成瀬さんに野中さんも。どこの部門か考えているところ悪いんだけど」

どこからどう見ても女の子の雰囲気と佇まいで、橘は言った。

「ウチの梶浦副会長が、キミ達に話があるらしいんだ……ちょっと良いかな？」

それから橘に案内される形で、刃更達は隣の準備室へと向かった。

室内は八畳程の広さの空間になっており、壁際には映像資料や機材などが所狭しと収納されていて——そんな準備室の中央に、副会長の梶浦立華が佇んでいる。

「あの、副会長……東城君達を連れてきました」

「……ありがとう橘」

橘に短い礼を告げると、梶浦は刃更達へと視線を向けてきた。どこか冷たい色を宿した瞳が刃更達を射貫く。それから梶浦は小さく嘆息すると、

「時間がないから単刀直入に言うわ――貴方達、実行委員を辞退する気はない？」

一切躊躇する事なく、こちらを呼び出した理由を告げてきた。

……ま、そう来るよな。

刃更は特に驚かない。梶浦の問い掛けは、橘から「梶浦が呼んでいる」と言われた時点でおおよその察しが付いていたものだ。すると梶浦はふっと瞳を伏せたものにし、

「御免なさい……別に貴方達が悪い訳ではないの。ただ先刻も言ったけれど、今回の実行委員の数はやはり多すぎるわ。あんな人数ただでさえきちんと捌くのが難しいのに、彼らの半数近くは体育祭とは別のものにモチベーションを置いていて、おまけにその中には三年生までいる。あんな人達、とてもじゃないけど私達にまとめきれるとは思えない」

「……そうですか」

本来なら実行委員は一・二年で構成される筈だった。それが二年主導で行なわれる体育祭において、実行委員長がきちんとしたリーダーシップを発揮する環境を生み、メンバーをまとめやすくする条件だった筈だ。だがそこに三年が、しかも参加動機が不純な者達が加われば――指揮系統に混乱が生じ、組織の秩序が崩壊してしまいかねない。

梶浦や橘を始めとする生徒会メンバーは、一般の実行委員と違って夏休み前から準備を進めていた。体育祭を成功させるために、夏休みの間もずっと頑張ってきたのだ。

……できればやりたかったけど、仕方ないか。

刃更にしても、自分達がいる事で周囲の迷惑になるのは避けたい。それは、澪や柚希も同じだろう。刃更がチラッと彼女達を見ると、二人は無言で小さく頷いた。だから、

「解りました。残念ですけど――」

辞退を申し出ようとしたところで、準備室の扉が開いた。中に入ってきたのは坂崎で、

「どうした梶浦、そろそろ時間……――何だ、どうかしたのか？」

梶浦や刃更達の間に流れている空気を察して、怪訝そうに尋ねてくる。

「すみません先生……先生のクラスの子達の事なんですが」

監督教諭の坂崎に黙っている訳にはいかない。梶浦が刃更達に辞退を提案した事を告げると、しかし坂崎は「うーん」と思案する表情になった。

「確かにそうすれば成瀬や野中目当ての連中も辞退してくれるかもしれないが……委員会は課外活動の一環でもある。簡単に辞めさせる許可は出しにくいな」

「ですが、このままだと……」

「それに、そうなると他の奴らにも辞退の口実を与える事になってしまう」

生徒側のリーダーとして反論しようとする梶浦に、坂崎は教師の観点で懸念を示す。
「各クラスから選ばれている者達の中には、東城達のような立候補での参加ではなく、他薦やクジ引きで負けたからなど、消極的な理由で選ばれた奴も少なからずいる。もし一部に辞退を許せば、これ幸いと自分も辞めようとする奴らも出てきかねない」
「ならせめて――……っ、……いえ、何でもありません」
とっさに梶浦は何かを言おうとして、しかし俯いて唇を噛んだ。恐らく「せめて、三年生だけでも辞退させられないか」と言おうとしたのだろう。だが堂上や穂積は、澪や柚希のファン達のリーダー格だ。下手に彼らだけを除外すればおかしな逆恨みをされるかもしれないし、それで仕事を邪魔してくるようになったら眼も当てられない。
だったら、と刃更は口を挟んだ。
「あの、梶浦先輩……辞退って選択肢が難しいなら、いっそ俺達を上手く使って貰えませんか？　少しでも体育祭の準備が上手く進むように」
「……大変な想いをする事になるかもしれないわよ？」
苦い表情で言った梶浦に、
「仕方ないです。あたし達も、別に楽がしたくて参加した訳じゃないですし」
「私も……これ位は覚悟の上」

澪が苦笑し、柚希が平然と応えると、梶浦はしばし俯いてから「解ったわ」と呟き、

「成瀬さんは『総務補助』へ、野中さんは『記録会計』へ入ってくれる？　両方とも人数が多くいても構わない部門だし、貴女達が入れば実際そうなるでしょう。確か貴女達のクラスには、他に二人女子が居たわよね？　周りが男ばかりだと仕事がしにくいでしょうから、彼女達にはそれぞれどちらかに入って貰って。そして、この二つの部門長についてはどちらも生徒会メンバーが務めるわ。三年の先輩達に好き勝手は絶対にさせない」

澪と柚希が了承の頷きを返すと、申し訳なさそうに梶浦が言った。

「ご免ね……なるべく貴女達が嫌な想いをしないよう私の方でも最大限注意するから」

その表情が、最初にこちらへ辞退を勧めたのは、実行委員を上手くまとめるために切り離そうとしたのではなく、刃更達を想っての発言だった事を教えてくる。だから、

「じゃあ、俺はトラブルにならないようにその二つ以外の部門ですね」

そんな梶浦に刃更が告げると、

「――いいえ東城君、貴方は全部門を統括する私達生徒会の補佐をお願い」

「先輩達の補佐、ですか……？」

オウム返しに問う刃更に、梶浦立華は「そう」と頷いてから言った。

「他の部門に入るより、その方が何かあった時に自由に動けるわ――いざとなったら私が

指示するから、その時は成瀬さんや野中さんを助けに入ってあげて」

2

その後に行なわれた各部署への割り振りは、予想通りの展開で進んだ。

澪が手を挙げた『総務補助』には堂上ら澪派の男子達が。柚希が手を挙げた『記録会計』には穂積ら柚希派の男子達が挙手。相川と榊も、準備室から戻った刃更達が梶浦から受けた提案を説明すると、それぞれ快く総務と会計に入ってくれた。そして澪と柚希の配置が最大の関心事だったため、刃更が生徒会の補佐になった事が発表されても、さして興味を持つ者はいなかった。そして——どうにか最初の体育祭実行委員会が終わった後。

東城刃更は、澪や柚希と別れて一人で保健室へと向かっていた。約束があったからだ。

澪と柚希は、刃更の用事が終わるのを待っているから一緒に帰ろうと言ってくれたが、……流石に、今日のところはな。

実行委員会でまた目を付けられたのに、目立つ澪達を待たせて後から合流し、見せ付けるかのように一緒に帰るといった、周囲を刺激するような真似は避けるべきだろう。

……折角、実行委員に残れたんだしな。

東城刃更には、今回の体育祭を絶対に成功させたい「とある理由」があった。
あわよくば滝川以外にも友人を作りたい、というのもあるが、それはあくまで二の次だ。
だから、何としても実行委員を最後までやり遂げなければならなかった。その決意を改めて想いながら廊下を歩き続け、やがて目的の保健室へと到着した刃更は扉をノック。
「――すいません、失礼します」
一声掛けて扉を開けて中へ入ると、柔らかな心地の良い空気がこちらを迎えた。
――ここへは何度か来ているが、刃更はこの保健室が学校内で一番落ち着くと思う。
空気が澄んでいるとでも言えば良いのだろうか――無論、人を癒すという保健室の目的を考えればそうあるべきなのだろうし、空気清浄機なども稼働させている。だが、怪我や風邪など身体的不調を持った者が集まる場所の空気は、沈んだ気持ちに引き摺られて淀んだものになりやすい。病院の空気を心地良く感じる者が少ないのが良い例だ。それなのに、この保健室はまるで聖域のような空間が保たれていた。しかし、
「あれ……？」
奥に歩を進めると、窓際にあるデスクにこの部屋の主の姿はなかった。代わりに、入り口側に置かれたベッド――それを仕切っていた白のカーテンの向こうから呼び掛けが来る。
『――その声は東城か？』

「はい、そうです……けど、よく解りましたね先生」
『おかしいか？　お前とは比較的よく話している。声くらい覚えて当然だろう』
「いや、そりゃまあそうかもしれませんけど……」
担任の先生が受け持ちのクラスの生徒の声に聞き覚えがあるのとは訳が違う。全校生徒の面倒を見ている養護教諭が、扉の向こうからの呼び掛けとほんのちょっとの呟きだけで誰か言い当てられるとか、恐ろしい耳と記憶力だなこの人。おまけに、
『……何か失礼な事を思っていないか？』
「いえ、そんな事は全然」
勘も鋭いし。気を付けよう、と刃更が思っていると、
『しかし、丁度いい所に来てくれた――東城、お前に少し手伝って欲しい事がある。すまないが、こっちへ来てくれるか』
「？　ええ、良いですけど……」
具合の悪い生徒を介抱する手伝いかと思ったが――どうやらそれはなさそうだった。
カーテンの向こうには長谷川の気配しかない。だとしたら、ベッドの布団やシーツの交換か何かだろうか。刃更はカーテンの境目から中へと入り、
「へ――？」

そこで思わず固まった。中に居た長谷川の姿を目の当たりにしたからだ。

「――ん？　どうかしたか、東城？」

そんなこちらに長谷川がキョトンとなる――競泳水着に白衣だけ羽織った格好で。

その姿は、既に澪と柚希という二人の魅力的な少女の競泳水着姿を経験し、相当な耐性を持っていた筈の刃更を、それでもなお一瞬の思考停止に陥らせるには充分なものだった。

――東城刃更は、これまで普通に衣服を着た状態の長谷川しか見た事がない。

それでも、あの澪よりも大きい胸や、柚希よりもさらにまろみを帯びた曲線の尻など、長谷川の美しさやプロポーションの凄さは充分に知っていたつもりだった。

だが――それでもまだ解っていなかったのだ。本当に美しい「大人の女」だけが持つ事ができる色気が一体どれだけ強烈なのかを。そんな余りの破壊力に思考を麻痺させられていた刃更は、しかしようやく状況を理解し、

「なっ、何してるんです先生っ!?」

混乱と興奮とがない交ぜになった、上擦った声を上げると、

「ああ……実は今、ちょっと身体の弱い生徒がいるクラスのプール授業を控えていてな」

さらりと長谷川が言った。

「私としてはいつものように見学する事を勧めたんだが、本人がどうしても授業に参加し

たいらしい。生徒に強い意志がある以上、教師としてはなるべく生徒の希望に添ってやりたいだろう。だから、私が傍に付いて見ている事を条件に許可してやったんだ」

ところが、

「残念ながら、既製の競泳水着に私の体型に合うものがなくてな……ビキニのようなセパレーツ型のものなら大丈夫なのだが、『授業でそういったものを着られては困る』と教頭から言われてしまうし。仕方がないから特注で作って貰ったんだが……」

そう言って、長谷川は豊かすぎるほどに膨らんだ胸元へ手をやった。そこには、途中まで開けられたフロントジッパーが深い胸の谷間に呑み込まれており、

「困った事にファスナーが変に噛んでしまって、どうにもならなくなってしまってな。すまないが東城――ファスナーを下ろすのを手伝ってくれないか？」

「え……いやっ、そういうのは教師でも生徒でもせめて女の人に頼むべきじゃ!?」

ＡＶじゃあるまいし、どこの世界に男子生徒に水着を脱ぐのを手伝って貰う女教師がいるんだ。いや、胸が大きすぎて特注品の水着を頼まなくてはならない時点で凄すぎるが。

取り敢えず、なるべく長谷川を見ないように視線を横に逸らした刃更は、

「っ――――？」

またしても見てはいけないものを見てしまう。水着を着るために脱いだ長谷川の服が、

ベッドの上に丁寧に折り畳まれていた。それだけなら良いが、問題なのはその隣にご丁寧に上下セットで置かれている方だ。「教師がこんなエロいのを身につけて良いのか」と突っ込みたくなるような黒のレースの下着だった。水着白衣の養護教諭と、彼女の脱ぎたての下着が存在する閉鎖されたベッド空間とか、どこの異次元だここは。すると、

「確かに、本来ならお前の言うようにするべきなのだろうが……私は女にしては力が強い方だからな。私がどれだけ試しても駄目だった以上、残念ながら他の女性にどうこうできるとは思えない。そうなると男に頼むしかないだろう？」

しかし、と長谷川。

「タイミング良く東城が来てくれて助かった。私としてはお前に頼みたかったんでな」

「は……？　な、何だって俺なんです!?」

「何でと言われてもな……誰に頼むか考えたら、お前しか思い浮かばなかったんだ」

駄目か東城？

「私としても、こんな頼みをする以上――できれば相手くらいは選びたいんだが」

「それはそうなんでしょうけど……」

だからって、何でそこで俺なんだ。困惑と恐縮をしたままでいる刃更に、

「どうしてもお前が嫌というなら諦めるが……」

と残念そうに長谷川。水着の胸元に手をやり、

「それなら、すまないが誰か他の男を呼んできてくれるか？　流石に一度着ただけで、脱ぐのを諦めてハサミを入れるのは避けたい」

その言葉に、とうとう刃更は諦めると、それをそのまま覚悟に変えて、

「……解りました。だったら俺がやります」

深呼吸にも似た嘆息を一つした後、刃更は言った。長谷川には、学校内で澪が主従契約の呪いを発動させてしまった時に厄介になっているし、刃更自身も色々と相談に乗って貰っている。だからこそ申し訳なくて断るべきかとも思ったが、どういう形であれ長谷川に頼られるという事は光栄だし、こんな機会でもない限り恩返しもできない。

……それに。

長谷川は刃更に頼みたいと言っているのだ。それを断って他の男にやらせるというのは絶対に違うだろう。そんな刃更に長谷川は嬉しそうに破顔して、

「そうか。良かったよ、お前が引き受けてくれて」

「……まあ、仕方ないですから」

笑みを浮かべている長谷川の下へ、刃更は歩み寄る。そして始める前に、

「なるべく触れないように頑張りますけど……」

「気持ちは有り難いが、頑張るならファスナーを下ろす事に集中してくれ。下手に遠慮されて状況が改善されなければ本末転倒だし、思い切ってやってくれた方が助かる」

頷きを返した刃更は、まずは長谷川をベッドへと腰掛けさせた。

そして正面に立つと、改めて長谷川の水着がどういうものかを確認する。

……成る程な。

全体の形状こそよくあるワンピースタイプの競泳水着に近いが、左右の肩紐がなくタートルネックのように首の途中まで生地があり、フロントジッパーが設けられた構造。これでは肩や腕を先に抜いて、そのまま下に脱ぐような抜け道も使えないだろう。

「えっと……すみませんが、胸の谷間を開いて貰っても良いですか？　引き手の部分がどうなっているのか見たいので」

「こうか……？」

長谷川は自身の豊満な胸を両手で摑むと、ゆっくりと左右に割り開いた。圧倒的な胸のボリュームと柔らかさを見せ付けられ、刃更の鼓動が否が応でも速くなる。それでも露わになったファスナーを確認すると、なるべく長谷川の胸に触れないようにファスナーの引き手を摘まんで状態をチェック。確かにかなりガッチリ噛んでしまっており、ちょっとやそっとでは上にも下にも動きそうにない。これをどうにかするとなると、

「……ちょっと待ってて下さい」
刃更は長谷川に短く言うと、一旦ベッドから離れた。そして、洗面台に置いてあったハンドソープのボトルを持ってきて、
「これ使って良いですか？　少しでもファスナーの滑りを良くしたいんで」
「ああ、勿論だ……やり方はお前に任せる」
承諾を貰った刃更は、ポンプを押してファスナーの辺りにハンドソープを掛けていった。とろりとした白濁液で長谷川の胸を汚してゆく。さらに表に見えている外側だけでなく、ポンプの先を水着の胸元の内側に入れ、中の方まで丹念に。すると、
「んっ……」
くすぐったさを得たのか、長谷川が甘い吐息と共に僅かに身をくねらせた。
「っ……す、すみません……」
「ああ、つい声が出てしまっただけだ。気にしなくて良い。しかし東城……これではファスナーの滑りが良くなっても、引き手まで滑るようになってしまうんじゃないか？」
当然の疑問を長谷川が口にした。だから、
「はい。でも大丈夫です――引き手は持ちませんから」
「そうなのか？　なら、一体どうやって――」

と言った長谷川の言葉が止まった。刃更の両手が、噛んで止まっているファスナーのすぐ真上――左右のレールを摑んだからだ。そして、

「――――行きます」

そう言うなり、刃更は左右に引き裂くようにして強引にファスナーを割り開いた。

左右の力を完全に均等にした結果、ジャッという音と共にファスナーが一気に下へと降り――長谷川の胸元から臍の辺りまでがまとめて露わになった。すると、水着の縛めから解放された事を喜ぶように、豊かすぎる胸が勢い良く躍り出て、

……あ。

ふと甘い匂いがふわりと香った。それはきっと、水着の中に閉じ込められていた長谷川の身体が発した匂い――長谷川千里という女の香りだ。だから刃更は、

「っ――――!?」

とっさに眼を瞑る事を忘れ、露わになった長谷川の生胸を見てしまった。しかし、

「……想像していたよりは少し乱暴なやり方だったな」

「す、すいませんっ！」

肌を見られてもなお平然とした口調で長谷川が言った言葉に、刃更は慌てて顔を逸らすと、そのまま身体を半回転させて後ろを向いた。すると、

「別に責めた訳じゃない。お前に頼んだのも任せたのも私だし、現にお前はきちんと結果を出してくれたんだからな。ただ――少し意外だっただけだ」

と背後で笑みを含んだ長谷川の声がした。それはこちらをからかうような口調で、

「まさかお前が、こんな強引で乱暴な女の服の脱がし方をするとはな」

「いや、別に好きで乱暴にした訳では……」

ファスナーの状態や、時間を掛けない事、なるべく長谷川に触れたりもせずになど、様々な条件を総合的に勘案した結果、最善と思われる方法を選んだだけなんです。すると、

「とはいえ助かったよ。お陰で買ったばかりの水着を切り刻まなくて済んだ」

「はあ……お役に立てたなら良かったんですが」

「ああ。――ところで東城、もう一つ頼みがあるんだが」

「ま、まだ何かあるんですか……？」

警戒から眉を顰めた刃更に、

「なに大した事じゃない。向こうの薬品棚にあるウェットティッシュと、下の引き出しに入っているハンドタオルを持ってきて欲しいだけだ」

何せ、と長谷川千里が言った。笑みを含んだ声で、

「ベッドの上でこんなに胸を白くベトベトにされていると、まるで私がお前に胸でしてや

ったみたいで、何だか変な気持ちになりそうだ」
「す、すぐ持ってきますっ！」
東城刃更はそう言って――慌ててタオルを取りに走った。それから数分後。
「――待たせたな」
タオルで胸を拭き、服を着替えた長谷川がカーテンを開けてベッドから出てきた。
長谷川はコツコツとヒールで床を踏みながら、刃更が座っているキャスター付きの丸椅子の正面――自身のデスクの椅子へ腰掛けると、足を組んでくるりとこちらに向き直り、
「それで、いったい今日はどうしたんだ？　その様子だと体調不良ではなさそうだが」
「ええ、ちょっと……前に先生と約束したじゃないですか」
ホラこれ、と刃更は左手を見せた。その薬指には、先週の体育のバスケでした突き指の処置で、長谷川に巻かれた包帯がある。
「土日を挟んだ事もあって、先生に手当てして貰ってから結構経ってます。もう痛みもありませんし、そろそろ解いても問題ないか聞きに来たんです」
用件を伝えると、長谷川はこちらの左手を取って患部を見詰めながら、
「……そうか、ちゃんと言い付けを守っていたようだな」
「そりゃ……約束しましたし」

とはいえ、実際よく解けなかったものだと思う。何せ長谷川に包帯を巻いて貰った後、ゾルギアが澪を拉致した事もあって、刃更は滝川と戦い、万理亜を止めるために成体化した彼女と戦い、さらにはゾルギアとも戦った。だが長谷川が巻いてくれた包帯は、そうした激闘を経ても解けたり破れたりする事はなく、今も刃更の指に巻かれている。

養護教諭としての長谷川の技能が、それだけ素晴らしいからなのだろうが。

「――で、取っても問題ないですか？」

「そうだな……もう巻いておく必要はない。これは既に役目を終えている」

そう言って、長谷川は刃更の包帯を解いていった。そして、ウェットティッシュで薬指全体を拭いてくれる。「こうしていて痛みはないな？」と問われ、刃更が頷くと、

「そうか……ならば大丈夫だな。だが、痛みがなくなったからといって完治した訳じゃない。余り患部に負担を掛けるような無理はするなよ」

と、長谷川は刃更の左手を放した。

「はい――ありがとうございました」

軽く頭を下げて刃更が椅子から立ち上がると、

「ああ東城……この後だが、何か予定はあるか？」

「いえ何も。家に帰りますが」

体育祭の実行委員会を終えてからここへ立ち寄った事もあり、もうすぐ六時だ。
十月という事もあって既に陽は沈み、辺りは暗くなっている。
「そうか……ならばこの後、私にちょっと付き合え」
「？　付き合えって、一体どこにです？」
キョトンとする刃更に、長谷川はふっと笑って言った。
「――忘れたのか？　お前が私とした約束は、もう一つあっただろう？」

3

体育祭実行委員会を終え、刃更から先に帰って良いと言われた後。
成瀬澪は、野中柚希と共に近所のスーパーを訪れていた。
万理亜から、帰りに食材の買い物をして来て欲しいと連絡が入ったからだ。
「よし……これで全部よね？」
「平気。万理亜のメールにあったものは全て揃えた」
澪がカートを押す隣で、柚希が携帯の画面を見ながら頷いた。
レジの長い列に並んだ澪と柚希が、やっと会計を済ませて店の外へ出ると、ふと二人の

携帯が同時にメールを着信。万理亜から追加の買い物の依頼かと思ったところ、差出人は刃更だった。だから内容を速攻で確認し――しかし澪と柚希は同時に黙り込んだ。

「そっちも刃更から？」

「……多分同じメール」

何でも用事ができたから帰りが遅くなるらしい。刃更の分の夕食は必要なく、メールには軽い謝りの言葉も添えられていた。澪と柚希が顔を見合わせ、嘆息を一つすると、

「――よお、お二人さん」

知った声にそちらを見れば、同じ学校の制服を身に纏った一人の青年が佇んでいた。

「滝川……」

青年の名を口にした澪の声は、自然と硬いものになった。隣の柚希は露骨に表情を厳しいものにし、身体を僅かに緊張させている。そんなこちらに滝川は苦笑して、

「そうおっかない眼をしないでくれ。俺はお前さん達の敵じゃないんだからな」

ゾルギアの後を継いで現在の澪の監視役を務めているが、その正体は穏健派の魔族が現魔王派へ送り込んだスパイで、本当の名はラース――それが澪達が聞いた、この世界で人間のフリをして暮らしていた滝川八尋の正体だった。ゾルギアの一件では滝川が裏で色々と動いてくれており、ゼストの魔法特性を刃更に教えてくれたり、ゾルギアの居城へ刃更

が入り込む手助けをしてくれた。また万理亜の母シェーラを助け出してくれたのも滝川だったらしい。他にも、これまで万理亜とは別に、陰ながら澪の事を護ってくれていたのだという。滝川は、澪達にとって言わば命の恩人だ。だが、

「あたし達も言った筈よ――アンタには感謝してるけど、許せない事もあるって」

滝川はかつて、澪達を襲った事がある。当時はまだ滝川にとって邪魔な存在でしかなかった刃更を始末し、それを澪に見せ付ける事で、澪の中に眠っているウィルベルトの力を強引に覚醒させ、穏健派に重い腰を上げさせ澪を保護させようとしたのだ。

無論、穏健派の魔族として澪の陰の護衛をしながら、スパイとして現魔王派へ入り込み澪の監視役も務めているのだ。滝川には滝川の立場や事情があったのだろう。

――だが、澪も柚希も忘れていない。白仮面としてこちらを襲った滝川が、あの戦いの最中に刃更が今も苦しみ続けている過去を――心の傷を抉る言葉を彼に放った事を。そして、肉体的にも刃更に重傷を負わせた事を。だから、

「もしアンタがまた刃更をひどく傷付けるような真似をしたら、その時はたとえ恩人だろうと容赦しない――百回殺すわ」

「あーあ、すっかり嫌われちまったな……」

ゆらりと殺気を放ったこちらに、やれやれと肩を竦めた滝川へ、

「で……何の用よ？　アンタ、魔界へ戻ったんじゃなかったの？　ゾルギアの件を現魔王派に上手く報告しないといけないからって」

澪は険しい表情のまま問い掛ける。周囲にはスーパーの利用客が行き交っているが、別に構わない。他人の話にわざわざ耳を傾けるような物好きは少ないし、よしんばそういう者に聞かれたとしても映画やゲームか何かの話だと思うだろう。すると、

「ああ、そのつもりだったんだけどな……」

と滝川。

「その前に、念のためお前らにはちょっくら忠告しておこうと思ってよ」

「……忠告？」

眉を顰めて問い返す柚希に、滝川は「ああ」と頷いて、

「バサっちの事さ……」

その言葉に澪と柚希は沈黙した。その名を出されては、聞かない訳にはいかない。

すると、滝川が表情を真剣なものにして言った。

「アイツの例の消去技……あれは余りにも異質だし、それに強力すぎる。何せ物理・魔法を問わず、あらゆる攻撃を完全に消し去れちまうんだからな。使い方次第じゃ、お前さんが受け継いだ先代のウィルベルト陛下の力よりもよっぽど脅威になる」

滝川の指摘は、澪達も理解していた事だった。刃更の《無次元の執行（バニシングシフト）》は凄まじい威力を持っていて――その強大な力は相手だけでなく、自らも傷付ける危険のある諸刃の剣だ。かつてその強大な力を暴走させた刃更は、勇者の里を追われてしまうような取り返しの付かない事態を引き起こしてしまっている。

「俺との戦闘で力を暴走させたのは成瀬の方だった……だが、もし反対にバサっちが力を暴走させちまっていたら、お前らにアイツを救ってやれたかな？」

「それは……っ」

「……」

澪は言葉に詰まり、柚希は苦い表情で無言を返した。痛い所を突かれたからだ。

《無次元の執行》を暴走させた刃更を助ける――それができなければ五年前と同じ悲劇が起こってしまうというのに、現状その手段を澪達は持っていなかった。

「幼い頃は勇者の里という閉鎖された場所に居たし、最近になって数回しか使っていないから、あの技について知っている奴はまだ少ない。俺は現魔王派はもちろん、穏健派にも今のところ報告してないしな。俺以外に知っていたゾルギアはもういないし、穏健派に行ったゼストも口を噤んではくれるだろう」

だがな、

「もし一度その力を広く知られちまったら――バサっちは間違いなく命を狙われるぞ。成瀬を手に入れたい現魔王派にとっても、成瀬を護りたい穏健派にとっても、アイツは脅威になるからな。それこそ、ゾルギアみたいにバサっちを手に入れようと画策する奴だって出てくるかもしれない。ゾルギアの件にはお前達は無関係って事で通すつもりだが、それでも野中――お前達がバサっちや成瀬達と戦う前、お仲間の霊槍使いが現魔王派が差し向けた応援の魔族を殺しているだろう。今後は現魔王派の監視の目は一層強まるだろうし、それこそゾルギアの件との因果関係を疑う奴が出てくる可能性だってある。穏健派の方も万理亜の件があるし、どうしたって事態が動く事は避けられない」

まあ、

「バサっち本人はそのリスクを自覚しているみたいだし、念のため俺からも結構キツく忠告しておいたが……お前達を守るために他に方法がなければ、アイツは躊躇なくあの技を使うだろう――これまでもそうしてきたように」

澪も柚希も何も言えなかった。滝川の言う事は真実だ。もし澪や柚希が危機に陥っていたら、刃更は躊躇う事なく《無次元の執行》を使うだろう――その結果、自分の身がどんな危険に晒される事になろうとも。

「聞けば、お前らは二人共アイツと主従契約魔法で結ばれているみたいだが……」

知っているか？
「主に守られているだけの奴は配下とは言わない――足手纏いって言うんだ。これからもアイツの傍で一緒に居たいってだけなら、今のままでも良いだろう。だがアイツを戦いに巻き込み、あの技を使わせたのはお前らだ。その責任を少しでも感じるなら、せいぜい強くなる事だな――せめて、いざという時にアイツを殺せる程度には」
「っ――――」
冷酷に言い捨てられ、思わず息を呑んだこちらに、滝川は「じゃあな」と言って踵を返すと、ゆっくりと去っていった。
言葉をなくして立ち尽くす事しかできない、澪と柚希をその場に残して。

4

超高級車に乗ってしまった。
世界中に愛好家を持つ、跳ね馬のエンブレムを持った赤のスポーツカーだ。
――養護教諭の長谷川と共に学校を出た後、刃更は彼女の運転する車に乗せられた。
以前、偶然会った焼肉屋からの帰り道にした約束――長谷川と改めて食事をするためだ。

そして街道から国道へと抜けて走る事しばし、やがて車は目的地へと到着した。連れて行って貰うのは長谷川のオススメの場所という話だったのを思い出した刃更は、道中の助手席で幾つかの可能性を想っていた。何せ超ド級の高級車を愛車に持つ長谷川だ。

このまま乗り付けるとしたら有名シェフがオーナーのレストランか、或いは高級料亭か。はたまた熟練の職人の仕事を感じられる寿司屋か。それとも敢えて外して、高級車で大衆的な定食屋やラーメン屋か――そのどれもがあり得そうだった。恐らく、長谷川千里という女性は、時と場所を選ばない。学校でも焼肉屋でもその存在感が変わらないように、たとえどんな店だろうと、長谷川はひたすら悠然と美しくあり続けるだろう。

――果たして、時と場所を選ばない長谷川が、刃更を連れて来たのは彼女の自宅だった。どこかの店ではなく、長谷川自身が手料理を振る舞ってくれるらしい。高層タワーマンションの最上階――そこが長谷川の部屋だった。女性の一人暮らしには広すぎる間取りだったが、同居人はいないとの事だった。そしてリビングダイニングへと通された刃更は、

……良いのか、これ？

料理ができるまでの間、出されたお茶をソファで飲みながらそわそわとしていた。

長谷川と二人きりで食事というだけでも緊張するというのに、まさか自宅に招待されるとは。生徒と教師の関係で、こういうのは許されるものなのだろうか。

『――――』

キッチンからは、長谷川の鼻歌の旋律に乗って料理が作られてゆく音が聞こえていた。

先ほど見た、いつもの白衣ではなくエプロン姿の長谷川も魅力的で新鮮だったのだが、

……珍しいな。

長谷川は随分と上機嫌なようだった。刃更との食事の約束を楽しみにしてくれていたのなら非常に光栄な話だが、深く考えると何だか落ち着かない気持ちになってしまう。

長谷川は一体どういうつもりなのだろう。真意が読めずに刃更が緊張していると、

「――待たせたな東城。こっちへ来て座ってくれ」

「あ、はい……」

長谷川の呼び掛けに、刃更はカップの紅茶を飲み干すとソファを立った。そして大きめのダイニングテーブルの椅子に腰掛けると、長谷川が料理を並べ始める。それを見て、

「……これは、凄いですね」

刃更は思わずそんな感想を漏らしていた。作っている最中から、ずっと美味そうな匂いが漂っていた位だ。長谷川の手料理という事もある。緊張しながらもかなり期待が高まっていたのだが――長谷川が用意した料理は刃更の想像を遥かに超えたものだった。

――長谷川が作ってくれたのは、一般家庭によくあるものばかり。だが、そのクオリテ

ィが盛り付けから味付けまで一目見て高いのが解る。そして、それ以上に刃更を驚かせたのは、メニューの量の多さと偏ったバランスだ。おろしハンバーグ、カレーライス、肉じゃが、シーザーサラダ、豚の生姜焼き、デミグラスソースのオムライス、鶏の唐揚げ、そして味噌汁と、テーブルの上を所狭しと料理が占領している。いやもう、一体どんだけ張り切ったんだこの人。サラダと味噌汁はともかく、肉料理が四つにカレーとオムライスが別々にあるとか、仮にも養護教諭なのにこの栄養バランスはどうなんだ。

「――さあ、たっぷりと食べてくれ」

「はい……じゃあ、いただきます」

正面の席に座った長谷川と料理に手を合わせた刃更は、

「えっと……どれから食べれば良いんですか？」

どの料理も美味そうだが、長谷川の自信作があるなら聞いておきたい。すると、

「お前のために作った料理だ。お前の好きなように食べてくれ」

そう言って、長谷川は少しだけ照れたように笑った。

「実は、誰かに手料理を振る舞うのはこれが初めてでな……どうすれば良いか解らず、取り敢えず私なりにお前くらいの年頃が好むメニューを揃えてみたんだ」

「――――」

長谷川の言葉に、東城刃更はようやくこのデタラメなバランスのメニューの意味を理解した。長谷川が作ってくれたこれらの料理には、きちんとテーマがあったのだ。長谷川の得意料理でも、食べさせたい料理でもなく、刃更が喜びそうなメニューという。だから、

「……いただきます」

刃更はもう一度感謝の言葉を口にすると、まずはおろしハンバーグに箸を伸ばした。一口サイズに切ると、溢れ出る肉汁がこれでもかと美味さを主張してきて、刃更は遠慮なくそれを口へと運ぶ。すると途端に、口いっぱいに肉本来が持つ旨みと風味が広がって、

「……どうだ？」

少し不安そうに尋ねられた時には、刃更はその味に頬を緩めていた。出る感想は一つだ。

「先生……メチャクチャ美味いです」

すると、長谷川はホッと胸を撫で下ろしたように笑って、

「そうか……良かった。じゃあ、遠慮せずにどんどん食べてくれ」

その言葉に刃更は頷くと、一気に料理を食べ進めていった。

――長谷川が刃更のために作ってくれた料理は、そのどれもがとても美味かった。

あまりの種類とボリュームに、或いは全てを食べきるのは無理かと思ったが、その美味しさに箸が止まる事はなく。そんなこちらを嬉しそうに眺める長谷川の前で、刃更は次々

に皿を空にしてゆき――一時間後には、全ての料理を完食していた。

満腹と満足、二つの幸せを得た刃更は、せめてお礼に食器を洗わせて欲しいと申し出たのだが「残さず食べて貰えた食器を洗える喜びは、料理を作った者の権利だ」とやんわりと断られてしまった。しかし「その代わり、東城には頼みたい事がある」と言われたため、刃更は一も二もなく了承した。そして、

「あの――本当に良いんですか？」

「ああ、やってくれ」

「えっと……じゃあ、失礼して」

洗い物をしている長谷川の承諾を得て、刃更は背後から彼女を抱き締めた。

――男に手料理を振る舞った後、洗い物をしている時に後ろから甘えられるという、TVドラマなどでよくあるシチュエーションをどうしても試してみたいらしい。

洗い物がしやすいように腰の辺りを抱いて身体を密着させると、長谷川の身体の柔らかさや体温、香水の甘い匂いなどを感じられて、それだけでもマズイのに、

……この角度は、眼の毒すぎる……っ。

普段の長谷川は刃更と同じ位の目線の高さなのだが、それは彼女がハイヒールを履いているためだ。自宅で靴を脱いでいる現在は、刃更よりも一段低くなり、よくある男と女の

身長差になっている。だから見えてしまうのだ――シャツのボタンの上二つが開けられているため、長谷川の豊かすぎる胸の谷間はおろか、膨らみの上半分からブラジャーまで。

「ふふ、これは良いな。東城の声がいつもと違う高さから聞こえるのも新鮮だ」

洗い物を始めながら、長谷川が愉快そうに笑った。

「どうした東城、そんなに緊張して……成瀬や野中と同居しているんだ。こういう事をやるのは、何も初めてではないだろう？」

「いや、そりゃまあ……そうですけど」

確かに、刃更がこういう真似をするのは初めてではない。柚希にはよくせがまれるし、それに対抗して澪にも頼まれたり、料理を始め東城家の家事全般を司っている万理亜などは、身長差を縮めて刃更が抱き締めやすいよう踏み台まで用意している。しかし、それは刃更と彼女達がそういう関係を築けているからだ。長谷川とはこういう事をして良い関係ではない。何故なら刃更と長谷川は、生徒と教師の間柄なのだ。すると、

「参考までに聞くが、成瀬や野中にする時はどんな感じになるんだ？」

「どんなって……どういう意味です？」

すると、長谷川は軽く背伸びをして「こういう事だ」と柔らかな尻を刃更の股間へ擦り付けてきた。思わず驚いて身を固くすると、こちらの腕の中で振り返って、

「お前らの年頃でこういう真似をすれば、洗い物だけでは済まないのではと思ってな」
「っ――……まさか、そんな事はないですよ」
今のところは洗い物だけで済んでいる――澪や柚希まで洗う流れになった事はあるが。
「成る程……まあ、そう言うなら信じてやろう。良い教師は生徒を信じるものだからな」
「良い先生はこんな風に生徒をからかいません……全く、いつか痛い日を見ますよ」
「ふふ、それは楽しみだな」
そう悪戯っぽく笑った長谷川が、前を向きながら、
「――では、私の料理の味はどうだった？　普段家で食べている成瀬達のものと比べて」
「えっと、そうですね……」
話題がまともになった事に安堵を得ながら、刃更はいつも東城家で自分が食べている料理と、先程の長谷川の料理を比較する。万理亜が作る普段の料理も、長谷川のものに負けず劣らず美味しいものばかりだ。日によっては柚希や澪が作る事もあり、勿論それらも美味しいのだが、やはり東城家の中では万理亜の料理が一番だろう。迅と二人だけで暮らしていた頃の男料理とは、味もレパートリーも雲泥の差だ。それでも、長年慣れ親しんだ味を懐かしく感じて自分で簡単な夜食を作る事はあるし、たまに柚希が作ってくれる野中家の卵焼きや味噌汁の味に幼い頃を想ったりもする。それらに比べると、長谷川の料理はオ

ーソドックスなメニューながら、どれも手の込んだものばかりだった。恐らく食材も良いのだろうが、素材が持つ本来の味を活かすための丁寧な下ごしらえと、絶妙な火加減や味付けなどが行なわれ、さらには盛り付けなどの見た目まで徹底されていた。だから、

「先生の料理って……どれも手が込んでて、それこそ専門のレストランで頼んだら出てくるようなものばかりで、凄く美味かったんですけど」

「……あまりお前の口には合わなかったか？」

前を向いて洗い物をしたまま、少し声のトーンを落とした長谷川に、

「いや、その逆です……見た目も味もあんなに豪華に作って貰ったのに、こんな言い方をしたら怒られるかもしれないんですけど」

と刃更。長谷川の料理の味を思い出して、改めて感じた事を告げる。

「先生の料理、初めて食べた味なのに、無性に懐かしい感じがするんです……ウチって俺が生まれた頃からずっと父子家庭で、俺は母親の味どころか顔すら知らなくて、親父の作る料理や、幼馴染の柚希の家で食べさせて貰ったもので味覚が育った筈なんですが」

「……」

「あの……先生の味付けは、お母さんとかご家族の方に教わったものなんですか？」

無言になった長谷川に、刃更は怒らせてしまったかと不安になりながら問うと、

「……ああ。私の料理は、昔一緒に暮らしていた遠い親戚の――私にとっては年の離れた姉みたいな人に教わったものだ」

「そうだったんですか……」

「うん。私は彼女の事も、彼女が作る料理も凄く大好きだったんだ。だから、お前がその味を気に入ってくれて良かったよ……」

長谷川の言葉の中に過去形が含まれている事に、刃更はその親戚が既に故人であるなどの可能性を察し、それ以上の言葉を作る事を止めていると、

「――すまない東城」

ふと、長谷川が流していた水を止めて言った。

「少しの間だけで良い……抱き締める力を強くしてくれ」

白衣と高いヒールを脱いで、こうして刃更の腕の中にいる長谷川は、滞達と変わらないか弱い存在で。だから言われた通り、刃更は長谷川を抱き締めた――自分のやり方で。

「あっ――……」

長谷川が少し驚いたような声を上げた。前を向いていた長谷川を、刃更が強引にこちらへと振り向かせ、正面からギュッと抱き締めたからだ。すると僅かな沈黙の後、

「……教師と生徒だぞ」

「今は関係ない」
少し咎めるように言われたが、背中と腰に腕を回して強く抱き締めると、長谷川はやがて自分から刃更の背中へ腕を回して抱き締め返してきて。だから刃更は、そのまま長谷川の気の済むまで、彼女の事を抱き締め続けた。
そして――長谷川の腕時計の秒針が、二人だけの時間をしばらく刻んだ後、
「……もう大丈夫だ、東城」
そう長谷川に言われ、刃更は抱き締めていた腕を放した。すると長谷川が苦笑して、
「すまない……服を汚してしまったな」
「別に、泡ぐらいどうって事は――」
と、そこで刃更は己のシャツに赤い痕が付いている事に気が付いた。
キスマークだ。長谷川の口紅の事を失念していた刃更に、長谷川はふっと微笑むと、
「洗濯機を回すとしよう……お前の服だけなら乾燥まで含めても、恐らくそんなに時間は掛からない。そのまま待っていても仕方ないから、ついでに風呂にも入っていけ」
そう言ってこちらの服を脱がそうとしてくる。刃更は慌てて一歩下がって、
「いやっ、そこまでして貰わなくても――制服の上着を着れば見えませんし」
「しかし、家に帰ったら成瀬達にどう説明するつもりだ？」

確かに……流石に本当の事を言うのはマズイよな。馬鹿正直に本当の事を言えば、澪と柚希が嫉妬して主従契約の呪いが発動するかもしれないし。ならば、

「それじゃあ、帰りの電車の中で付いたとでも言いますよ。香水もその時に――」

「――私の香水の匂いをさせながらか？　成瀬は一時期、保健室をよく利用していた。私の香水の匂いは間違いなく把握していると思うぞ」

マジか。思わず黙り込んだ刃更に、長谷川はクスクスと笑って言った。

「諦めて入っていけ東城――心配するな、少しくらい遅くなっても車で家まで送ってやる」

どうするべきか悩んだが、最終的に刃更は長谷川の厚意に甘える事にした。

ある心配な事があったからだ。

――四日前のゾルギアとの戦いの後、刃更は自分の部屋で澪を襲いかけてしまった。

彼女の事を大切に思ってずっと自制してきたのに、もう少しでゾルギアなどに澪を奪われていたと思ったら理性が完全に飛んでしまって、あともう少しで刃更自身が澪を奪ってしまうところだった。これまでの澪達との同居生活や、主従契約を結んだ際の屈服に、催淫の呪いの解除など、色々なものが溜まって我慢の限界が来ていたのだろう。

……これでもし、澪と柚希が同時に催淫の呪いに掛かったりしたら。
今度こそ自分は、決定的な一線を越えてしまいかねない。澪は怒っていないと言ってくれていたが、流石にあんな真似を何度もする訳にはいかないし――最悪そんな事になってしまうにしても、その原因が長谷川になってしまうのだけは避けたかった。
白い湯気が漂う長谷川の家の浴室で、湯船に浸かった刃更は天井を見上げながら、
「……やっぱ溜まってんのかな、俺」
ぼんやりと情けない声で呟くと、浴室の扉の向こうから、
『東城――取り敢えずシャツの口紅の染み抜きは終わったぞ。後は香水の匂いを落とすため、洗濯と乾燥で一時間半ってところだな。まあ、終電には充分に間に合うだろう』
「あ、ありがとうございます色々と……助かりました」
これで澪達を襲わなくて済む――いや、襲うとは限らないが。
『なに、構わないさ……その代わり東城、少し頼みたい事があるんだが良いか？』
「あ、はい良いですけど――」
何です？　と訊ねようと湯船の中で身を起こしたら、ガチャリと浴室の扉が開けられた。
一体いつの間に服を脱いだのか、眼鏡も外してバスタオル一枚になった長谷川が、
「そうか良かった……」

嬉しそうな顔でそう言って、浴室へと入ってくる。だから、

「っ――ちょ、ちょっと先生、何で入って来るんですっ!?」

刃更が慌てて湯船の中で後ろを向くと、

「？　頼みたい事があると言っただろう。実は養護教諭という職業柄か、私はよく生徒から相談を受けるんだが……夏休み明けは特に恋愛関係の相談が多くて困っていてな」

「いやっ、それとこの状況に一体どんな関係が!?」

「自慢できる事ではないんだが……私は恋愛経験というものが全くないんだ。だから、本気で悩んでいる生徒達の相談にきちんと乗ってやれないのが申し訳なくてな。それで、少しでも彼らの気持ちを解ってやれるように、今日はお前を自宅に招待したんだ。お陰で男に手料理を振る舞う事もできたし、キッチンでいちゃつく事もできた――感謝するぞ」

「だから、ドラマのシチュエーションを試してみたいだなんて……」

得心が言ったこちらに、長谷川は「ああ」と頷きの声を漏らして、

「あれで終わっても良かったんだが、話の流れからお前は私を強引に抱き締めてくれて、その結果、男の服を洗う事もできた。挙げ句、お前がウチの風呂に入っていく事になったんだ。なら、いっそ男と風呂に入る所まで経験してみたいんだ――構わないだろう？」

「構いますっ、全っ然構いますよ！　俺達は生徒と教師じゃないですかっ？」

「私がそう言ったら、お前は『今は関係ない』と言った筈だが？」
「いや、あれは……っ！」
教師だって人間だ。苦しくて誰かの支えを欲している時に、立場が邪魔して苦しみ続けなければいけないなんて辛すぎる。先代魔王の一人娘だから誰にも助けられないと思い込んだり、勇者の使命に縛られて大切なものを犠牲にしたり、家族を人質に取られたせいでずっと一人で悩み苦しんだり――そういう苦しみを抱えた娘達は救おうとして、これまで悩んでいた刃更の話を聞いて解決の道を示してくれてきた長谷川を、相手が教師だからって何もせずに放っておくのは違うと思ったのだ。すると、
「……本当に駄目か、東城？」
残念そうに背後の長谷川が言った。
「私の家に男が来る事なんて、もしかしたらこれが最後かもしれないだろう」
「いや、そんな事はないと思いますけど……」
そう反論した刃更は、そこで放課後の保健室での出来事を思い出した。
――水着を自分で脱げなくなった長谷川は、刃更に助けを求めた。そして刃更が断ろうとすると、誰でも良いから他の男を呼んでくれとまで言った。恐らく刃更を家に招待したのと同じで、生徒の恋愛相談に役立てようとでもしたのだろうが、

……まさか先生に、こんな弱点があったなんて……。

完全無欠と思われていた長谷川に、恋愛経験がない事は理解できる。綺麗すぎる女性に気後れしてしまう男は多いし、一介の養護教諭なのに高級車を所持してこんなマンションに住む位だ。恐らく資産家の娘か何かなのだろう。どこか男っぽい口調も、厳格な父親に育てられたものだと考えれば、恋愛や男女関係に疎い事と併せて充分に考えられる。

――だが、長谷川は生徒想いで真面目なのだ。転校してきたばかりだった刃更の悩みも、誰よりも親身になって聞いてくれたし、恐らく今も生徒の恋愛相談に本気で乗ろうとしているのだろう。だとしたら、もしここで刃更が一緒に入浴する事を断ったら長谷川は他の男に代役を頼むかもしれない。もしその男が、長谷川の弱みに付け込んだりしたら。

最悪の可能性を想像した刃更は、やがて絞り出すような声で、

「……〜〜〜っ、解りました」

そう言って背後を振り返った。長谷川を、どこの誰かも解らない男の毒牙に掛けさせる訳にはいかない。すると長谷川は「感謝するよ」と表情を明るくして、

「ならば東城、まずはお前の背中を洗わせてくれ。私は男の背中を流してみたい」

「はあ、どうぞ……」

その言葉に刃更は浴槽から上がると、バスチェアへ腰掛け長谷川に背中を向けた。

すると背後で何度かポンプ音が聞こえた。恐らくボディソープだろう。そして、
「……待たせたな、それでは始めるぞ」
長谷川がそう言った瞬間――刃更の身体の前に長谷川の両手が回った。
……え？
こちらの背中を洗う筈の手がなぜ前に来る――そう思った瞬間、刃更は後ろから抱き締められ、背中に押し当てられた温かくて柔らかな感触を、上下へと滑らせられた。
「ちょ、ちょっと――先生、何してっ!?」
「決まっているだろう……お前の背中を洗っているんだ、私の胸で」
平然と、刃更の背中を自分の豊かな胸でいやらしく擦ってゆく長谷川に、
「せ、背中を洗うなら、タオルで洗えば良いじゃないですか！」
刃更が悲鳴にも似た困惑の声を上げると、長谷川は笑みを含んだ声で、
「何を言ってるんだ……こうして胸でいやらしく洗って、どういう気分になるかを経験するから恋愛相談の役に立つんじゃないか。普通に洗う事に一体何の意味がある」
「いや、そりゃそうかもしれませんけど……巻いてたバスタオルはっ!?」
「邪魔だから取った。どうせ成瀬や野中には同じような事をされているんだろう？」
「それは――……っ」

いや確かにされた事はあるが、澪は澪、柚希は柚希、万理亜は万理亜だ。彼女達の感情や、刃更との関係は、事情も含めて長谷川とは全く違う。

……ヤバいって……っ。

澪達と長谷川とでは決定的に違う事があった。それは長谷川が、刃更にこういう行為をする初めての「年上の女性」という事だ。澪や柚希は同い年だが、どちらかというと妹のようなものだし、万理亜に至っては見た目も子供だ。成体化した時にはその色気に驚きもしたが、普段の万理亜を知っている以上、冷静さを失ってしまう事もなかった。

――だが、長谷川は違う。純粋に刃更より年上で、精神的にも余裕のある大人だ。

恋愛経験こそないのかもしれないが、生徒と教師という関係上、互いの精神的な上下関係も強固にできているため逆らえない。おまけに普段、澪達を屈服させる事しかしてこなかった刃更は、攻めはできても受けに回った経験は少ないのだ。

……駄目だ、主導権を握らないと……っ。

このままでは本当にどうにかなってしまう。必死に心を落ち着けようとしていると、

「どうだ東城……成瀬や野中と比べて、私の胸を使った洗い方は？」

と長谷川に問われ、そこにこの場のペースを自分が握るチャンスを見出した刃更は、

「……まだまだ、じゃないですか……アイツらは、もっと上手くやりますよ」

と必死に強がった。すると、

「そうなのか？　ならば――どうすれば良いかアドバイスを頼む」

「――っ、わ、解りました……じゃあ、まずは」

主導権を握るためだ。仕方なく刃更は長谷川に胸での洗い方のレクチャーを始めた。

上下だけでなく、左右や円を描くように動かすように指示したり、押し付ける位置や力に強弱を付けさせたり。長谷川はそれを受けて、刃更に言われた通り、自分の胸を余すところなく使って刃更の背中を洗ってゆく。すると長谷川の胸はいやらしくその先端を硬く張り詰めさせ、刃更の背中で快楽を主張し始めて、

「んっ、東城……凄いな、私の躰がどんどん熱くなって……っ」

声が甘く濡れ始め、こちらへ触れている長谷川の体温がどんどん上がってゆく。

……先生が……っ。

あの長谷川が、刃更の背中を胸で洗って興奮し、女の快楽を感じ始めている――その事実は刃更をどうしようもなく興奮させた。もし今ここで振り返ったら、そんな長谷川の姿を見る事ができる――普段の教師の顔をどんな女の顔にしているのかも、どれだけ胸の先を快楽に硬くしているのかも。だから、いけないと解っているのに、

「……っ」

東城刃更は、ほんの少しだけその誘惑に己を任せて——背後を振り返った。すると、

「あっ——？」

自分の胸で刃更の背中を洗う事しか考えられなくなっていた長谷川が、そのまま刃更の方へと倒れ込んできた。慌てて受け止めると、二人で浴室の床へ転がり、

「……」

「……」

至近距離で見つめ合う体勢になって——そして刃更は自分が知りたかった答えを見た。

——一糸纏わぬ姿で、女の快楽を得て躰を熱くしていた長谷川は、壮絶に綺麗だった。保健室で見た時とは全く異なる、快楽に染まりきった薔薇色の肌。瞳はいやらしく潤み、吐息は熱を帯びていた。それを見て、思わず刃更はゴクリと喉を鳴らした。

すると次の瞬間——長谷川は、澪や柚希が決して見せないような顔を刃更へ向けた。笑ったのだ。初めて女の快楽を得て、そんな自分を刃更に見られながら。そして、

「——」

そのまま長谷川は、ゆっくりとこちらに唇を重ねてきて——キスをされた。

刃更は動けない。ただ黙って長谷川にされるがままだ。すると、

「んっ……ちゅ、あ……ん……ふ、っ……やぁ……はぁ……んふ」

長谷川の唇と舌が動き出し、二人のキスをいやらしいものにしていった。そしてたっぷりと長い時間を掛けてキスを終えると、こちらと視線を合わせた長谷川は、

「……ああ、ファーストキスまではやらないつもりだったのに」

そう言って、再び女の顔で艶っぽく笑った。だから——刃更はもう我慢できなかった。

気が付けば強引に長谷川の唇を奪っていた。そして泡だらけになった長谷川の巨乳を両手で揉むと、指の隙間から溢れた大きな胸がいやらしい形にはみ出して、

「んん〜〜っ、ちゅっ……あぁ、東城ぉ……ちゅぷ、っ……あはぁ、ああぁあっ」

刃更の背中に押し付けて滑らせただけで感じていた長谷川は、胸を揉まれる快感にますます甘えた声を上げた。そんな長谷川が可愛くて、刃更はさらに強い快感をくれてやる。

泡だらけだが構わない——右胸へむしゃぶり付いた。すると、先ほど食べたどの料理より美味い長谷川の胸の味が口いっぱいに広がって。歯は立てなかった——だが、柔らかさの中に快楽に張り詰めさせた先端を見付けた刃更が、そこを思いきり吸ってやると、

「はあぁぁあっ、やっ……東城ぉ……そんな強く、吸っちゃ……ぁ——……っ？」

刃更の腰にギュッと両脚を絡めて首にしがみ付いてきた長谷川が、突然喉を反らせて身体をビクンと震えさせた。催淫の呪いが掛かっている訳でもないのに——胸を攻めてやっただけでイッたのだ。長谷川は恐ろしいほど敏感な躰をしていて、

「ぁ……な、んだこれ……んっ、……まさか、私……達して……？」

初めての絶頂に意識をとろけさせている女教師に、刃更は今度は尻の快感も教えてやりたくなった。胸に吸い付いたまま、両手で長谷川の尻たぶを摑んで乱暴に揉んでやると、

「っ――やあぁ、ま、待て……東、城……そんな……ゃあぁぁ――っ！」

絶頂でより敏感になっていた長谷川が、いやらしく腰を振りながら再び達する。だが、

……まだだっ。

男を知りたいんだろう。なら徹底的に教えてやる。刃更は長谷川の腰を強く抱いてやりながらシャワーへ手を伸ばし、彼女の胸に付いていた泡を一気に洗い流そうとすると、

「あんっ……待て、東城……んっ、私は、もっとお前の躰を洗ってやりたい……」

長谷川は足でバスチェアを蹴飛ばして隅へやると、そのまま刃更を押し倒してくる。

そして、上半身を泡まみれにした状態の長谷川がこちらの上へ覆い被さり、

「ジッとしていろ……こっちも、ちゃんと私の胸で洗ってやる」

笑みと共にそう言うと、こちらへとしなだれかかり柔肌で刃更の身体の前を洗い始める。

背中の時よりも、前を洗われている今の方が長谷川の胸の感触を強く感じられて、

「……っ」

刃更は長谷川の下でビクっと躰を震わせた。腹から胸にかけてを滑るようにして洗って

いるのは、こちらの身体に押し付けられ、いやらしい形になった長谷川の柔胸だ。それが擦れる度に、長谷川の胸の谷間に入った泡がクチュクチュといやらしい音を奏でる。すると刃更の前を洗っていた長谷川の胸が、段々と下へと降り始め——とうとう腰に巻かれた白いタオルへと至った。だが、既にタオルの下を生理反応で硬くさせていた刃更は、

「……——っ!?」

慌てて長谷川の下から飛び退いて——その結果バスタブの縁へと腰掛ける体勢になった。最後の理性で、一線を越える事を踏み留まったのだ。だがそんなこちらに、

「養護教諭の私に……そんなに苦しそうにしているお前をそのままにさせる気か？」

蠱惑的な笑みを浮かべた長谷川はボディソープの蓋を開けると、ポンプを抜き去って中身を自分の胸へとかけ始めた。トクトクと、粘度の高い液体が泡だらけの胸の曲線を伝って谷間へと溜まってゆく。そして、長谷川はこちらの前へと跪き、

「さあ東城——お前はもっと年上の女に甘える幸せを知るべきだ」

その甘く優しい言葉は、バスタブの縁に腰掛けた体勢の刃更を動けなくした。そして、

……あ……。

ふと刃更の視界が揺れ始めた。長い間、浴室に居続けてのぼせてしまったのだろう。そんなこちらの状態に気付いていないのか、長谷川はこれまでで最も淫らな笑みを浮かべて、

「――保健室で言った冗談が、本当になったな」

そう言って、長谷川は己の泡だらけの胸を両手で下から掲げるようにすると、ゆっくりと刃更の腰に巻かれた白いタオルの下から、その中へ――奥へと差し入れてきて。

――直後、東城刃更はタオルの下の己を、長谷川の胸の谷間でしゃぶられた。

「っぁ――――？」

腰の力が一瞬で抜けそうな感覚がきた。そしてこちらの腰のタオルをいやらしく張り付かせた胸を、長谷川が上半身ごと淫らに揺らし始めると、いよいよ何も考えられなくなって――全てがもうどうでも良くなった刃更は、眼を閉じて長谷川に身を任せた。

そして次に眼を開けると――刃更は浴室ではなく、脱衣所の天井を見上げていた。

……あ、れ……いつの間に……？

まだ意識がぼんやりとしているせいか、なかなか思考が定まらない。すると、

「――大丈夫か、東城？」

ふと穏やかな呼び掛けと共に、天井を遮るようにして白い色彩が刃更の視界を覆った。

「先生……？」

声だけで姿が見えない長谷川に、視線を周囲に巡らせた刃更は現状を理解する。

自分は今、バスタオル一枚の長谷川に膝枕をされていて――そして先ほど天井を遮っ

た白の色彩は、長谷川の豊かな胸を下から見上げていたのだと。だから、

「――す、すいませんっ！」

刃更は慌てて横に転がり、跳ね起きた――その途端、

「おわっ……っと!?」

腰のタオルがはらりと落ちかけ、刃更は慌ててそれを押さえた。辛うじて際どい部分の露出を避けられてホッと胸を撫で下ろした刃更に、

「すまなかったな……養護教諭なのに、夢中になってお前の状態に気が付かなかった」

申し訳なさそうに、バスタオル姿で床に横座りをしていた長谷川に謝られた。

「いやっ、こちらこそ、先生にずっと膝を貸して貰っちゃっていたみたいで……っ」

刃更は脱衣所の床に正座すると、深々と長谷川に頭を下げた。そして、

「……あの、先生？」

「ん？　どうした？」

頭を下げた状態で呼び掛けると、長谷川はいつものトーンで反応を返してきた。だから、

「俺って……先生と一緒に風呂に入ったりしました、よね？」

ゆっくりと顔を上げながら刃更が祈るような想いで問うと、長谷川はさらりと、

「何だ東城……まさかのぼせて忘れてしまったのか？」

「っ……はは、まさか……流石にそんな事は」
刃更は笑顔を引き攣らせつつ、第一希望の『夢オチ』の可能性が儚く散った事を理解。
「……えっと、じゃあ俺達って一体、どこまでしちゃったんですか、ね？」
言葉の句切りの多さに、色々な願いを込めながら訊ねると、
「ああ、そうか……のぼせて最後だけ忘れてしまったんだな。私の胸で、お前の身体を洗ってやったんじゃないか。お陰でこちらは良い経験ができた」
「――――っ、そ、それは良かった……っ」
さらに顔を引き攣らせながら刃更は思う――まだだ、まだ希望は残っていると。だから、
「ど、どこまで洗って貰っちゃいましたっけね、俺……？」
問題は部位だ。途中までならギリセーフ。一縷の望みを託して刃更が問い掛けると、
「そうだな……昼間に保健室で、私の胸にハンドソープを掛けた事は覚えているか？」
「――え？　は、はあ……ファスナーが下りなくなった水着を脱がすためですよね？」
突然話題が変わった事に困惑しながら答えると、長谷川は「だったら」とバスタオルの上から溢れかけている豊かな胸にそっと手を当て、悪戯っぽく笑って言った。
「昼間のあれと先刻のお前――どちらが私の胸に多く出したか聞きたいか？」
そんな長谷川の言葉に、最後の望みを完全に絶たれて現実を思い知った刃更は、

「……いえ」

消え入りそうな声でそれだけを呟くと、そのままガックリと項垂れた。

5

その後――服が乾くまでの間バスタオル一枚で半裸待機を行なって。

改めて食事の礼を告げ、浴室での一連の出来事についてはそれ以上聞く事はなく。

そそくさと刃更が長谷川の部屋を後にした頃には、既に十一時を回ってしまっていた。

……すっかり遅くなっちまったな。

長谷川宅の最寄り駅。その下りホームで、電車待ちの列に並びながら刃更は嘆息した。

実は――長谷川からは車で送ると言われたのだが、刃更は丁重に辞退した。服が乾くまでの間、色っぽいバスローブ姿の長谷川を前にしながら、意識を失っていた間に長谷川が言ったような事が本当にあったのか悶々としていたというのに。風呂場より狭い密室になるスポーツカーの車内で二人っきりなど、自分を抑えられる自信がなかった。

……それに。

こんな時間まで長谷川と一緒だっただけでも危険だというのに、これで家まで送って貰

った現場を澪達に見られでもしたら、いよいよマズイ事になってしまう――刃更ではなく、澪と柚希がだ。二人が刃更と長谷川との事で嫉妬を感じれば、間違いなく催淫の呪いが発動してしまう。刃更は携帯を操作し、

「……よし、と」

澪達が心配しないようにと、服が乾くのを待っている間に帰りが遅くなりそうだと送っておいたメールに加え、今から電車に乗る事を家で待つ三人へと送信。

そして携帯を懐にしまいながら、これから来る電車の事をぼんやりと思った。

……まあ、混雑してるよな。

夕方以降、基本的にこの路線は都心から帰宅するサラリーマンなどでごった返す。おまけにこの駅自体も比較的都心に近いため、ここから電車に乗って家へと帰る者も少なくない。今も刃更と同じように電車待ちをしている人達で、ホームには何本も長い列ができていた。この駅を利用している長谷川は、こうなる事を見越して車で送ってくれようとしていたのだろうが――車内がすし詰めになる事は覚悟しておくべきだろう。

すると、下りのホームに電車の接近を報せるアナウンスが入った。しかし、

『間もなく、2番線を特急列車が通過します――』

「そっか……ここって特急が止まらないんだっけ」

特急が停車する東城家の最寄り駅と違い、この駅は急行までしか止まらない事を思い出した刃更がぼんやりと呟いた時だった。

――不意に辺りに闇が降りた。駅にある照明が消えたのだ。

いきなりの事態に停電という単語を思い浮かべた刃更は、

「――――っと」

頭を右に傾け、左腕を払うようにして無造作に振った。それは、背後から刃更の後頭部を狙って繰り出された拳を横へと受け流す。

「一体何のつもり……――っ？」

酔っ払いや闇夜に乗じた強盗などの可能性を思いながら、背後を振り返ろうとした刃更は、しかし横への跳躍を強いられた。背後だけでなく、周囲で電車待ちをしていた全員が一斉に襲い掛かってきたからだ。その眼に正気の色がない事を見て、

……っ、まさか……!?

刃更がある可能性を思った瞬間。暗闇を淡く照らしていた非常灯までもが消え去り、周囲にあった街の音が無くなった。空間をずらすタイプの結界に取り込まれたのだ。

よって東城刃更は確信する――自分は今、何者かの襲撃を受けていると。

……クソっ、何者だ。無関係な人達を巻き込みやがって……！

結界内には刃更だけでなく、襲い掛かってきた人達まで取り込まれていた。だが操られているだけの彼らを無闇に傷付ける訳にはいかない。次々に拳や突進が迫ってくる中、刃更は大勢に周りを囲まれながらも僅かに生じるスペースへ身を避けさせながら、すれ違い様に首筋や胴への当身を食らわせて昏倒させてゆく。そんな中、

「――――っ!?」

不意に生じた無数の光に刃更は息を呑んだ。停電が解消される筈のない結界内で照明は点かない。それでも刃更の周囲に、暗闇を照らす沢山の輝きがあった――魔法陣だ。

……まさかっ!?

操られている人達が一斉に魔法を使おうとしていた。その事実に刃更が愕然となった瞬間――あろう事か、いきなり結界が解除されて元の空間へと戻る。

「なっ――――!?」

思わず刃更は絶句した。操られている人達は、まだ魔法を詠唱中だ。もし彼らが唱えようとしている魔法が攻撃系なら、このまま発動したら駅に被害が出る。何より、

……マズい……っ！

線路の向こうから接近してくる光に、刃更は激しく焦燥した。先程アナウンスがあった特急列車が迫っていた。停電中だが特急は停車する必要がないため、構わず通過するつ

もりなのだろう。しかし、このまま周囲の人達が唱えた魔法が線路を破壊してしまったり、それこそ直接あの電車に命中したりしたら、大勢の犠牲者が出てしまう。

大惨事を想像した刃更が緊張に身を固くした——その隙を突いて、無数の魔法陣の間から三つの影が飛び出した。地を這うように身を低くした三人の突撃はタックルとなり、反応が遅れた刃更は両脚や腰を抱えられたまま強引に宙を舞わされる。

しまった——そう思った時には、刃更は三人と共に線路への落下軌道にあって。刹那、実際に大事故を起こすつもりはないとばかりに再び結界が展開された。恐らく結界を一旦解いたのは、刃更に隙を作るための脅しだったのだろう。ところが、

……っ、今度は電車ごと……っ！

刃更は結界内にも拘わらず、特急列車が迫ってくるのを見た。一度目の空間をずらすタイプから、空間を複製する結界に切り替えたのか。結界の範囲内に存在していた物質が、展開時の状況に合わせて複製された結果、駅へと進入してくる特急電車まで忠実に再現されていた。そして刃更は、操られている三人と共に線路の上に落下した。その衝撃で生じた痛みに顔を顰めた時にはもう、電車はすぐ眼の前に迫っていた。だから、

「っっおおお

を薙ぎ払うように一閃。こちらへタックルしていた三人を、ホームの下に設けられた緊急避難用のスペースへと強引に吹き飛ばすと、直接の回避が間に合わない自分自身は後方斜め上――電車の進行方向へと向かってバックステップで跳躍。そして、

「っ――――！」

膝を手前へ引くようにしながらフロントガラスを足場にして蹴り、刃更は後方宙返りで上へと跳んだ。すると視界を縦に回転させている刃更の真下を、特急電車がギリギリで通過してゆく。辛うじて回避が間に合い、宙をさらに跳んだ刃更が安堵を得た瞬間だった。

ホームに生じていた無数の魔法陣から、光の矢が刃更へと一斉に解き放たれた。

……クソっ、最初からこれが狙いか……っ！

完全に動きを読まれた。宙を上昇しているこちらに回避する術はない。

だから――迫る無数の光に対し、刃更が選んだのは神速で放つ連続斬りによる迎撃だ。

「全部は無理でも……っ！」

一部被弾してしまう事は覚悟の上で、刃更は迎撃の体勢に入り、

「……え？」

しかしブリュンヒルドの間合いに入る直前――刃更の眼の前に突如現れた巨大な水の壁が、飛来していた無数の光の矢を全て弾き散らした。そして、

「――いきなり結界が展開されたから、何事かと思って来てみれば」

聞き覚えのある声がした瞬間――刃更の身体が風を纏って宙に静止した。慌てて振り返ると、眼の前に一人の少女がいる。勇者の一族の戦闘衣装に、左腕には霊操術を行なうための特殊な籠手。可愛らしい顔を少しだけ不機嫌そうにしているその少女は、

「胡桃……？」

そう。そこに居たのは柚希の妹――精霊魔術師の野中胡桃だった。そして、

「ったく。あたしに勝っておいて、世話の焼ける……」

そう嘆息しながら指をパチンと鳴らすと、刃更を守った水の壁が崩れ、そのまま雨となって降り注いで駅のホームや線路を濡らした。そして籠手のメインエレメントを水から風へと切り替えた胡桃が左手を地面へと向けると、その先に巨大な魔法陣が展開されて、

「待て、あの人達は操られて――」

「そんなの見れば解るよ。大丈夫――上手く手加減するから」

刃更が放った制止の声に、胡桃はさらりと言い放った。直後、大気の炸裂音と共に無数の細い雷が駅へ向かって降り注ぐと、濡れたばかりの駅のホームを閃光が駆け抜けて。

操られていた人達の意識だけを奪い去り――一瞬で全てを無力化した。

6

――まさか、広範囲型の雷撃魔法で操られていた人達を無力化するとは。

だが派手に魔法を使ったものの、その後の後始末は比較的簡単に済ませる事ができた。

結界内での出来事だったという事もあるが、それ以上に、刃更が襲われる前に駅全体が停電に陥ったお陰で防犯カメラが停止していた事が大きい。もしカメラが生きていたら、魔法などの異能は映らないが、結界が張られる前に、操られた人達に刃更が襲われた時の映像が録画されてしまっていただろう。そうならずに済んだのは幸いだった。

そして――程なくして刃更を襲った人達は意識を取り戻したが、誰ひとり操られていた時の事は覚えていなかった。ただ、これは特に珍しい事ではない……魔法などの異能を知覚できない一般人は、魔法で操られていた時の事は基本的に覚えていない事が多いからだ。いざという時は、勇者の一族が一般人に戦闘行為などを見られた際に使用する忘却香などの薬を胡桃が持っていたが、どうやら使う必要はなさそうだった。

――とはいえ気になる事があった。それは操られていた人達が魔法を使った事だ。

先日、ゾルギアが澪を攫う際に操られてしまった相川や榊のように、魔法などで意識を操られている場合、一時的に魔力の波動が見えるようになったり、本来持っている身体能力をフルに使えるようになったりもするが、魔法を使えるまでには至らない。念のため、操られていた人達の中に魔力が残っていないか胡桃が精霊に呼び掛けて確認してくれたが、特に反応はなかった。だから、ひとまず刃更と胡桃はその場を離れる事にした。

電車はまだあったが、乗客でごった返している車内でまた周囲を操られては敵わない。そこで胡桃の飛行魔法で、家まで運んで貰う事になった。魔力を周囲に展開すれば、人の眼に付く心配もない。そして、胡桃の腰に捕まって夜空を飛んでいた刃更は、

「……そうか。こないだ柚希がした《里》への定期報告の件で」

胡桃から今回来た理由を聞かされ、納得の言葉を漏らした。

「長老達としては、おいそれと見過ごせなかったって訳だ……」

「当然でしょ。S級クラスの高位魔族二体とやり合っただなんて――そんなの大戦が終結して、あたし達が生まれてからは一度もなかった事じゃない」

と呆れたように胡桃。

「そのゾルギアって高位魔族を倒したから、一旦事態は落ち着いたって話だけど……流石に監視役のお姉一人じゃ手に余るだろうから、追加人員を派遣する事になったの」

成る程な、と刃更は呟いた。本来――S級クラスの魔族に対抗するための応援が胡桃一人などという事はあり得ない。それこそ前回の高志や斯波に加え、もっと大人数でパーティを組んで来ても良い筈だ。それをしないという事は、

……長老達は、とことん静観を決め込むつもりだな。

澪を巡る争いは魔族同士のいざこざとして一切の介入は行なわず、可能な限り周囲に被害が出ないようにしながら、どのような結末になるかだけを見届ける腹積もりなのだろう。

要はその監視任務が、S級クラスが絡むとなると柚希だけでは厳しいと判断した訳だ。

となると、胡桃が自分から志願してくれたか、或いは前回の件で柚希が勝手な行動を取った事もあり、長老達が野中家へ責任を取らせたかのどちらかか。いずれにせよ、

「それでお前が来てくれたのか……お陰で先刻は助かった。サンキューな胡桃」

いきなり雷撃魔法をぶちかました時はどうしようかと思ったが、見た目ほど威力は高くなかったしな。刃更が感謝の言葉を告げると、ツンとしながら胡桃は言った。

「あたしが来たのはお姉のためよ。アンタや成瀬澪を助けるためじゃないんだからね」

だけどその頬は少しだけ赤くて。刃更は笑みと共に「ああ解ってる」と頷いた。

「――にしても刃更、一般人を操ってアンタを襲いそうな奴に心当たりはない訳？」

「どうだろうな……お前が来てすぐに退いた事を考えると、勇者の一族とはあまり事を構

えたくなさそうな感じだし。また澪絡みで魔族が来た可能性はあるけど……」

滝川の話では、現魔王派も穏健派もしばらく動きは控えるだろうという話だった。ゾルギアが倒された事や、現魔王が他に勝手な真似をする者が出ないよう眼を光らせている現状で仕掛けてくるとしたら、相応の力と覚悟の持ち主だ――ならば、胡桃が居合わせた位で退くとは思えない。それに澪ではなく、刃更が一人でいるところを狙ってきたのも気になる。邪魔な刃更を始末する目的か、或いは《無次元の執行》が狙いか。

……滝川は、今頃はもう魔界へ向かっている頃だろうしな。

現魔王派へ報告に戻るという話だったから、下手にこちらから連絡を取るのは避けた方が良いだろう。無論、東城刃更がラースにではなく、クラスメイトの滝川八尋に連絡する分には何の問題もないのだろうが、かといって向こうで誰が聞いているか解らない以上、魔族の動向に関する事が訊きたくてこちらからアプローチするのは止めるべきだ。

……とはいえ、絶対に何とかしないとな……。

これまでと違い、今回の相手は容赦なく無関係な人達を巻き込んできた。それは、刃更が最も避けたかった事態の一つだ。心情的には勿論の事、一般人に危害が及ぶような事があれば、《里》の澪への監視対象という判断が、また消滅対象に切り替わらないとも限らない。たとえ相手の狙いが刃更だったとしても、《里》の判断がどう転ぶかは不確かだ。

一族から追放された今の刃更を守るべき一般人と見るか、先代魔王の娘に荷担している危険分子と見るか、どちらでも都合の良い解釈ができてしまう。だから、

「取り敢えず、帰ったら万理亜に訊いてみる。現状だと手掛かりが少なすぎるからな」

7

それから数分後――刃更は胡桃と共に帰宅した。

柚希が現在、東城家で澪や万理亜とも一緒に暮らしている事は《里》も承知している話だ。よって相手が魔族でも、監視対象として特に争いを仕掛ける事はするつもりはないという事だった。そして二人が玄関の扉を開けて中に入ると、

「あ、お帰りなさい刃更さーん」

明るい声と共に、万理亜が脱衣所から刃更達を迎えに出てきた――その途端、

「――――っ!?」

背後の胡桃がギョッとなったように息を呑み、刃更は「しまった」と頭を抱えた。

万理亜の格好が、例のなんちゃって裸エプロンだったからだ。すると、

「おや、これはこれは柚希さんの妹さんじゃないですか……今日は何のご用で？」

無防備にトコトコとやって来る万理亜に、胡桃は血相を変えて、
「あ、アンタ……何なのその格好っ!?」
「――いや胡桃、これは違うんだ。おい万理亜、ちょっと回って見せてやってくれ」
「？　こうですか？」
くるっと万理亜はその場で回転。すると何故か横乳が見えて、脇腹も見えて、ぺろんとお尻が丸見えになった。もちろん背中も全開だ。刃更は思わず固まってから、
「って、何で服着てないんだよっ!?」
「裸エプロンと見せかけて、本当に裸エプロンというフェイントです。ふふふ、まんまと引っ掛かりましたね刃更さんっ！」
何でしてやったりなんだよ。ちょっとは空気を読め空気を。すると案の定、
「や、やっぱりそうなんじゃない！　一体何のつもり、そのおかしな格好はっ!?」
我慢も限界とばかりに、胡桃が顔を真っ赤にして叫んだ。
「おやおや～？　もしや、実際に見るのは初めてですかー？　ふっ……ならばとくとご覧なさい。これが男の人の永遠のロマン――裸エプロンですっ！」
「馬鹿じゃないっ!?　誰もそんな事聞いてないってのっ！」
堂々と両手を腰にやり無駄に仁王立ちした万理亜に、胡桃は噛みついた。いかん……帰

宅早々、修羅場すぎて一触即発だ。何とかしないと、と思考を焦らせた刃更は、
「そうだ万理亜、柚希は？　それに澪も。二人はどうしたんだ？」
こうなったら柚希に胡桃を宥めて貰い、澪に万理亜をしばいて貰うしかない。というか、何でこんな騒ぎになっているのに二人は出て来ないのだ。慌てて問い掛けたこちらに、
「おっとそうでした。お二人がリビングでお待ちです。早く行ってあげて下さい」
「？　そうなのか？　解った」
何だろう。何か話でもあるのだろうか。刃更は靴を脱いで上がり、
「胡桃も遠慮しないで上がってくれ」
「……お邪魔します」
とことん不機嫌そうに言って、胡桃は靴を脱ぎ始めた。すると、
「――あ、そうだ刃更さん。先に靴下をここで脱いで下さい」
そう言って万理亜が両手を差し出してきた。脱衣所から出てきたし、洗濯機を回していたのだろうか。こんな時間にとも思うが、東城家の家事は基本的に万理亜が全て取り仕切っている。刃更は言われた通りに靴下を脱いで渡すと、リビングの扉を開けて、
「悪い二人共、遅くなった――どうした、何か話でも」
あるのか……と言おうとした刃更は、しかしその場で立ち尽くした。

下着姿の――扇情的なビスチェ姿の澪と柚希が、床に四つん這いになり、恥ずかしそうにこちらを見上げていた。
頭の上と尻に、犬の耳と尻尾のアクセサリーを着けて。

野中柚希は、成瀬澪と共にいやらしい雌犬の格好で刃更の事を迎えていた。
――魔族の滝川から、せいぜい刃更の足手纏いにならないようにと忠告を受けた後。
無言で家路を歩きながら、柚希と澪はずっと考えていた――どうすれば自分達は、刃更の傍で、彼の役に立つ事ができるだろうと。勿論、滝川が言ったように強くなる事が第一だ。ゾルギアの館でゼストと戦った時、柚希と澪はコンビを組んで戦った。あれ以降、密かに戦闘時の連携の確認などを行なっていたが、今後はより実戦的な修行や鍛錬を積むべきだろう。だが――それだけではまだ足りない。できる事は何でもやるべきだった。
そして想いを同じにした柚希と澪が二人で相談した結果、今まで以上に刃更に屈服する事を決断した。それが主従契約魔法で刃更の下僕となり、互いの信頼と絆を深めれば深めるほど戦闘力を上げられる現在の自分達にできる、刃更のための行動だと思ったのだ。
だから家に戻ると、二人は万理亜に相談した。どうすれば自分達は、もっと強く――も

っと刃更に服従できるようになるだろうかと。すると、それならばと万理亜は柚希と澪に扇情的なビスチェを着させ、さらにこの犬の耳と尻尾を着けさせたのである。

そして――刃更が帰ってくるまで、柚希と澪は万理亜によって徹底的に仕込まれた。

美しい四つん這いのなり方。男を興奮させる尻の振り方。舌でのいやらしい舐め方。

そういった諸々の所作に加え、刃更に服従できる事がどれほど幸せかを徹底的に認識させられて。そして――柚希と澪は、刃更に服従する雌犬になった。だから、

「悪い二人共、遅くなった――」

リビングに刃更が入って来た瞬間、柚希の心をこの上ない悦びが満たした。

……ご主人様……。

思わず飛びかかってじゃれつきそうになるのを、必死に堪えた。その辺の飼い犬みたいな真似は厳禁だ。自分達は主の――刃更のために調教された雌犬なのだから。そして、

「っ……、お前ら……？」

こちらを見た刃更が驚いたように澪達を呼んだ。それを受けて、

『――――』

柚希と澪は、ゆっくりと四つん這いのまま刃更の方へと歩き始めた。刃更のために覚えた腰を使ったいやらしい尻の振り方をすると、着けている犬の尻尾が太股や尻をくすぐる

ように撫でて、ゾクゾクしてしまうほど気持ち良い。

そして刃更の足下へと辿り着いた柚希は、まずは澪と共に刃更を見上げた。

……あ……。

絶対的だった。刃更の顔が、いつもの身長差と比較にならない程の高さにある。それを見ると、雌犬になった今の己と主である刃更の関係がどういうものかを強く認識する事ができて——澪とそれぞれ刃更の左右の膝へと自分の頭を擦り付けた柚希は思う。

……これで、今度から……。

作りものの耳と尻尾を着ければ、自分と澪はいつでも本物の雌犬になれる。

凄い……悦びを得て無意識に振った尻が、勝手にいやらしい動きになってしまう。

もう立派な雌犬だった。だから顔を見合わせた柚希と澪は、ゆっくり顔を下へ向け、

『……』

そして同時に刃更の足を舐めた。それが野中柚希と成瀬澪の「二人」を、正式に「二匹」の雌犬へと変える行為だった。口の中に溜まっていたとろりとした唾液に濡れた舌が、刃更の足の質感を、その温度を、味までをも柚希にたっぷりと教えてくれる——だから、

「っ——」

野中柚希は、己の尻がブルっと震えてしまったのを感じた。そして甘い感覚が全身を駆

け抜け、柚希の躰を熱くする。刃更の足を舐めただけで軽く達してしまったのだ。
そして隣の澪も同じようにビクンと躰を震わせた瞬間――柚希達を光が包み込んだ。
刃更へさらに上位の屈服をした事を主従契約が認め、全員の戦闘力を上昇させたのだ。

主である刃更を強くする事ができ、自分達もまた力を増す事ができた。
それは刃更の命が危険に晒される可能性が減ったという事だ。よって、
……凄い、まだこんなに屈服できるなんて……。
己の戦闘力が上昇した事を感じながら、成瀬澪は震えるような達成感を得ていた。
――本当ならば、刃更に抱かれて己の全てを捧げてあげたかった。しかし、ゾルギアによって生み出されたゼストが、魔族では珍しく処女の状態である事を強大な力の根源としているのと同じで、澪達も今はまだ刃更に抱かれる訳にはいかないのだ。
……だって。
魔界に戻る前にゼストが言っていた。澪が受け継いだ実父ウィルベルトの力は、死ぬ間際に庇護する目的で親から子へと受け継がれた可能性があり、もし澪が誰かに抱かれれば、その瞬間に澪は大人になったと判断され、それまでの父親に守られる存在だった立場を放

棄した事になり、受け継いだウィルベルトの力は消えてしまう確率が高いのだという。

また柚希が言うには勇者の一族の女性も同じで、彼女は霊刀に宿る精霊『咲耶』に使い手として選ばれているが、それは言わば巫女のような存在であるらしい。よって誰かに抱かれて純潔を失えば巫女としての資格を喪失し、力の大半を失ってしまうとの事だった。男は家族を持っても外に出て戦う生物のため純潔かどうかは重要ではないらしいが、柚希の母親などは柚希を産んで以降は、ほとんど力を使えなくなってしまったそうだ。

強大な力は、放棄する方法やタイミングを誤ると大変な事になる。現魔王派と穏健派の争いが続いている今、下手に力を失って刃更の足手纏いになる訳にはいかなかった。

唯一、サキュバスの万理亜は刃更に抱かれても力を失う事はないらしいのだが、例の成体化は魔法鍵で大人に変身して強大な力を得るものらしく、誰かに抱かれてしまったら既に大人の状態と同義になり、魔法鍵を差し込んでも変身できなくなってしまうらしい。

――だが逆に言えば、三人とも抱かれる以外の事なら何をしても構わないという事だ。

だから澪と柚希は今回、恥ずかしいのを我慢して雌犬になる事にしたのである。

少しでも刃更への服従を強めて、みんなで一緒に強くなるために。すると、

「お、おい、二人共……もう良いんだぞっ!?」

澪達が何故こんな真似をしたのか解ったのだろう。刃更が慌てたようにこちらを制止し

た。しかし、澪は刃更の足を舐める事を止めなかった。隣の柚希が夢中になって彼の足の指をしゃぶり続けていたからだ。舌を這わせ、いやらしく音を立てる柚希は壮絶に淫らで。負けたくなかった。だから澪も、眼の前にある刃更の足の指に舌を伸ばそうとして、

……え？

ふと刃更の足の後ろに、別の知らない足があるのを見た。万理亜の足ではない。彼女の足は、四つん這いになった時に見て知っている。ならば一体誰か——顔を上げた澪は、

「——————」

その足が、見覚えのある少女のものだったという事を知った。

そしてその少女と——こちらを見て硬直している野中胡桃と完全に眼が合って。雌犬になる自分の覚悟が、刃更と万理亜と柚希の前に限定されていた事を思い出した澪は、

「っ——————きゃあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっ！」

絶叫にも似た悲鳴を上げた瞬間、雌犬から人間へと戻った。

そして犬の格好をした澪がその場から逃げだし、完全に自室へと閉じ篭もった後。

「っ……さあ、どういう事かきっちり説明して貰うからねっ！」

怒りの形相で腕を組んで仁王立ちする胡桃に、刃更達は説教されていた。右から柚希、刃更、万理亜の順に並ばされ、正座を強制されている。

……まあ無理もないよな。

事情を知っている刃更ですら、戦闘力上昇の輝きが生じるまで、澪と柚希がこんな真似をした理由が解らなかったのだ。だから、まずは主従契約魔法について一通り説明し、そして刃更達が必要にかられてその関係を結んでいる経緯をきちんと話した。

すると魔法の知識がある胡桃は、納得はできないが理解はできたようで、

「つまり――先刻のは刃更との主従の絆を深めて、戦闘力を上げるためだったって事？」

「……そう。私と澪が雌犬になって刃更に屈服したから、また三人とも強くなれた」

刃更の隣の柚希が、彼女のしている格好の意味を教えた。先程から胡桃への説明は柚希が行ない、刃更と万理亜は沈黙を保っている。胡桃の性格を考えると、事情を説明するのは刃更や万理亜ではなく、実姉の柚希が行なうのが一番だと判断したからだ。しかし、

「ちょ、ちょっと待って。また、って……まさかこれまでにも同じような事してたの？」

ギョッとなった胡桃に、柚希はコクンと首肯して、

「私のパワーアップはこれで二回目。一回目は主従契約を結んだ時に、催淫状態だった私を刃更がいっぱい屈服させてくれた」

あれ……柚希に説明を任せたのは失敗だったか？　胡桃の怒りゲージが、明らかにグングン上昇しているのが解る。すると案の定、全てを聞いた胡桃は怒気を孕んだ声で、

「っ――お姉も刃更も、何考えてんのっ!?　幾ら強くなれるからって、魔族なんかの魔法に頼ってあんな真似……『咲耶』から使い手と認められなくなったらどうするのさ!?」

「いや、それは――」

「あ、その辺の心配ならいりませんよー」

言い淀んだ刃更の横から、万理亜が割って入った。

「柚希さんが霊刀の使い手に選ばれたのは、幼い時に刃更さんと離れ離れになった後でしょう？　だとしたら霊刀は柚希さんの中にあった、刃更さんを守りたいという強い想いを知った上で自身の使い手として力を貸してくれています。その柚希さんが刃更さんの役に立つために、互いの魂を結び付けたところで拒否されるなんて事はまずあり得ません」

「っ……だからって、あんなの……絶対におかしいでしょっ!?」

顔を赤くして叫んだ胡桃に、万理亜は瞳をスッと細いものにして、

「おかしい？　もし柚希さんが刃更さんと主従契約を結んでくれていなかったら、先日の戦いで私達は命を落としていてもおかしくありませんでした。相手は貴女達が言うところのS級クラスの高位魔族。ゾルギアはそれ程の敵だったんですよ。それなのに、プライド

を優先して、柚希さんや刃更さんが死んだ方が良かったって言うんですか？」

一息、

「柚希さんのやろうとしている事を知っていながら、一人で澪さまの監視に戻らせて――応援も寄越そうとしなかった貴女達が」

「それは……っ」

胡桃が苦い表情になったのを見て、

「万理亜……応援を寄越すかどうかは長老達が判断する事で、胡桃が悪い訳じゃない」

それに、と刃更。

「帰りの途中であった事を話しただろ。さっき俺が襲われていた所を胡桃は助けてくれたんだ。それは、柚希の監視任務の応援要員って《里》の命令には含まれていない事だ」

あんまりコイツを悪く言わないでやってくれ。何せ、

「俺だってリビングの扉を開けたらビックリしたんだ……俺達の事情を知らない胡桃が困惑しない方がおかしいだろ」

助け船を出したこちらに、胡桃が少しだけ雰囲気を軟化させた。ところが、

「ああ、そういう事だったんですか。要は、この手の知識や男女の機微などを全く知らないお子様には刺激が強すぎて、恥ずかしさを誤魔化すため傍迷惑に怒っただけ……と」

万理亜の挑発的な言葉が、ほとんど鎮火していたその場の空気を再び燃え上がらせる。
「こ、子供扱いしないで……っ、来年にはあたしも高校生よ！」
「あはは、年の話なんかしてませんよ？　中身がガキだって言ってるんです。全く、大人な柚希さんとは大違いです……実の妹とは思えません」
「っ……ガキじゃないしっ！　それに、あたしの方がお姉より成長早いし大人だもんっ。女の子の日だってあたしの方が早く来たんだから！」
「――――」
あれ。今、柚希がピクっと反応したような。すると、
「ほほう……柚希さんよりも大人、と。そこまで言うなら、見せて貰いましょうか」
「み、見せるって……そんな」
「あっれー、自信がないんですか？　あ～あ～、だったら止めておきましょうか。都会は大人の女が暮らす所ですので。お子様は諦めて田舎の山奥の《里》へお帰りなさい」
「そんな事ないもん！　良いよっ、嘘じゃないって証明してあげる！」
胡桃がカッとなって叫んだのを刃更は見た。挑発に乗ってしまったのだ。

「お、おい胡桃――」
「っ――刃更は黙ってて！」
こちらを制止しようとした刃更の声を、野中胡桃は強引に遮った。
……やってやろうじゃない……っ。
勇者の一族が、こんな事で魔族に後ろなど見せるものか。流石に男性経験などは一切ないが、先日の刃更達との戦闘後――《里》に戻った胡桃の身体は変化を始めている。胡桃もまたこの五年、心のどこかであの悲劇以来時間を止めてしまっていたのだ。それが自分達だけでなく――いや、自分達以上に刃更が苦しみ続けていたのを知った事で、刃更への想いと共に止まってしまっていた胡桃の心と身体の時間を動き出させたのである。
お陰で最近は《里》で仲の良いおばちゃん達から「急に大人っぽくなった」「柚希ちゃんよりも色っぽいかも」などとも言われているのだ。
「さあ、好きに確認しなさいよ」
「では、早速――」
そう言って立ち上がった万理亜はまず柚希の下へ行き、「失礼します」と断ってビスチェの上から左胸に触れると、スッと眼を閉じて大きさを確認。そして、次に胡桃の所へとやって来て、こちらを覗き込んできた――ただし、胸ではなく眼を。

「な、何を……？」

胸のサイズを比べられると思っていた胡桃は、思わず戸惑いの声を上げた。

すると、眼の前にある万理亜の瞳には魔法陣が浮かんでおり、

「……え？」

次の瞬間、胡桃は自分が床に尻餅をついている事に気が付いた。一体どうして――そう思った途端、下腹部の奥から猛烈な甘い疼きと熱の奔流が湧き上がってくる。

それは――野中胡桃がこれまでに得た事のないような凄まじい快感だった。

「っ……やあぁっ、な、何よこれ……んうっ、アンタ……あたしに何を」

「別に、ちょっとサキュバスの洗礼を与えて催淫状態になって貰っただけですが」

「なっ……胸の大きさを確認するだけなんじゃ……あぁっ」

顔を赤くした胡桃が濡れた瞳で見上げると、万理亜はしれっと笑って、

「いいえ？　私は胡桃さんが、柚希さんより大人の女かどうかを見せて貰うと言ったんです。だったら、柚希さんより淫らになれるか確認するしかないでしょう……さあ刃更さん、胡桃さんが本当に柚希さんより大人か確認してあげて下さい」

「な、何で俺が……っ？」

「何でって……胡桃さんは、柚希さんより大人かどうかを証明して見せると言ったんです。

だったら、柚希さんと同じ条件じゃないと不公平でしょう」

いきなり話を振られて思わず狼狽える刃更に、万理亜が当然のように言い放った。

「今夜は満月ではないため主従契約は無理ですが、催淫状態のレベルや解除方法を同じにする事はできます。そして私が先ほど柚希さんの胸に触れたのは、大きさを確認するためじゃありません。柚希さんの躰がどれだけ性的に開発されているかを確認させていただき、胡桃さんが同じレベルの快感を得られるよう、サキュバスの洗礼のレベルを調整するためです。いきなり今の柚希さんと同等の強さの催淫なんて、初心者にはまず無理ですが」

でも、と万理亜は悪魔の笑顔でこちらを見て、

「柚希さんより大人な胡桃さんなら、こんなのは温くて物足りないぐらいですよね？」

「そ、そんな……あ、そんな事……っ」

甘く喘ぐようにして言った胡桃は、刃更の嘆息を聞いた。そして、

「催淫の解除方法が、柚希と同じって事は……俺が屈服させるしかないんだな」

「はい――ですが刃更さん、柚希さんにもやらせてあげて下さい。妹に自分の方が大人だなんて言われたら、黙っていられませんよ……ねえ柚希さん？」

「……当然」

万理亜の言葉に、柚希はスッと立ち上がって胡桃の方へとやって来る。

その首には、いつの間にか首輪状の痣が薄っすらと浮かんでいた。胡桃の発言や、胡桃がこれから刃更にされる事で嫉妬を得て、主従契約の呪いが発動しかけているのだろう。

催淫状態に陥りかけている柚希は、こちらの背後へと回ると、

「妹のクセに生意気……どっちが大人か思い知ると良い」

「やっ……お姉っ？」

そう言って胡桃の服を脱がし始めた。抵抗しようとするのだが、湧き上がる甘い感覚に躰に力が入らなくて、胡桃はあっという間に下着姿にされた。そして、

「さあ刃更……ウチと胡桃、どっちが大人か一緒に確認して」

「っ……駄目っ、そんなの……やっ――ふあぁあぁん」

抵抗しようと思ったが、強くなる一方の甘い感覚に胡桃が身悶えると、

「大丈夫だ胡桃……俺達ですぐに楽にしてやるから」

そう言って、そっと伸ばされた刃更の手にブラの上から胸を触られた――その瞬間、

「――――」

甘い感覚が一気に膨れ上がり、野中胡桃は絶頂の味とその意味を思い知らされた。

そして――そこからはもう、現実の事とは思えなかった。

刃更と柚希の二人によって、胡桃は己の全てを確認されてしまった。万理亜の洗礼で、

胡桃の全身は恐い位に敏感になっていて。下着の上から胸や尻を滅茶苦茶に揉まれ、何度か絶頂させられたら、すぐに何も考えられなくなり――そして二人にブラを剝ぎ取られて、直接胸を愛撫され始めた頃には恥ずかしいと思う事すらできなくなった。そして、

「やんっ……はぁ……刃更、兄ちゃ……やぁ……んっ……あぁん……っ」

「んっ……刃更ぁ……胡桃だけじゃなくて、ウチもぉ……っ」

胡桃がされている内に、嫉妬を深めた柚希に主従契約の呪いが発動すると、刃更と柚希の間でもいやらしい行為が始まった。そして淫らな姉の姿を見ている内に、幼い頃に三人で遊んでいた時の事を思い出し、いつしか胡桃は三人でする事に悦びすら覚え始めて、

「胡桃、頭の上で両手を組んで……」

「っ……ん、こう……？」

仰向けになった刃更の腰の上に跨がらされた胡桃は、快楽で溢れているショーツの中に手を入れられて彼に直接尻を揉まれながら、姉の言う事に従った。すると、背後から同じ敏感さになった胡桃の胸を揉んでいた柚希に、右の脇を舐められた瞬間、

「っっ――ひあぁぁぁんっ!?　やぁっ、お姉ぇ……そこはっ、だめぇ……っ」

「可愛い脇……んっ……れろ」

これまでにない絶頂感に思わず身を暴れさせると、柚希はその反応を楽しむように胡桃

の脇へ舌を這わせ始めた。脇から全身へ抜ける快感を逃がそうと腰をくねらせたら、今度はこちらの尻を揉んでいた刃更が、そのまま身体を起こして胡桃の胸を吸い始めて、

「やっ……刃更兄ちゃ……また、ぁっ……ん、あぁっ――やあぁぁあぁんっ！」

既に何度も吸われた胸の先端は、だからこそ敏感で――胡桃は甘えた声で刃更を呼びながら、彼の腰の上でビクンと達した。するとビデオカメラを構えた万理亜が、

「快楽に堕ちる勇者姉妹……いやあ、素晴らしい絵ですね。超眼福ですっ」

「……なあ万理亜、本当に俺が屈服させたら胡桃の催淫は解けるのか？」

そんな興奮した様子の幼いサキュバスに、胡桃を感じさせてくれながら刃更が言った。

「澪や柚希の呪いを解く時は、普段こんなに時間は掛からないだろ」

「ああ……それは多分、胡桃さんの弱点が胸や尻ではないからです。ですが、今の柚希さんにされた反応を見ると恐らく」

「……そういう事か」

「？　刃更兄ちゃん、何を……――っや、きゃっ!?」

強引に体勢を入れ替えられた胡桃は、刃更に覆い被さられるように床へ組み敷かれた。

「柚希……胡桃の両手を押さえててやってくれ」

「ん……解った」

そして柚希によって摑まれた両手首を、そのまま頭の上へと持ってこられた。すると身動きを封じられた胡桃は、刃更に見詰められながらそっと頬を撫でられて、

……あ。

その瞳に優しさと決意の色を見た野中胡桃は悟った。

直感する――自分は、これから刃更によって屈服させられてしまうのだと。そして、

「――行くぞ胡桃」

刃更の言葉に、胡桃はゴクリと喉を鳴らした。それでも、

「うん……胡桃を屈服させて、刃更兄ちゃん」

幼い頃の口調で懇願すると、無防備にさせられた脇にそっと口を寄せられて。

「っっ――――――」

次の瞬間訪れた異次元の絶頂は、野中胡桃の意識をあっさりと快楽に塗り潰した。

東城刃更は、胡桃が全身をわななかせながら気を失った瞬間を見た。

意識を飛ばす程の女の絶頂を味わった胡桃の顔は、快楽にうっとりとしていて。

それでも、その呼吸が穏やかなものになっている事に安堵の吐息を放つと、

「ありがとう刃更……後はウチに任せて」

胡桃の屈服が終わった事で嫉妬が収まったのか、催淫の呪いが消えた柚希は、胡桃を抱えて自分の部屋へと連れて行った。その背中を見送った刃更は、

「――万理亜、一体どういうつもりだ？」

二人きりになったリビングで、刃更は僅かに非難の色を込めて万理亜を睨んだ。

「胡桃とは主従契約を結んでいる訳でもないのに……何でここまでさせたんだ？」

すると万理亜は苦笑して、

「すみません……でも、柚希さんの応援として来たなら胡桃さんもこの家で暮らすんですよね？　だったら、刃更さん達の主従契約がどういうものか早めに知っておいて貰った方が良いと思ったんです。柚希さんの時みたいにあっさり受け入れてくれれば話は早かったんですが……やっぱり見たら反発されちゃいましたね」

「いや、でもそれが普通の反応だろ……」

「そうですね……でも刃更さんがさっき言った通り、胡桃さんは驚いてとっさに反発してしまっただけで、こちらへの矛を収める切っ掛けを探していました。だから、ちょっと強引に巻き込んじゃった方が良いと思ったんです。迅さんの真似じゃないですけど、これなら胡桃さんは私を悪者にして、仕方なく納得した事にできるでしょう？」

「それはそうかもしれないが……」
万理亜の真意を聞いた刃更は渋面を作って、
「だったら、何もお前だけが泥を被る必要はなかっただろ。今の俺達には、残念ながらまだ主従契約が必要だ。それは俺達全員の課題なんだ。ひょっとして……自分は魔界に戻されるかもしれないから、嫌われ役に丁度良いなんて思ってるんじゃないだろうな？」
「まさか、そんなつもりはないですよ……ただ、私にも姉がいますから」
と万理亜。
「魔界から迎えが来た時にご説明したように、姉は穏健派の現トップのラムサス様の配下です。厳しい姉は、ゾルギアの件で私が取った行動を許してはくれないでしょう……だから、せめて柚希さんと胡桃さんには仲良しの姉妹でいて欲しかったんです」
「……」
「なんてね、冗談ですよ。私はただ、単にサキュバスとしての本能に従って――」
強がるように笑っていた万理亜を刃更は強引に抱き寄せた。するとこちらの腕の中で、
「……もう、刃更さんてばロリコンですね」
クスクスと笑う幼いサキュバスに、
「別に……お前の事が大事なだけだ」

そう告げると、東城刃更は彼女の小さな身体を抱き締める手に力を込めた。
すると万理亜は「もう」と嬉しそうに微笑むと、ギュッと刃更を抱き締め返してきて。
二人だけのリビングで——刃更と万理亜はしばらくの間、そうして抱き合っていた。

第2章　深まる謎と友情の狭間で

1

「……やれやれ、随分と流されちまったみたいだな」
仄暗い洞窟の中で、東城迅は嘆息した。
――レオハルトとの戦闘中、少年兵を助けるために王城の水堀へ一緒に落ちた後。
水面へ浮上しても弓矢や魔法で狙い撃ちにされてしまうため、迅はそのまま離脱する事にした。水中で拳を繰り出して岩壁に穴を開け、堀の水源となっている地底河川の洞窟への突破口を開いたのだ。しかし水堀と洞窟が繋がった事で生じた激しい水流は、迅と少年兵を呑み込み、そのまま地底河川を一気に流されてしまっていた。
「まあ、このまま下流へ向かうのが一番か……」

随分と流されはしたが、それでも方向感覚は失っていない。魔王城の周囲の地形を考えると、恐らく水の流れに沿って進めば南の暗黒海へと出られるだろう。だから、

「――お前もそれで良いな、フィオ」

東城迅は、焚き火の向こうへ呼び掛けた。すると、どこかふて腐れたような声で、

「別に……好きにすれば良いだろ」

王城で助けた少年兵が言った。風邪を引くと良くないので着ていた軽装鎧や服を脱がし、代わりに迅のコートを貸してやっている。返ってきた反応に迅は心の中で苦笑して、

……少しは機嫌が直ってきたかな。

何せ眼を覚まして迅を見るなり、剣を抜いて襲い掛かってきた位だ。幼くして王城警備を任されるだけあって、少年兵はかなりの腕だった。とはいえ迅の相手ではなく、剣を奪って実力差を解らせてやると抵抗は無駄だと諦めた。濡れている軽装鎧や服を少し乱暴に引ん剝いたところ――それまで以上に暴れられ、変態呼ばわりされてしまったが。

それでも、名前を尋ねると警戒しながらも教えてくれて。その後はこちらの質問に対し、ポツポツとではあったものの、答えられるものは答えてくれた。

王城警備のフィオから聞く事ができた話は、城の外では決して得られない生きた情報だ。

無論、政治的な話は一介の兵士のフィオでは知る由もないし、知っていても教えてはく

れないだろう。それでも城内の雰囲気や、フィオや同僚の兵士達がどれだけレオハルトを敬愛しているかなどは教えてくれて――その拍子に、枢機院内にレオハルトが魔王の座に就いている事を快く思っていない抵抗勢力がいる事を不満げに漏らしていた。

……とはいえ。

城に忍び込んでいた時に盗み聞いた別の兵士達の話では、西域に埋もれていた古代の魔神戦争時代の遺跡を発掘したという。眠りに就いている英霊などが見つかり、それを目覚めさせて実戦へ投入する事ができれば、程なくして穏健派との戦いは終結するだろうとも。

……ちょっと良くねえな。

事態が悪い方向へ流れつつある。このままでは、下手をすれば現在の人と魔族との間にある休戦状態まで崩れてしまうかもしれない。解決する方法はなくはないが、

……さて、どうしたもんかな。全てを上手く行かせるためには。

現在の状況を想いながら、迅が思案を深めていると、

「……あのさ、聞いても良いか？　アンタって、ジン・トージョーなんだろ？　大戦で暴れ回った、勇者の一族の戦神の。そんなアンタが、レオハルト陛下の命を狙ったって事は――勇者の一族は、また俺達と戦うつもりなのか？」

それは不安を帯びた問い掛け。十六年前に大戦が終わってから魔界にも平穏が訪れてい

たが、一年程前に先代魔王ウィルベルトが死んで以降、魔界は幾つかの勢力に分かれて争うようになってしまった。それでもフィオは、現魔王派と穏健派との争いが終われば、魔界にまた平穏が戻ると信じていたに違いない。それなのに、迅が王城へ潜入してレオハルトと相対したため、戦いの終わりが見えなくなって不安を抱いたのだろう。だから、

「心配すんな……俺が魔界へ来たのは完全な単独行動だし、王城へ忍び込んだのはものついでだ。他の連中がこっちへ攻め込んでくる事はねえよ」

「陛下と戦うのが、もののついでって……じゃあアンタ、一体何しに魔界に来たんだよ？」

驚きに眼を見張るフィオに、東城迅は笑って言った。

「ああ、ちょっとな——こっちには、別居中のカミさんを捜しに来たんだ」

2

思いがけず胡桃まで屈服させてしまう羽目になった翌日の朝。

東城家では朝食の準備と並行して、とある話し合いが行なわれていた。

昨夜は帰宅後のドタバタのため出来なかった、駅で刃更が受けた襲撃についてだ。

「しかし、妙ですねえ……」

キッチンで朝食を作りながら万理亜が首を捻った。片手で卵を割って次々にボウルへ落とし、牛乳と生クリームを加えると菜箸で手際良くかき混ぜつつ、

「私達が穏健派とコンタクトを取った事は、現魔王派もとっくに気が付いている筈です。刃更さんの能力についてはラースさんが隠しているという話ですし、ゾルギアが澪さまを攫った件を先にこちらの世界から報告したところ、しばらくは澪さまやその周辺に勝手に近付くような真似は慎むよう、お達しまで出たっていうじゃないですか」

「……らしいな」

万理亜の隣で、サラダ用のドレッシングを作りながら刃更は肯定した。言われた通りの配合で、何種類かのビネガーとオリーブオイルを混ぜ合わせる。

「いかに連中が一枚岩ではないとはいえ、流石にこのタイミングで刃更さんを襲うような間抜けな者がいるとは思えません。まあ、ゾルギア自体が既にイレギュラーな存在でしたし、同じような真似をする者が絶対にいないとは言い切れませんけど」

「……じゃあ、穏健派がやった線はどうなの？」

別の可能性を口にしたのは、ダイニングテーブルに食器を並べていた澪だ。

「あたし達は、万理亜を引き渡す事を拒否したわ。穏健派だって一枚岩じゃないでしょうし、あたし達を快く思わない連中が居たっておかしくないじゃない？」

澪の声には、僅かに思い詰めた感じが見え隠れしていた。昨夜もそうだったが、やはり自分から刃更へ狙いが移った可能性を気にしているらしい。

「しかし、今の私達は高位魔族のゾルギアを倒すだけの力を持っているという評価を得ています。何より、澪さまはウィルベルト様のたった一人のご息女ですから。ここで刃更さんを襲撃して、いたずらに澪さまの信頼を失うような真似はしないと思いますが……」

万理亜がそこまでを言ったところで、柚希が扉を開けてリビングへと入って来た。

「……どうだった？」

様子を窺う問い掛けに、胡桃を呼びに行っていた柚希は首を横に振って、

「布団を被ったまま中から出てこない。朝ご飯はいらないって」

「おや、それはいけませんね。朝ご飯は一日の活力です。胡桃さんのような成長期には、一日の食事の中でも特に朝食が大事だというのに」

「あのね……どう考えてもアンタのせいでしょうが。もう……」

嘆息した澪の頬がスッと赤くなった。一匹の雌犬となって乱れてしまった自分を思い出したのか、無意識にそっと己の身体を浅く抱く。柚希も僅かに頬を赤くし、熱を帯びた瞳を刃更へと向けてくる。いかん、と刃更は咳払いを一つし、

「と、とにかく……いずれにせよ可能性があるとしたら独断で動いている奴って事か」

「ええ。それと、気になるのは相手の目的です。胡桃さんが現れるや、すぐに結界を解いて引いた事を考えると、何らかの警告だったという可能性もあります」
「警告、か……」
「――万理亜に質問がある」
反芻の呟きを刃更が漏らすと、対面式キッチンの前に柚希が立った。
「魔族は一般人の精神を操るだけでなく、魔法まで使えるようにできるのか教えて欲しい。私がこれまで相対してきた魔族の中には、そんな事ができる者はいなかった」
「うーん、私にもちょっと心当たりがないですね……」
と悩ましげな声で万理亜。
「高位魔族が眷属として魔力を分け与えたりすれば可能でしょうが、それなら一時的ではなく魔力は永続する筈ですし……他にも何か抜け道があるのかもしれませんが」
「……そう」
柚希は静かな声で呟くと、それっきり黙って何かを考え込んでいた。だから、
「今回の件で、《里》が動く可能性があるのか？」
「……恐らくそれはまだないと思う。現状は魔族の仕業の可能性が高い。それならば、これまで澪が狙われたのと同じで魔族同士の争いという事で静観を貫く筈」

ただ、と柚希。

「無関係な一般人が操られた事は、《里》が介入する動機としては充分。今回は胡桃一人で対応できたし、特に怪我人もいなかった。警告の可能性もある事も考慮すれば、私と胡桃とで警戒するように指示されるだけで済むと思う。でも――」

「――もし一般人に被害が出たら、《里》はすぐにでも動くだろうな」

《里》が柚希や胡桃のように、こちらの応援として動いてくれるのなら何の問題もないし、むしろ心強い。だがこれまで澪が狙われてきた経緯を考えると、たとえ今回の狙いは刃更だったとしても、その原因として澪が槍玉に挙げられてしまうかもしれない。澪のためにも、柚希や胡桃のためにも、それだけは避けなくては。

或いは――敵の狙いはその辺りにあるのかもしれない。だとしたら、

「念のため、しばらく学校に行くのは避けた方が良いか……」

今回の敵は、周囲を巻き込む事を躊躇していない。学校のように生徒や教師など多くの関係者を抱えている場所へ行けば、また周囲を巻き込む可能性がある。しかし、

「いいえ……敵の目的がまだはっきりとしていない以上、刃更さん達にはむしろ学校へ行っていただいた方が良いと思います。もし昨夜の襲撃が魔族の仕業なら――穏健派でも現魔王派でもない、それ以外の勢力の可能性がありますから」

と万理亜。

「彼らは穏健派と現魔王派がこれ以上の力を持つ事を嫌っていますから、現魔王派がウィルベルト様の力を手に入れる事は勿論、澪さまが穏健派に迎え入れられるような事態も避けたい筈です。そのためには、澪さまを始末するのが最も手っ取り早いし確実です。無論、直接手を下すような真似をすれば魔界の二大勢力を敵に回す事になりますが――」

「周囲に被害を出す事だけが目的で、それで勇者の一族に澪を始末させようって事か」

「そんな……」

万理亜の後を継いで刃更が口にした推測に、澪が愕然の呟きを漏らす。

「無論、あくまで可能性の話です。現に昨夜襲われたのは刃更さんですし、一般人に被害を出すつもりなら、昨日の時点でもできた筈ですしね」

ただ、と万理亜。

「それでも敵の狙いがはっきりしない以上、こちらはあらゆる可能性を考慮して動いておくべきです。もし敵の狙いが本当に澪さまを始末する事なら、最も効果的なのは澪さまと直接の繋がりがある学校の関係者を狙う事ですから。昨夜の襲撃が刃更さん達をこの家から出さないよう誘導する事だったとしたら、こちらが周囲を気遣って学校に行かない結果、反対に敵を動きやすくさせてしまう羽目になります」

そして、もしその間に学校に襲撃を掛けられでもしたらこちらには防ぎようがない。
それならば、いっそ敵の狙いを探る意味でも、こちらも動いた方が良いだろう。
「……解った。敵の狙いが判明するまでは、俺達はなるべく普通に生活しよう」
ただし、と刃更は付け加える。周囲に被害を出さないよう、力強い口調で、
「学校内ではこれまで以上に警戒して、登下校時は必ず揃って行動する――良いな？」
その言葉に異論を唱える者はなく、全員がしっかりと頷いた。

3

ところが――刃更達の警戒を察してか、その後二度目の襲撃が発生する事はなく。
通常の授業に加えて体育祭の実行委員会の仕事もあるため、追い立てられるかのように忙しい日々が過ぎていった。それこそ、まるで駅での襲撃などなかったかのように。
――しかし、東城刃更が警戒を怠る事はなかった。
あれ以来、何者かの視線を感じるようになっていたからだ。そして、
……また視られてるな。
体育の授業中。二クラス合同でグラウンドに並ぶ男子の列の中で、この日も東城刃更は

自分へ向けられている視線を感じ、僅かに身体を緊張させた。以前に柚希や滝川が澪に対して、ゼストが刃更達に対して行なっていたような、対象に気付かれないように行なう監視ではない。どこから視ているのかは解らないが、視線の主は明らかに刃更が気が付くように、自身の視線や存在を主張してきている。当然、刃更もその気配を追って相手を探すのだが、視線の主はこちらに尻尾を摑ませず、残念ながら発見には至っていない。

打つ手を見出せない状況が続く日々――しかし、判明した事もあった。

――まず、向こうの狙いが刃更であるという事だ。これまで同様、相手の狙いがウィルベルトの力を受け継いだ澪の可能性も考えられたが、視線を感じるのが刃更だけという状況を考えると、澪の命を狙う魔界の第三勢力という可能性は低いだろう。

……そして。

もう一つ――相手は聖ヶ坂学園関係者の可能性が極めて高い。何故なら視線を感じるのは決まって刃更が学校内にいる時で、周囲に人の眼があり目立つ行動を取れない時ばかりだからだ。刃更達は周りを巻き込むような事態にならないよう、外からの侵入者に対して最大限の注意を払っている。にも拘らず、こちらの懐深くまで入られてしまっている事を考えると、学校関係者としか思えなかった。しかし、

……そんな事があり得るのか？

学校には、澪の監視任務で柚希や滝川が潜入している。当然、二人は周囲に脅威がないか常に確認や検索を行なっていた。無論、先に潜入していた滝川が柚希の検索に引っ掛からなかったように、実力差のある場合は先行者のアドバンテージはある。もし、高位魔族のゾルギアをも出し抜いてみせた滝川ですら気付けなかった相手だとしたら。

考えたくもない事態だった。刃更の後に転入生がいない事を考えると、刃更達より前からこの学校に隠れていたのか、後から誰かに化けて入り込んだかのどちらかだろう。

――だが、こうも気配を伝えられれば必然的にこちらも警戒する。そう考えると、刃更の命や《無次元の執行(バニシングシフト)》の能力が目的とは考えにくい。だとしたら――万理亜が言っていたように駅での襲撃は何らかの警告で、今もそれが続いている状態と見るのが妥当か。

しかし、学校の中でまで執拗に視線や気配を放ってくる事を考えると、そこには警告以上の何かが込められている気がしてならない。その気になれば、また無関係な周囲を――今度は他の生徒や教師らを巻き込むとアピールしているつもりなのだろうか。

「……っ」

誰だか知らないが、いやらしい真似を……体育教師が出欠を取る中、刃更はギリっと奥歯を噛み締めた。ただの挑発にしては悪質すぎる。刃更を最も苦しませるには、無関係な人間を巻き込むのが一番有効だと解っているのだろう。だが――そんな事はさせない。

澪や万理亜を取り巻く魔族の状況や、柚希に加えて胡桃まで派遣してきた勇者の一族の思惑を考えると、このタイミングで取り返しの付かない事態が起きたら、自分達は一気に苦しい状況へと追い込まれてしまう。刃更がギュッと拳を握り締めていると、こちらを嘲笑うかのようにフッと視線の気配が消えた。刃更が身体の力を抜いて嘆息すると、

「よーし、それじゃあ二人一組になって柔軟」

出欠を取り終えた体育教師の呼び掛けに、それぞれがパートナーとの柔軟体操を始める中、東城刃更はポツンと一人で立ち尽くしていた。ぼっち全開なのは普段の相方――滝川八尋が、現在魔界へ戻っていて不在のためだ。二学期の後半ともなれば、体育の時間に作る二人一組のペアなど完全に固定されている。滝川が不在だからといって、夏休み明けからこの学校に通うようになった刃更に、都合良く代わりなど見つかる筈もない。

仕方ない――今日も先生にパートナー不在を申告しようとした刃更は、

「あ、あの、東城君……」

控えめな声に呼ばれて振り返ると、そこには天使がいた――違う。ただでさえ可愛らしい顔と華奢な体付きなのに、体操服のせいでいよいよ女子にしか見えないが、

「……橘だよな。悪い」

「えっ……ど、どうして謝るの？」

こちらの反応に困惑しつつやって来る橘に、刃更は「いや……」と頬を掻きながら、
「実行委員で毎日会ってるけど体操服姿は初めてだからさ――一瞬誰だか解らなかった」
「あ、そういえばそうだね。えと、似合う……かな？」
モジモジと手を遊ばせながら橘に上目遣いで尋ねられ、刃更は思わず息を呑んだ。
……え、何ドキドキしてんだ俺……？
変態じゃないよ。だって至近距離で見ると、橘の美少女っぷりって本当にとんでもないんだって。控え目で清楚で可愛らしい、三拍子揃った完璧な大和撫子なんだ。だから、
「ああ、もの凄く可愛……っ、似合ってるぞ橘」
いかん、うっかり精神が肉体を凌駕しかけた。すると橘は嬉しそうに、
「えへへ……ありがと。で、でもね、東城君も凄く格好良いよ？」
「そ、そうか？」
ありがとな。そんな風に女の子に褒められたのは久しぶりだ――女の子じゃないけど。
「しかし……橘ってA組なんだっけ」
体育の授業を刃更のB組と合同で行なうお隣さんだ。
……あれ？　でも……。
これまで刃更は、体育の授業で橘を見かけた事がなかった。別に体育が同じだからとい

って隣のクラスの男子全員の顔を完全に覚える者は少ないだろうが、しかし刃更は別だった。幼い頃――まだ勇者の一族の《里》にいた時に行なった訓練で、一度見た相手の顔は記憶するように叩き込まれている。だから先日、体育祭の実行委員会で声を掛けられたのが、自分と橘との初対面だと認識していた。どういう事かと眉を顰めたこちらに、

「あ、ボクね……生まれつき身体が少し弱くて。それで夏休みの間にちょっと体調崩しちゃって、二学期になってからはずっと体育を休んでいたの。だから」

だから、これまで刃更と会う事はなかった――そう寂しげな笑顔が言っていた。

橘の華奢な身体と、本当に透き通ってしまいそうなほど白すぎる肌を見ながら、

「……そうか」

これまで体育教師が出欠を取る時に、橘の名を呼んでいなかった訳を刃更は理解した。参加できないと解っているのに、わざわざ出欠で名前を呼んだりしたら、その度に他の生徒に「橘はいない」と知らせるようなものだろう。見学をさせなかったのも、或いは回数が重なる事を考えての気遣いだったのかもしれない。

「あ、だけど今はもう大分良くなったんだよ？　だから先生にお願いして、今日から参加させて貰う事にしたの。だって、もうすぐ体育祭だもん。けど、久しぶりの体育だから柔軟体操をするパートナーがいなくて……そうしたら、東城君も一人みたいだったから」

あのね、

「良かったら、ボクと一緒にして欲しいの……だ、駄目かな？」

「っ――――いや、俺も普段組んでる奴がしばらく休みっぽくてさ。助かるよ」

潤んだ瞳の上目遣いで懇願され、刃更は顔を赤くして眼を逸らしながら言った。

……な、何だこれ……？

確かに澪や柚希、万理亜や胡桃など、刃更の周りにいる女子には橘のような控え目で儚げなタイプはいない。はっきり言って新鮮だ。だが、どんなに女の子にしか見えなくても橘は刃更と同じ性別だ。男である。そして自分は断じてそういう趣味はない――だから、このおかしな胸の高鳴りは秋の陽気が良すぎるせいだと信じたい。空曇ってるけど。

「よし、それじゃあやるか――まずは橘からな」

深く考えると禁断のドツボに嵌まりそうなので、刃更は可及的速やかに柔軟体操へと移行した。陸上トラックに腰を下ろした橘の背中を押してやり、前屈を手伝う。すると、

「……」

えっと……柔らかいんですけど。柔軟性じゃなくて、橘君の身体の感触が。

「あの……東城君、もっと強くして良いよ？」

「そ、そうかっ？　じゃあ、これ位か？」

橘と滝川とでは体格が余りにも違いすぎて、力加減が解らない。
――というかですね、ちょっと感触が柔らかすぎやしませんか。筋肉はどこだ筋肉は。
ちゃんと肉を食うんだ橘、好き嫌いは良くないぞ。仕方ないので肩胛骨の辺りを強めに押してやると、橘は前屈の度に「んっ、んっ」と甘く鼻を鳴らすような吐息を漏らす。
いや、本人は一生懸命柔軟体操をやっているだけなのだろうが、
『……』
周囲はそうはいかず、柔軟の空気がどことなくおかしなものになってくる。そうして閉脚から開脚になり、左右と前へと身体を倒すなど一通りのストレッチを終えた橘は、
「じゃあ、次は東城君の番だよ」
そう言って刃更の背後に回った。そしてこちらの背中を押し始めると、
「うわぁ、……東城君って、もしかして何かスポーツとかやってる？」
「いや、特にやってないけど」
「でも、服の上からだとあんまり解らなかったけど……凄く逞しいよ？」
そ、そーすか。橘の指摘に、刃更は「ああ……」と頷いて、
「昔ちょっと鍛えていた時期があってさ。最近またトレーニングも始めたしな」
嘘は言わずに、教えられない詳細だけをぼかして答えた。すると、

「そうなんだ……。――あ、そういえばずっと聞きそびれちゃってたんだけど、東城君はどうして体育祭の実行委員に？　坂崎先生は立候補したって言ってたけど」

「やっぱり、立候補する奴って珍しかったりするのか？」

「ううん、そんな事は……でも先輩の話だと、例年は各クラスとも最低限義務付けられている男女一人ずつの人員しか集まらないんだって。文化祭と違って、体育祭の実行委員って肉体労働っぽい雰囲気があるでしょ？　だからみんな敬遠しちゃうみたい」

まあ、

「今年は、ちょっと例外みたいだけど……」

「――悪いな、俺達が迷惑掛けちまって」

身体を前に倒しながら刃更が謝ると、こちらの背中を押していた橘が慌てたように、

「と、東城君達のせいじゃないよっ。だって、仕方のない事だもん……」

でも、

「凄いよね成瀬さんと野中さん……あ、もしかして東城君も彼女達が参加するから？」

「――まあ、そんなとこかな。ウチのB組、最初は誰もなり手がいなくてさ。それなら俺達でやろうかって話になったんだ」

「そっか……一緒に住んでるんだったよね。じゃあ、東城君達はクラスの皆のために？」

感動したようにこちらを見た橘に、「いや、そんな大層なもんじゃないって」と刃更。
「実はさ……情けない事に俺、転校初日にちょっと失敗しちゃってるんだよ」
「あ……ボクそれ知ってるよ。確か、野中さんと抱き合いながら、成瀬さんと同居してるって宣言したんだよね？」
「待てっ――そんな最低な真似をした覚えはないぞ」
他のクラスにはそういう伝わり方をしているのか。堂上や穂積が絡んで来る訳だ。
「けど、そういう誤解もあってさ……クラスの役に立てば、少しは挽回できるかもって思ったんだ。それに、実行委員になれば他のクラスの奴らとも交流できるしさ」
滝川以外にクラスの中で仲の良い奴を作れないなら、外に眼を向ける事も大事だろう。
「そのお陰で、橘とはこうやって話ができるようになったし……参加して良かったよ」
「それは東城君だけじゃないよ。だって……東城君と仲良くなれてボクも嬉しいもん」
「……そっか。ありがとな橘」
でも頬を赤くするのは止めようか。ドキドキしちゃうからな。
……まあ、他にも理由はあるんだけどな。
あわよくば友達作りという側面があるのは嘘ではない。だが、刃更が体育祭の実行委員へ参加を決めたのには他にも理由があった。一つは、体育祭というイベントをきちんと楽

しむためだ。本来、運動神経や身体能力がものをいう体育祭は、刃更達のような常人離れした者が楽しめるイベントではない。騒ぎにならないよう本気など絶対に出せず、手を抜いて常人のフリをしなければならないのだから。そんな刃更達にとって、体育祭を楽しむ唯一の方法が裏方に回る事だ。これなら戦闘能力を得るために培った身体能力は関係ない。クラスの一員として、普通の高校生として体育祭に参加できる。だからこそ澪や柚希とも相談して、もし許されるならば三人で実行委員になろうと決めたのだ。

……それに。

刃更には、他にもどうしても実行委員になりたかった「ある理由」があった。それはちっぽけな自己満足でしかないのかもしれず、澪や柚希にも言っていないのだが。

「……東城君？」

黙り込んだこちらを、キョトンと見た橘に、

「ああ悪い……まあでも、俺が参加したのはそういう訳なんだ」

意外でも何でもないだろ、と刃更。

「俺としては、橘が生徒会に参加している事の方が意外だよ。庶務とはいえ立派な生徒会の一員だ。どうしたって、今回みたいな前に立つ仕事をやらなくちゃならないのに」

橘の性格で志願したとは考えにくいし、かといって普通に勧誘されても恐縮するだけ

で、とてもじゃないが生徒会に入る事を承諾するようなタイプとは思えない。すると、
「……やっぱり、東城君もボクみたいな奴が生徒会にいるのはおかしいって思う？」
「いや、そんな事は……」
少し声のトーンが低くなった橘に、言葉の選び方を間違えたかと不安になっていると、
「良いよ。ボクだって、自分でもおかしいって思ってるもん」
橘はふふっと微笑して、
「先刻も言ったけど……ボクは身体が弱い事もあって、学校を休んだり登校しても授業に出られずに保健室のベッドで横になっていたりする事が多かったの。そんなだから、当然だけど部活も無理。そうしたらある日、長谷川先生がアドバイスしてくれたんだ……」
「――長谷川先生が？」
突然出てきた名前に、驚きを得た刃更に、
「うん。『お前みたいな奴は生徒会に入れ』って。普通の部活と違って周囲が幾らでもフォローできるし、たとえ雑用でも立派な仕事なんだから、籍を置いて少しでも役に立てば積極的に学生生活を送ったって学校側が判断してやれるからって……そう言って、生徒会に話を通してくれたんだ。そうしたら三年の執行部メンバーの先輩達も、二年の梶浦先輩達も、だったら生徒会へ入ってみるかって言ってくれたんだ」

だから、

「迷ったけど……皆がそう言ってくれるなら、ボクも頑張ってみようって思ったの」

「そうか……」

橘ひとりでは意外でしかなかった生徒会への所属も、長谷川が絡んでいるというなら納得できる。単に怪我や風邪の処置をするだけでなく、生徒の悩みと真摯に向き合い、解決へと至るための道筋を教える――それこそが長谷川千里の真骨頂だ。

……あの人は、橘が保健室以外にも居場所を作れるようにしたんだな……。

自宅に招待された際にかなり過激な事になってしまったため、あれ以来恥ずかしくて保健室には行けずじまいで、改めて食事のお礼は言えていない。しかし体育祭という性質上、養護教諭の助けは絶対に必要になる。実行委員として長谷川に挨拶や協力を仰ぎに行くような機会があった際は同行させて貰い、これまでの助言のお礼をしっかりと伝えよう。

――しかし、その機会は刃更が思っていたよりもずっと早くに訪れた。体育祭が近いという事で授業ではリレーが行なわれ、バトンの受け渡しなどの練習で体育を終えた後。

ゾロゾロと校舎へ戻る中、生徒玄関で刃更と背中合わせに靴を履き替えていた橘が、

「――あ、長谷川先生」

その声に見れば、生徒玄関から上がってすぐのところにある購買から長谷川が出てきた

ところだった。すると長谷川は、刃更達に気付くとこちらへやって来て、

「っ――――」

とっさに刃更は息を呑み、顔を赤くした。お礼を言いに行かなければと思ったばかりなのに、こうして直に顔を合わせたら駄目だった。裸になった長谷川が淫らに乱れた時の姿は、今も刃更の脳裏に鮮明に焼き付いたまま離れないのだ。

思わず赤くした顔を俯かせた刃更をチラッと一瞥した長谷川は、橘の方へ向いて、

「どうやら問題はなさそうだな……久しぶりの体育の授業はどうだった、橘？」

「あ、はいっ……お陰様で問題なく乗り切れました。だから、あの……」

頷きを返してから顔色を窺うように見た橘に、長谷川はふっと穏やかに笑って、

「プール授業の事か？　まあその様子ならば大丈夫だろう。私の方も準備しておく」

その言葉に刃更はふと思い出したように橘を見て、

「それじゃあ、先生が見ている事を条件にプール授業を許可した身体の弱い生徒って」

「うん、ボクの事だよ……――あれ？　何で東城君がその事を知ってるの？」

キョトンとなった橘に、「いやっ、それは……」と刃更は言葉を詰まらせた。流石に保健室で長谷川の水着を強引に脱がしたとは言えない。よって返答に窮していると、

「そんな事よりも――東城、お前に少し話がある」

「えっ……話、ですか？」

いきなり話を振られた刃更が問い返すと、長谷川は「ああ」と頷いて言った。

「私はずっとお前が来るのを待っていたのに――あの日以来、一度も保健室に来てくれないのはどういうつもりだ」

「っ――いや、それは……っ！」

少し拗ねたように言われ、刃更は激しい焦りを得た。近くには橘はおろか、クラスの連中だっているのだ。しかし長谷川はまるで構う事なく、

「おまけに……廊下ですれ違っても、どこか私を避けるようにしていたな。お前にあんな態度を取られて、私がどんな気持ちだったか解るか」

咎めるような口調で言われた言葉は、完全に男と女の会話にしか聞こえないもので、

「あ、あの……っ？」

「す、すまん橘、ちょっと待っててくれっ。先生、ちょっと！」

顔を真っ赤にして刃更と長谷川を見てきた橘にそれだけを言うと、刃更は長谷川の腕を掴んでズンズン廊下を端へと進み、角を曲がって人気のない場所まで来るなり、

「あ、あんな他の奴らが居る所で、一体何を考えているんですか先生っ？」

「……それはこっちの台詞だ」

と、不満げに長谷川。こちらへ詰め寄ると、そのままギュッと抱き付いてきた。大きな胸がいやらしく潰れるほど長谷川の身体が密着し、足を絡められる。

「ちょっ、こんな所で……っ」

「お前が悪いんだぞ。あんなに私の躰を好き勝手にしたのに、何もなかったみたいに振る舞って……これではまるで、あの晩に私とした事を後悔してるみたいだ」

「そ、そんなつもりは……俺はただ、どうすれば良いか解らなくて……っ」

すると長谷川は、「何だ……」と息が届くような至近距離で艶っぽく笑い、

「言っただろう――お前はもっと年上の女に甘える幸せを知るべきだと」

刃更の左手を摑んで自分の豊かな胸へと導くと、さらに唇を重ねてきた。口と手に広がる柔らかい感触に、甘い匂いがふわりと香って、刃更は抵抗する力を奪われる。

長谷川はたっぷりと長いキスをして、そしてようやく口を離すと、

「お前が私に教えてくれたキスだよ」

そう言うと、こちらの首の後ろに両手を回し――さらにキスを続けてきた。いけないと思うのに、長谷川のキスはとろけそうな程に甘くて。いつしか互いの舌が絡み合い、

「ちゅっ……んっ、ふう、ちゅ……んう……っ」

学校の廊下に、二人のいやらしいキスの音が響き始めた――その時だった。

『長谷川先生、至急職員室までお願いします。長谷川先生、至急職員室まで――』

「……無粋な呼び出しだな」

流れた校内放送にどちらからともなく唇を離すと、長谷川は言った。

「東城――どうすれば良いか解ったか？」

「っ……身に染みて」

刃更は呻くように言った。クソっ、やっぱりこの人には敵わない。顔を赤くしたこちらの頬に長谷川はちゅっとキスすると、満足そうに微笑んで職員室へと去って行った。

――そして、橘の下へ戻って二人で向かった男子更衣室は既に無人だった。昼休み前の四時限目だった事もあり、誰もが昼食へと着替えを急いだのだろう。長谷川の爆弾発言があったため、二人きりで着替え始めると自然と空気が気まずいものになった。

背中合わせに着替えている橘の方を、刃更はチラッと振り返る。すると肌の白さや、ローライズのボクサーパンツに収まった尻の曲線は女っぽさで溢れていて、

……クソっ、長谷川先生のせいだ。

あんな所でキスしたりするから、鼓動が収まらなくて思考が獣になっている。いかん、と刃更が前へと向き直って着替えを再開していると、長い沈黙に耐えかねたのか、

「……あ、あの、東城君」

「ど、どうした橘……――っ？」
意を決したように話し掛けられて振り返ると、橘がすぐ眼の前に立っていた。
「ご、ゴメン……こんな事言うの、ボク凄く恥ずかしいんだけど……っ」
「……な、何だ？」
前が開いたYシャツに、女性物のようなボクサーパンツの組み合わせはとてもじゃないが男には見えない。そして、潤んだ仔犬のような瞳でこちらを見上げた橘が、
「……っ、く、口紅の跡、付いちゃってる、よ……？」
「――――っ？」
その指摘に、刃更は慌てて自分の唇を押さえた。ところが橘は顔を赤くして、
「っ――そ、そっちじゃなくてっ……あの、ほっぺたの方だったんだけど……っ」
「……」
「……」
ああ、やっちまった……最悪だ。どうすんだこの空気。すると、
「だ、大丈夫……っ、こう見えてボク、凄く口堅いから。本当だよ、東城君……っ」
地雷を踏み抜いて打ちひしがれたこちらへ、橘がもの凄く気を遣ってくれながら、
「あの……取り敢えずこの事って、成瀬さんと野中さんには内緒の方が良いよね？」

「……そうしてくれるか」

さもないと色んな意味で、色んな事が危険すぎるんだ――詳しい事は言えないけど。

刃更がガックリと肩を落としていると、ふと頬に柔らかな布が触れた。橘がいつの間にか手に持っていたハンカチでこちらの頬を優しく拭いてくれていて、

「動かないで……綺麗にしてあげる」

「っ……た、頼むよ」

眼の前でチラチラ見えそうになっている危険すぎる胸元と、もっと危険なパンツの方はなるべく見ないようにしながら刃更は言った。すると程なくして、

「……うん、もう大丈夫。綺麗になったよ」

「助かった……ありがとうな、橘」

一歩後ろへと下がった橘に、刃更が感謝を告げると、

「う、ううん。こんなの全然平気だよ……だって、友達だもんねっ？」

口紅の跡を拭きながら確認する友情って最悪だよな。ますます刃更が落ち込んでいると、橘は肘を曲げて両腕を縦にすると、左右の拳をギュッと握って、

「っ……と、東城君、ドンマイっ！」

赤い顔を精一杯の笑顔にして、必死にこちらを励ましてくれた。健気に笑ってくれた橘

は、まるで本物の天使みたいで――刃更は思わず一生付いて行きそうになった。だから、

「なあ橘――俺、実行委員の仕事頑張るからさ。絶対に成功させような、体育祭」

友人として橘にできる事をしようと思って言うと、橘は眼をパチクリとさせてから、

「うん……ボクも頑張る。東城君や、他の実行委員の人達が沢山力を貸してくれているんだもん。準備に参加して良かったって、後で誇れるようなものにしなくちゃだよね？」

そう言って、ようやく自然な笑みを浮かべてくれた。そして、

「梶浦先輩みたいに沢山仕事ができるわけじゃないし、まだまだ半人前の庶務だけど」

それでも、とその優しい瞳に精一杯の決意を込めて橘七緒は言った。

「生徒会の一員として、体育祭実行委員の一員として――ボクにできる全力を尽くすね」

4

人数過多という不安材料と、イレギュラーな形での三年生の参加という爆弾。

その両方を抱えながら本格的な始動を迎えた体育祭実行委員会ではあったものの、どうにか大きな混乱は起きずに準備作業は進んでいっていた。

その功績の大半は、実行委員長にして副会長の梶浦立華のリーダーシップによるものだ。

例年の二倍の人員をしっかりとコントロール。各部門の指揮と調整を行ない、巨大な実行委員会を一つの組織として統括していた。また扱いづらい三年生らについても、堂上の部門には澪を、穂積の部門には柚希をそれぞれストッパーとして配置し、両部門長に生徒会メンバーを据えるという作戦が嵌まったのか、どうにか彼らの制御に成功していた。

刃更もそんな梶浦や橘ら生徒会メンバーの補佐として各部門のパイプ役や、教員や各クラブとの交渉や確認を手伝うなど、放課後は忙しい日々を送っている。

「――それじゃあ、引き続きよろしくお願いします」

ある日の放課後、新聞部に書類を届けて廊下へ出た刃更は、偶然クラスメイトの男子と鉢合わせた。放送部に所属している島田太一だ。

「あれ東城、お前も新聞部に用だったのか？」

「ああ、体育祭実行委員の仕事でちょっとな……島田は？」

「俺は放送部の先輩に頼まれて、新聞部が持ってる資料を借りに来た。ホラ、ウチの部は体育祭の本番じゃ実況を担当するだろ？　競技を盛り上げるために、新聞部がこれまでに取材して持ってるネタの中で使えそうなものがあれば提供して貰いに来たって訳」

放送機材の設営についてなど、体育祭実行委員の仕事で放送部とは打ち合わせをする機会が多く、島田とは教室以外でも顔を合わせている内に打ち解けていった。

橘と同じく、実行委員会がきっかけで距離が縮まった一人だ。
「まあ、俺ら放送部にとっては文化祭より体育祭の方がイベントとしては重要だからな。文化部の俺らには貴重な実戦なんだが、ウチは部員が少ないからさ……実況担当の割り振りとか大変だよ。俺ら一年も幾つか担当する競技があるし、マジで総力戦って感じ」
まあ、だからこそ燃えるんだけどな……と島田は苦笑して、
「その点そっちは良いよな。今年はスゲー人数が集まったし、作業も順調っぽいじゃん」
「……まあな」
実行委員の人数が多い事に加え、委員長の梶浦が真面目かつ几帳面な性格という事もあり、作業は例年よりも入念かつ緻密なスケジュールに基づいて進められている。
無駄を排したその進行は、各人の作業量の軽減というメリットも生んでおり、消極的な動機で実行委員に参加している者達にも概ね好評だった。だがその反面、そうした梶浦の進め方を面白くないと思っている者達もいる——堂上を始めとする澪派の連中だ。
穂積のように、柚希の役に立ちたくて参加した柚希派の男子達は記録会計部門に配置された事に不満を抱いている者は少ないが、澪がいる「実行委員会という名の舞台」を通して自分達が楽しみたくて集まった堂上達の中には、総務補助という地味な仕事に不満を抱いている者はかなりいた。さらには梶浦が全体を厳しく取り締まっているため、色々と派

手な事をやれると思っていた堂上達としては余計につまらないらしい。梶浦も堂上達の不満に気が付いてはいるのだが、かといってクラスも学年もバラバラなのに自分達を全員澪と同じ組に入れろとか、学年の垣根を越えた男女混合の種目を作れとか、堂上達の好き勝手な要望を実現していたら体育祭が滅茶苦茶になってしまう。

「何もないと良いんだけどな……」

島田と別れた刃更は、廊下を歩きながら呟いた。澪の前でこそ陽気に振る舞っているが、堂上達は明らかにフラストレーションを溜めている。

体育祭実行委員会が抱えている爆弾の傍で、火種はずっと燻り続けているのだ。

5

しかし日が進むにつれて、徐々に実行委員会には歪みが生じ始めた。

クラス対抗で行なう女子の応援合戦――そのダンスの打ち合わせや練習の方へ澪や柚希が参加するため実行委員会に遅れる事が増え、休む日も徐々に出てきてしまったからだ。

すると、途端に澪派と柚希派のメンバーに委員会をサボる者が出始めた。

だが柚希派の連中はまだ良い。柚希がいないと解るとすぐに帰ってしまうものの、仕事

ができる彼らは少なくとも自分達の作業だけはスケジュール通りに終わらせていた。
――問題なのは、堂上達のいる総務補助部門だ。普段から一緒につるんで行動する事が多い彼らは、視聴覚室をたまり場にし、ロクに仕事もせずに騒ぐだけになった。
そこまでならまだ良かった。作業に遅れが出始めたものの、梶浦はよその部門から人員を調整し、刃更や橘達生徒会メンバーをフォローとして加える別の作業プランへ移行。作業分担とスケジュールを練り直し、何とか間に合う目処を立たせていた。
だが、本番を一週間後に控えたある日。
「――一体どういう事ですか、これはっ!?」
体育祭実行委員会の本部となっている放課後の視聴覚室に、梶浦立華の声が響いた。
一枚の用紙を机に叩き付けながら梶浦が睨んだのは、この日も澪が不在のため仕事をせずに仲間と騒いでいた澪派のリーダーの堂上だ。部屋中の注目を一斉に集める中、
「せ、先輩……」
後ろに付いてきた橘が心配そうな声を上げる。現在、監督教諭の坂崎が職員会議で不在なのに、三年の堂上と相対する事が不安なのだろう。すると、
「あァ？　いきなり何キレてんだよ副会長」
対する堂上は、仲間達と遊んでいた携帯電話の液晶から顔を上げて言った。

「この請求書は、一体どういう事なのかって訊いているんです！」

梶浦が見せたのは、会計部門が把握していない買い物について記された用紙。

今日になって、いきなり郵送で届いた請求書だ。

「先方に電話で問い合わせてみました。これ、堂上先輩が買われたものだそうですね」

請求書の送り元は、ある花火商店――有名な花火大会にも卸している老舗の専門店からのものだった。本来、準備に使用する資材については、予め必要な金額を会計部門に伝えてお金を貰い、買い物を済ませると領収書とお釣りを渡す事になっている。余程の緊急を要する場合でもない限り、無断での勝手な買い物など一円たりとも許されていない。

よって会計部門を通さなかった時点で重大な規則違反を犯しているのだが、

「二十万だなんて……一体何を考えて、こんな馬鹿げた金額の買い物をっ」

激しい怒りに梶浦が声を震わせると、堂上はヘラヘラと笑いながら、

「ああ俺もビックリしたわ。花火ってこんな高いんだな。でも、毎年後夜祭じゃバンバン何発も打ち上げてんだ。俺達が一発くらい追加しても、別に問題ねーだろ」

「馬鹿言わないで下さいっ！　後夜祭の花火は、昔からウチの学校と付き合いのある業者に頼んで、毎年夏のシーズンが終わってから、余った在庫を安く譲って貰ってるんです！」

「はあ？　知らねえよそんなの……そういう大事な事は先に言っとけよ」

「っ……話にならないっ。とにかく、こんなものすぐにキャンセルして下さい！」
「いや無理だから。店の爺さん、キャンセルできねえって言ってたし」
「なっ――どうしてですか？」
「文字仕掛けを入れると完全なオーダーメイドになるんだと。でも漢字の『澪』だと複雑すぎるから『ＭＩＯ』にしてくれとか、有名な老舗って割に意外と大した事なくね？　マジでたま屋とか言われて調子こいてる暇あったら、もうちょい進歩しろっつーの」
眼の前でゲラゲラと笑われ、梶浦はカッとなって叫んだ。
「ふざけないでっ！　キャンセルできないなら先輩に責任持って払って貰います！」
「はあ？　何だその理屈……全然意味解んねーんだけど？」
そう言って堂上は立ち上がった。思わず身を竦ませたこちらを据わった瞳で見据えて、
「こういう時に責任取るのが実行委員長だろ。こっちは面白くしようと善意でやっただけなのに、何速攻で責任放棄してんだよ。俺らはテメーの考えたクソつまんねー体育祭の準備を手伝うのに毎日残ってやってんだ。逆ギレしてねえで仕事しろよ。大体、俺ら三年の最後の体育祭なのに、あれも駄目これも駄目って俺らが何言っても反対しやがって……二年のクセに横暴すぎんだろ。生徒会だからって、学校行事を私物化してんじゃねえよ」
堂上が放った言葉に、梶浦は絶句した。一瞬何を言われたか解らなかったからだ。

……私物化……？

その言葉の意味を理解した梶浦は、呆然とその場に立ち尽くした。

副会長として、実行委員長として、体育祭を成功させたい――その一心で自分は頑張って来たつもりだ。堂上の言葉は、そんな梶浦の努力や想いを根底から否定するものだった。

とっさに反論しようとした。だが言葉が出なかった。何かを言おうとしたら、声の代わりに嗚咽が漏れてしまいそうだった。そんな梶浦の代わりに、

「――今言った事、取り消して貰えますか先輩」

ふと静かな声が堂上へと放たれて――その声の主が堂上の前に立った。

東城刃更は、己の下していた判断を後悔した。

滞や柚希が絡まれたりして困っている時以外は、堂上や穂積らにはなるべく近付かないようにと梶浦からは言われている。下手にトラブルが起きるのを避けるためだ。

そしてこの件は責任者である委員長が注意すべき事柄だし、何より梶浦自身が三年の堂上相手に頑張っていた。だから黙って状況を見守っていたのだが、

……読み違えたかな。

こんな事なら、以前校舎裏で囲まれた時に鼻をへし折っておくべきだった。あそこで、二度と澪に付きまとおうなどと考えられないようにしておけば、堂上が体育祭実行委員になる事も、梶浦を酷く侮辱した今の言葉を許す事もなかっただろう。

……それに。

ここまで馬鹿な真似をされると、流石に軽く正気を疑うレベルだ。だとしたら、これも先日の襲撃と何か関係があるのだろうか。犯人は人の意識を操る力を持っており、聖ヶ坂学園の関係者の可能性が高い。あれ以降こちらに視線の気配を送ってくるだけだったが、堂上を操って何らかの挑発なり罠なりを仕掛けてきているのかもしれない。

――無論、堂上自身が犯人の可能性もある。以前に長谷川が言っていた事があるが、人間の――特に男の嫉妬は厄介な面を持っているのだ。彼がご執心の澪は刃更と共に暮らしているのだし、嫉妬を憎しみに変えてこちらを狙ってくる事は充分にあり得るだろう。

いずれにせよ、見過ごせない悪意が存在する事だけは間違いない――だから、

「おい……いきなり出しゃばって何つった？」

剣呑な色を浮かべて凄んでくる堂上の瞳を、刃更は真っ向から受け止めて、

「聞こえませんでしたか――梶浦先輩に言った事を取り消せつったんですよ」

その言葉に梶浦と橘が息を呑み、途端に視聴覚室の空気が一気に緊迫する。周囲にいる

澪派の取り巻き達も呆気に取られる中、その場に大きな笑い声が生じた――堂上だ。

「はっ、ははっ、ははははははッ！　ああ、そういう事か――」

と、いきなり堂上が机越しに右の拳を放ってきた。ケンカ慣れしているのだろう。不意を突くタイミングでの先制攻撃を、刃更の顔面目がけて繰り出してくる。だが、

「っ――――？」

刃更の左手にあっさりとその拳を受け止められると、堂上の表情が驚愕に固まって。スッと眼を細めた刃更は、無言で堂上の拳を握っている手に力を込めた。

「ぐっ、がああぁっ、て、テメ……っ!?」

途端に堂上が顔色を変えて苦悶の声を漏らすが、刃更は力を緩めない。すると、

「このっ……！」「調子乗んな東城っ！」

左右から澪派の二人が殴り掛かってくる。刃更は上体を僅かに反らせて右から来た相手の拳を避け、その足を払った――すると男子は刃更を飛び越える軌道で宙を一回転し、

「――がっ!?」「ひぃいっ!?」

左から来ていた男子の肩に踵落としで着地し、もつれ合うようにして床へ転がった。

見ていた周囲が一体何が起きたのか理解できずにいる中、東城刃更は堂上に向けた冷たい瞳を外さなかった。低く、それでもはっきりとした声で告げる。

「――取り消せ」
「ぐっ……こ、の……っ、」
拳を握り締められて顔を真っ赤にした堂上は、それでも悪態を吐こうとした。
そこへ、職員会議が終わったのか視聴覚室の扉を開けて坂崎が中へ入ってきて、
「ん――何やってんだお前ら？」
「……いえ、別に」
そう言って、刃更は堂上から視線を逸らさないままゆっくりと手を離した。
「――っ！」
堂上は右手を押さえながら刃更を憎しみの篭もった瞳で見ていたが、坂崎の目があるためそれ以上は何もせず、やがて澪派の面々を連れてゾロゾロと視聴覚室を出て行った。
それを見送った坂崎はやれやれと嘆息すると、いつもの爽やかな笑みを浮かべて、
「ホラお前ら、自分の仕事に戻れ。本番まであと一週間だ。遊んでる時間はないぞ」
その言葉に事態を見守っていた周囲は、誰からともなく自分の仕事の作業へと戻っていった。そして坂崎は何があったか知っているのだろう。こちらへ視線を向けると、
「あー……東城、ちょっと良いか？」
苦笑を浮かべながら、そう刃更へと呼び掛けてきた。

視聴覚室を出た後、刃更は坂崎に連れられ屋上へと足を踏み入れていた。

「もうすっかり秋だなぁ……」

落下防止用の鉄柵に背もたれ、肩越しに遠くの景色を見ながら坂崎が言った。学校の傍にある公園では、木々の紅葉が優しい夕陽の光を浴びて茜色を濃くしている。視線を少し下へ向ければ、敷地内の各所で様々な運動部が活動し、汗を流しているのが見えた。

――視聴覚室を出る時、刃更がその場の空気を悪くしてしまった事を梶浦に謝ると、彼女は「良いのよ……」と言ってくれた。だが、堂上に言われた事が余程ショックだったのだろう。その表情はひどく悲しげで、瞳の端にはうっすらと涙が浮かんでいた。

屋上へ来てからずっと俯き無言でいる刃更に、坂崎はふっと苦笑すると、

「俺は別に、お前を叱るためにここへ連れてきた訳じゃない。ただ、普段と違って冷静さを欠いていたように見えたから、その理由を聞かせて欲しいと思ったんだ。お前、堂上達と問題を起こして――アイツらを道連れに実行委員を辞めるつもりだっただろう？」

否定をしない無言を返すと、坂崎は嘆息して、

「前に中庭で堂上や穂積達に囲まれた時と違って、今回ああも熱くなったのは何故だ？」

「すみません……先輩達が俺の事をよく思っていない事は解っていたんですが」

と、刃更は眼を伏せながら言った。

「でもそういう感情の矛先が、俺じゃなくて他の人や委員会の作業へずっと向いてしまっていて……先刻の梶浦先輩への暴言に繋がったと思ったら、我慢できなかったんです」

「かといって、ああいうやり方に出てしまうのは良くないな」

「あのままだと、堂上先輩達の勝手な振る舞いが止まらないと思ったので……」

そうだ。かつて長谷川が教えてくれた。その言葉を思い出しながら、

「物事には限度が……譲れない一線があるじゃないですか。体育祭の本番も近付いて、これからは追い込みの時期なのに、あんな勝手な真似を許していたら全体が足を引っ張られる。それでも先生は、あのまま黙って先輩達の好きにさせておけって言うんですか？」

すると坂崎は首を横に振ってから、

「そうは言っていない。だが真っ正面からぶつかるだけが、必ずしも状況を解決させる訳じゃない。梶浦を助けるために矢面に立ったお前の周囲を想いやる気持ちは尊いし、一概に間違っているとは言えないが――それでも、この場合は最も正しい選択とは言えない」

そうだろう。

「あのまま本格的なケンカになっていたら、お前を含めて何人か停学者が出た。もしひど

い怪我人まで出ていたら、それこそ体育祭の開催にも影響を及ぼしていたかもしれない」

「それは……」

そうならないよう計算して足を払ったと言っても信じては貰えないだろう。だから、

「……だったら、一体どうすれば良かったんですか？」

「前にも言っただろう……こういう時は、俺達教師を頼ってくれ」

刃更が問い掛けると、穏やかな表情で坂崎が言った。

「アイツらを入れる事にしたのは俺達教員の判断だ。学校は個人の育成と同時に、集団行動の大切さも教える場所だからな。だから今回、堂上が勝手に花火を発注した事だって、俺達教師側の監督不行き届きであって、お前や梶浦達が責任を負ったり感じたりする必要はないんだよ。自分達で解決しようと努める事は悪くはないが、無理な事は教師を頼ってくれ……俺達は、お前らを助けてやるために居るんだから」

坂崎の言葉に、刃更は黙り込んだ。確かに自分は、どこか冷静さを欠いてしまっていたかもしれない。先日の駅での襲撃の件――狙いが刃更の可能性が高いという事は、刃更のせいでまた周囲が巻き込まれる危険性があるという事だ。それなのに、

……未だに犯人を特定できていない。

これで本当に学校にいる時や、それこそ体育祭のような近隣の人達まで観覧にきている

場で襲われでもしたら、一体どれだけの被害が出てしまうか解らない。
最悪の事態を考え、胸が締め付けられるような焦燥を得ていると、
「――少し気になっていたが、東城も『彼女』に影響されてしまっているのかもな」
ふと坂崎が呟くように言ったのを刃更は聞いた。
「彼女って……何の事です先生？」
思考を眼の前に戻した刃更が訊ねると、坂崎は一呼吸を置いてから静かな声で言った。
「よく保健室へ行っているようだが、東城……あの女に、長谷川千里に気を付けろ」
「え……長谷川先生に気を付けろって、何でそんな……？」
不意に出た名前に刃更が戸惑いながら問うと、
「養護教諭という立場上、彼女は生徒からの悩み相談をよく受けている。落ち着いた雰囲気にあの美貌だ。彼女の言葉に影響を受けてしまう者は少なくない……ひょっとして東城も彼女に何か相談をしたり、アドバイスを貰ったりした事があるんじゃないか？」
「ええ、まあ……」
こちらの頷きに、坂崎は「……やっぱりか」と嘆息して、

「彼女の助言は、影響力が強すぎる……あれはもう悩み相談やカウンセリングというよりも、催眠やマインドコントロールと言っても構わないレベルのものだ」

「そんな大袈裟な……」

と呆れたように言った刃更に、坂崎は即座に否定の言葉を口にした。

「いいや、大袈裟じゃない。彼女に悩み相談をした生徒の中には、別人みたいに性格が変わってしまい、不安になった保護者から問い合わせが来た者もいる位なんだからな」

「それは……悩みが解消されて心のつかえが取れれば、明るくなったり自信が持てて前向きになったりする事だってたまにはあるでしょう」

ほんの少し苛立ちを含ませながら刃更は反論の言葉を返す。

――これまで刃更は何度となく長谷川の助言に心を軽くして貰ってきた。彼女の言葉があったからこそ澪や柚希を守る事ができたし、刃更自身も厳しい戦いを潜り抜けられた事がある。長谷川の事を悪く言われるのは、はっきり言って不快だった。しかし、

「前向きになった程度で、親が心配になって学校に連絡してくる訳がないだろう。問い合わせが来る生徒に共通する変化としては、極度の自信過剰や自己正当化がある。何でも自分一人でやろうとしたり、親や家族の言葉に全く耳を貸さないようになったり――」

そして、

「――周囲に構わず、特定の人や物に過剰に執着し始めたり、な」
「執着って……それってまさか」
「そうだ――お前がこの学校に来る前の事だが、堂上や穂積は以前長谷川先生に相談し、彼女の助言を受けていた事がある。彼らが成瀬や野中を『姫』と呼ぶようになったり、今時ファンクラブみたいなやり過ぎなものを組織するようになったのはその後の事だ」
「そんな事が……」
刃更が思わず呆然の声を漏らすと、
「なあ東城……お前は彼女から受けた助言に対して、今まで最終的に反発を覚えたり納得がいかなかった事はあるか？　俺の予想が正しければ、恐らくない筈だが」
坂崎の問い掛けに、刃更は無言を返した。それは肯定の沈黙だ。
確かにこれまで長谷川に相談して彼女から貰ったアドバイスについては、刃更は必ずと言って良いほど受け入れ、実践してきている。すると坂崎は硬い声で、
「これまでお前は、当たり前のように彼女の言う事に従っていただろう……だが、それは本来おかしいんだ。たとえどれだけ人気があろうと、生徒と接する中で口うるさいと思われてしまう事があるのは教師の宿命だ。何せ、これだけの数の生徒が居るんだからな。どうしたって性格的な相性の問題が生じる以上、万人に好かれるのは不可能だ」

と坂崎。

「だが長谷川先生だけは、周囲から全く悪い評価や噂を聞かない。無論、誰からも慕われるような人柄の持ち主はいる。だが信じられないような美人でスタイルも抜群……そんな日立つ存在は、熱狂的なファンがいる反面、強い反感も買ってしまうものだろう？」

それはそうだ。あの澪や柚希にしても、男子だけでなく女子からも慕われてはいるものの、全校生徒から慕われているという訳ではない。神という絶対の存在ですら、それぞれ異なる存在を崇める宗教があるというのに、人間が万人から好かれる事など不可能だ。

「年上の女性という事もあるし、本来お前達には魅力的に映る存在だろう。しかし、その手の強い感情を生徒から寄せられる事は教師にとってはトラブルの種になるものなんだが、長谷川先生にはそれもないんだ。皆が彼女を凄まじい美人だと認め、悩み相談に乗ってくれる優しい存在だと認識しながらも、誰も彼女に対して強い感情を抱こうとしない」

そして、と坂崎は言った。

「何より問題なのはな、東城……その事を誰もおかしいと思わない事だ。まるで、彼女にとって不都合な存在が出て来る事を決して許さない魔法でもあるみたいに」

刃更は思わず息を詰めた。長谷川にとって不都合な存在を許さない——もしそんな事が起きていたのなら、彼女の部屋で教師と生徒の一線を越え、その事実が公になれば彼女

の教師としての立場を失わせるであろう刃更は最も排除されて然るべき存在だろう。
そして――刃更が襲撃を受けたのはあの日、長谷川の部屋を出た直後の事だ。
「……っ」
完全に顔を青ざめさせたこちらに、坂崎は苦笑しながら頬を掻いて、
「っと、すまない……脅かすつもりはなかったのに、すっかり話が脱線してしまった」
「……いえ、先刻は心配をお掛けするような真似をしてすみませんでした」
刃更はどうにか低い声を絞り出しながら、頭を下げた。すると、
「別に良いさ――ただな東城、お前は俺のクラスの生徒だ。だから担任として守ってやりたいし、おかしな事には巻き込まれないようにしてやりたい。それだけは解ってくれ」
無言で頷きを返した刃更の肩に、ポンと手を置いて、
「堂上達の件は一旦こっちに任せてくれ――絶対に悪いようにはしないから」
そう言って、坂崎はいつもの爽やかな顔で笑った。

6

梶浦立華や東城刃更と揉めて、澪派の仲間達と共に視聴覚室を出た後。

堂上翔平の姿は、駅前のゲームセンターにあった。親しい二人と共に慣れ親しんだコーナーに陣取り、やり込んだスロットゲームをプレイするのだが、

「……クソっ」

何度やっても図柄は不揃いにしかならず、液晶画面にクレジットがなくなったと表示されると、堂上は苛立たしげに筐体の下を蹴った。

――いつもならば楽しい筈の時間。しかし、今の堂上は苛立ちを募らせている。つい先刻、東城刃更によって味わわされた耐え難い屈辱が原因だ。

ギュッと右の拳を握ると、力を入れた手がズキッと痛んだ。見れば刃更に握られた場所が、はっきりと手形状に赤くなっている。信じられないような握力だった。

おまけに――刃更は堂上だけでなく、同時に殴り掛かった他の二人もあっさりとあしらって見せた。あの時の刃更に気圧されたのか、それとも堂上がやった無茶に腰が引けたのか。仲間の一年と二年の後輩達は一緒に視聴覚室こそ出たものの、このゲームセンターに移動する途中で次々に用事ができたなどと何かしら理由を付けて帰ってしまった。

……全部あの野郎のせいだ。

澪と同居している事だけでも許し難いというのに、あの生意気な態度――一発殴って思い知らせてやるつもりだったのに、逆にこちらの求心力に影響が出る羽目になるとは。

ギリッと奥歯を噛み締めると、隣に座っている同じクラスの仲間が、
「気にすんなよ堂上。先刻の東城のあれ……アイツ絶対に格闘技か何かやってるって」
「……はァ？　別に気にしてねえし」
ただ、と堂上は言った。憎悪を込めた眼差しで筐体の液晶画面を見詰める。
「東城も梶浦も、俺を舐めやがった奴は許さねえ――後悔させてやる、絶対にな」
「後悔させるって……どうするつもりだよ？」
もう一人の仲間に訊ねられ、堂上はハッと笑った。
「ぶっ壊してやんだよ――アイツらが大事に準備してる、あのクソみたいな体育祭をよ」
やり方はどうとでもなる。設営を終えた機材を夜中に壊したり、勝手に必要ないものを大量に注文して予算を滅茶苦茶にしてやったり。それこそ匿名の脅迫状の一つでも学校へ送り付ければ、中止に追い込む事など造作もない。堂上が策略を巡らせていると、
「――あ、あのっ、堂上先輩……」
横からふと、声を掛けてきた女子がいた。いや、女子ではない。そこに立っていたのは堂上と同じ制服を着た少年だった。副会長の梶浦と共に実行委員会を取り仕切っている、生徒会の庶務。橘とかいう名の気弱な一年生だ。明らかにこちらへ怯えている橘に、
「マジ紛らわしい声しやがって――何しに来たんだよ」

「ボクは、あの……っ、先輩達に戻って欲しくて……それで……」
「ハッ……何だよそりゃ。まさか、戻って謝れってのか？」
堂上が椅子から立ち上がると、橘がビクっと身を竦ませた。体育祭を潰そうとしている話を聞かれたかもしれないから、その口封じのつもりだった。女子と見紛うくらい華奢な体付きに、女々しい性格の橘の事だ。ここで脅しておけば大丈夫だろう。
だから堂上は乱暴に橘の胸倉を摑むと強引に壁へ押し付けた。すると、その拍子に橘の顔から眼鏡が落ちて——そして堂上は見た。橘の瞳が鮮やかな紅色に輝いているのを。
「な、何だその眼……？」
得体の知れない何かを感じ、ゴクリと喉を鳴らした堂上に、
「……ご免なさい」
橘七緒は静かに言うと——鮮血よりも赤い眼でこちらの瞳を覗き込んできた。

7

屋上から視聴覚室へ戻ると、静まり返った室内では淡々と作業が行なわれていた。
堂上のトラブルだけでなく、刃更が彼と衝突した事も尾を引いているのだろう。

こちらの姿を見ると、室内の空気が僅かに緊張したのを刃更は感じた。だから無言で自分の席の方へ向かうと、同じ長机で作業していた梶浦の前へと行き、

「すみませんでした梶浦先輩……」

しばらく席を外していた事と、改めて先程の堂上とのトラブルについて謝った。すると、

「言ったでしょ……東城君は悪くない。貴方が謝る必要はないわ」

顔を上げた梶浦が微笑しながら言った。どうやら彼女も時間が経って落ち着いたらしい。

「それより東城君、戻ってくる時に橘を見なかった？」

「いえ、見ませんでしたけど……居ないんですか？」

「ええ……どこに行ったのかしらあの子」

梶浦は小さく嘆息すると書類の確認作業へ戻った。刃更もそれに倣って席に戻り、途中になっていた自分の作業を再開し——そして一時間が経過した頃、この日の実行委員会は終了となった。片付けを終えた刃更は、空いたままになっている橘の席を見ながら、

「結局戻りませんでしたねアイツ……捜しますか？」

「いいわ、私の方で後で携帯に連絡してみるから。お疲れ様——また明日ね」

「はい。お疲れ様でした」

梶浦に頭を下げると、刃更は澪と柚希を迎えに一年B組の教室へと戻った。すると、クラスには二人以外にも数人の女子が残っていた。創作ダンスの打ち合わせで、色々と相談する事があったのだろう。榊や相川の姿もあり、笑顔で何事かを話している。そして、

「刃更……委員会はもう終わった？」

「ああ、今日のところは何とかな」

こちらに気が付き声を掛けてきた柚希に、刃更が教室の入り口のところで頷きを返すと、

「それじゃあ、あたし達はそろそろ帰るわね」

そう言って澪が柚希を伴って席を立った。

「あいよ、バイバイ～」

「またね二人とも。東城君も」

相川と榊に見送られ、刃更は澪と柚希と共に廊下を歩き出す。

「何か盛り上がってたな……」

「まあね。今日は創作ダンスの衣装をどうするか話し合ったんだけど、相川さんのお姉さんのツテで、かなり安い値段で良い衣装が借りられそうなの」

楽しみにしててね、と澪が笑った。

「男子にはまだ内緒だけど――上手く行けばあたし達の優勝間違いなしだから」

「刃更もきっと気に入る筈」

「そうか……それじゃあ本番を楽しみにしてるよ」

自信満々な二人に釣られて刃更も笑みを返した。すると玄関まであと少しという所で、

「刃更、委員会の方はどうだった？」

「また堂上先輩達はサボってたでしょ……ご免ね、明日はあたし達もそっちに出るから」

柚希と澪が実行委員会について尋ねてきた。僅かに表情を硬くした刃更に、

「……刃更？」

柚希がどうかしたのかとこちらを覗き込んでくる。だから、

「……実は」

刃更は、委員会であった事を二人に話そうとした——その時だった。

「——何だお前達、まだ残っていたのか」

廊下の向こうからした声が、刃更に言葉を失わせた。視線を向けると、そこにあったのは暗くなり始めた校内に浮かび上がるようにして、より存在感を増した美しすぎる白。

長谷川千里が、こちらへ向かって歩いてくる。

「そういえば、お前達は三人とも体育祭の実行委員だったか……追い込みの時期で忙しいのは解るが、あまり遅くまで残るのは感心しないな」

「はーい」「……すみません」
澪と柚希がそれぞれ返事をしたのに対し、
「……」
刃更だけが、ただ黙って長谷川を見ていた。そんな刃更の様子に気が付いたのか、
「？　どうかしたか東城……顔色が少し優れないようだが」
少し心配そうにして、スッとこちらに手を伸ばしてくる。しかし、
「いえ、そんな事は――大丈夫です」
刃更はやんわりと告げると、その手をごく自然な動作で避けた。
「……そうか。ならば良いが」
行き場をなくした手を戻しながら、しかし長谷川はさして気にした様子もなく言った。
「しかしお前はちょっと真面目すぎる部分があるからな……気を抜けとは言わないが、あまり根を詰めると、いざ本番が来た時に保たないぞ」
その忠告に、
「……そうですね、肝に銘じておきます」
刃更は静かに頷きを返した。心の底から。
「何かあったら、いつでも保健室に来てくれ……待っているよ」

そう言うと、白衣の裾を翻して長谷川は廊下の向こうへと去っていった。

8

成瀬澪が、刃更や柚希と共に家へと帰ったのは夜の八時を過ぎた頃だった。

「ただいま～」

玄関の扉を開けながら帰宅を報せる言葉を口にすると、勢い良くリビングの扉が開いた。

てっきり万理亜が迎えに出てきたのかと思ったが、しかし違った。

飛び出すようにして廊下へ出てきたのは、

「胡桃ちゃん……？」

顔を真っ赤にしている胡桃を見て、澪が何事かと思いながら呼び掛けると、

「――――っ!?」

澪達に気が付いた胡桃は、さらに顔を真っ赤にした。

「……ど、どうかしたの？」

「っ――な、何でもないから……放っといてっ」

叫ぶように言うと、胡桃は慌てて階段を駆け上っていった。

「……大丈夫。私が行ってくる」

そう言って、靴を脱いだ柚希が胡桃の後を追って階段を上っていった。

どうしたのだろう――刃更と柚希にされた翌日こそ、胡桃は恥ずかしさのあまりか部屋に閉じ篭もっていたが、それでも二人の呼び掛けで夜には出てきてくれたし、最近は元のように振る舞えるようになっていた。監視対象である先代魔王の娘や、そのお付きのサキュバスという事で、澪や万理亜に対してはまだ一線を引いているところはあるが、それでも同じ屋根の下で顔を合わせる事も多いため、普通に話してくれてもいる。それなのに、これではまるであの日に逆戻りしてしまったみたいではないか。すると、

「――おやおや皆さん、お帰りなさい」

リビングから出てきた万理亜を見て、澪はスッと眼を細めた。口元が半笑いなのだ。

「万理亜……アンタ、あたし達がいない間に胡桃ちゃんに何かしたでしょ？」

「別におかしな事は何も……まあお風呂に誘って、一緒に入ったりはしましたが」

「一緒にって……よく入ってくれたわね」

すると万理亜はニッコリと笑って、

「はい。澪さま達が学校に行っている間に、胡桃さんとは色々と仲良くしてるんです」

「……変な脅迫とかしてないでしょうね？」

「まさか……ちゃんと合意の上ですよ。胡桃さんは、意外と素直で可愛いんですから」

ふふっと万理亜。

「――今だって、仲良く一緒にビデオを見ていたんです」

「ビデオ……って、まさかっ!?」

嫌な予感にハッとなって、万理亜を押しのけてリビングの入り口に立った澪は、

「……やっぱり」

テレビに映し出されていたものを見て、嘆息しながら肩を落とした。

巨大な液晶画面には、刃更と柚希によって信じられないような快楽を刻まれ、初めて得てしまった女の悦びに激しく乱れる胡桃の映像が流れていた。雌犬状態を胡桃に目撃されてリビングから二階の自室へ逃げた澪は、階下から聞こえてくる二人の嬌声には気付いていたし、翌朝には何があったか聞いていたが……まさかこんな凄い事になっていたとは。すると後からリビングに入って来た万理亜が信じられないとばかりに、

「全く、胡桃さんはどうかしてます。今どき姉妹愛でこんなに感動できる映像はそうそうないですよ。ああもう、私なんか感涙を禁じ得ないというのにっ」

「こっちは同情を禁じ得ないわ……」

と怒る気力をなくして澪。可哀相に――一番先に主従契約を結んでいる澪でも、未だに

刃更との関係を深く考えると、恥ずかしくておかしくなりそうになる事がある。胡桃はまだあの晩の一回だけだが、それでも彼女の心と躰に刻まれた快楽は鮮烈だっただろう。

「下手すると、またしばらく部屋から出てきてくれそうにないわね……」

やれやれと呟くと、ふと万理亜が気付いたように、

「――おや、刃更さんは？」

言われた澪が振り返ると――いつの間にか刃更の姿が玄関から消えていた。

自室へ戻った刃更は、鞄を机に置くと仰向けに倒れるようにベッドへと寝転がった。

そして天井を見上げながら、これまでに判明した情報と現状との繋がりを考える。

襲撃犯の狙いが刃更であり、そして犯人は聖ヶ坂学園関係者という所までは絞り込めていた。だとしたら襲撃が何らかの警告だったにせよ、他にも意味が込められていたにせよ、何らかの原因と実行に移す切っ掛けがあった筈である。

……まず。

最初に考えられるのが、襲撃の原因と実行の切っ掛けが同時だった可能性だ。

刃更が駅で襲撃を受けたあの日にあった、普段と異なる出来事は二つ。

体育祭の実行委員会への初参加。そして長谷川千里宅への訪問だ。

現状――最も可能性が高いのは、体育祭の実行委員会絡みだと刃更は考えていた。

あの襲撃が、実行委員会から手を引けという警告だったという可能性だ。

――委員会から刃更を排除したい勢力は二つある。

一つは体育祭を成功させたい勢力――即ち、人員過多に陥ってトラブルが起こっている実行委員会の現状を好ましく思っていない者達だ。その筆頭が、刃更達に実行委員の辞退を勧めてきた梶浦ら生徒会メンバーだろう。考えたくはないが、彼らの立場を考えると刃更達を疎ましく思っても不思議ではない。だが彼女達以外にも体育祭を成功させたいと思っている生徒はいるだろうし、だとしたら生徒だけでなく教員だって怪しいだろう。

そしてもう一つは、体育祭とは関係なしに刃更達を――正確には刃更だけを疎ましく思っている勢力。これは堂上や穂積に代表される澪や柚希のファン達である。最も解りやすく刃更に対して敵意を抱いているのは、やはり澪派の堂上だろう。駅の襲撃で敵が見せた、周囲を巻き込んでも構わないという自分勝手な姿勢は、体育祭を成功させたいと考えている梶浦達よりは、むしろ堂上に近いものがある。以前に校舎裏に刃更を呼び出した時は、途中で坂崎の邪魔が入ってしまい有耶無耶になっていたが、実行委員の初顔合わせの時に澪と一緒にいる刃更を見て、再び敵意を抱かれたとしてもおかしくはない。

しかし――刃更が澪や柚希と同居している事は、既に学校の誰もが知っている話だ。その事に比べれば、たかだか一緒に実行委員会に参加した位で襲撃してくるとは思えない。ならば、堂上の暴走は襲撃犯に操られて起こしたものと考えればしっくりくるが、

……でも。

刃更に対する敵意がずっと燻っていたとしたら――刃更を襲撃するには今回のタイミングは正しく打ってつけではあった。あの切れ者の滝川が、魔界へ戻って不在だからだ。

滝川が魔界へ戻ったのは、刃更が襲撃を受ける数時間前――スーパーで買い物を終えた澪と柚希に忠告をしたすぐ後の事だ。刃更が学校で視線を感じるようになったのは襲撃の翌日からだが、それは同時に滝川が学校へ来なくなってからとも言い換えられる。

……それに、今は《里》が胡桃を派遣してきている。

そちらの情報も予め摑んでいたとしたら、刃更が周囲を巻き込む危険性があると《里》に判断させるために、敢えて胡桃が駆け付けられるタイミングで刃更を襲った可能性も考えられる。《里》が事態を深刻だと判断すれば、それこそ実行委員会から手を引くなどという生易しい話ではなく、手っ取り早く刃更を澪や柚希から引き離す事ができるからだ。

――しかし、そこまで容疑者を絞り込めても、どうしても決め手には欠けていた。

よって刃更は今日、これまでの受け身から一転して試しに自分から動いてみた――堂上

達と衝突したのがそれだ。もし刃更があそこで堂上達と派手に問題を起こせば、彼らも一緒に実行委員会を辞める羽目になっていた。澪や柚希はクラスの創作ダンスの打ち合わせで不在だったし、二人が絡んだ刃更への嫉妬といった敵意が襲撃の原因だったとしたら、正体を現すには絶好のタイミングだった筈だ。それに——万が一、残念ながら体育祭を成功させたいがために刃更を実行委員からは外そうという勢力が存在し、彼らが犯人である可能性も刃更は考えていた。その場合は、刃更が辞める事で彼らの溜飲も下がるだろうし、勝手に二十万もの高額な買い物をした堂上を道連れにすれば、多少は満足してくれた筈だ。それが刃更にできる、体育祭実行委員としての最後の貢献だと思っていた。だがそれも——坂崎が来てしまったためか、相手が動きを見せるには至らず、失敗に終わってしまったが。だから、刃更としては敵の正体を探る次の手を考えようとしていたのだが、

……まさか。

坂崎からあんな話を聞かされるとは。これでは一気に状況が解らなくなってしまう。

「……長谷川千里に気を付けろ、か」

坂崎に言われるまで気が付かなかったが、確かに刃更は初めて会った時から長谷川の言葉に強い影響を受けてきた。それこそ妄信といっても構わないようなレベルで、彼女がくれたアドバイスを実践していた——だが、それは本来おかしいのだ。

戦闘や任務遂行時において、最もやってはいけない事の一つが『思い込み』である。強すぎる確信は冷静さを奪い、物事や状況を正しく判断するための視野を狭めてしまうからだ。勝利を確信する事なく最後まで油断せずに戦う事や、物事を表面だけ考えずに裏側まで見る視点を磨く事などは、《里》に居た頃の訓練で嫌というほど学んでいる。

だからこそ刃更は、滝川の素性に気が付く事ができたし、ゾルギアの裏を掻いてきちんと止めを刺す事もできたのだ。それなのに、そんな自分がどうして長谷川だけは全くといって良いほど疑わなかったのか——いや、疑えなかったのか。

今回の敵は、強力な結界と人の意識を操る術を持っている。そして坂崎から聞いた限りでは、確かに長谷川を取り巻く状況は異常だった。誰もが彼女のいう事を正しいと信じ、それでも強い感情は一切抱かず適度な距離を保ち、しかし誰もその事をおかしいとは思わない。あの滝川ですら、長谷川について何らかの違和感に言及した事はなかった。

長谷川千里を取り巻く全てが、彼女にとって都合の良いようにできている。

だが——そんな長谷川の周囲に、現在二つのイレギュラーが存在している。

一つは刃更だ。長谷川は、明らかに自分から刃更に近付いてきている。もし今回の襲撃が長谷川によるものだったとしたら、滝川と一緒に居る時に焼肉屋で会った事も偶然ではないだろうし、自宅に刃更を招待したのも何か裏があっての事だろう。

……恐らく。

長谷川が犯人なら、刃更に興味を持った理由は推測できる――《無次元の執行》だ。

もし長谷川が本当に何かしらの能力を持っていて、それが周囲の人間の意識を操る――言わば領域的なものだとしたら、物理・魔法を問わずあらゆる攻撃をカウンターで消滅させられる刃更が、自分の意識操作を打ち消す事ができるか興味や脅威を抱いてもおかしくはない。保健室での水着の一件や、自宅での手料理や一緒の入浴なども、刃更の感情を大きく揺さぶるための実験か何かで、その結果、刃更を脅威と判断して彼女の家を出た直後に襲撃したと考えれば、或いは嫉妬に駆られた堂上が犯人という推理よりも筋が通る。

……でも。

もし長谷川が犯人だとしたら、彼女には見過ごせない事がある――もう一つのイレギュラー、坂崎守の存在だ。刃更や柚希、滝川ですら気が付けなかった長谷川の違和感に、坂崎は気が付く事ができていた。もし長谷川が犯人で、自身の意識操作が効かない相手を消そうとしているのなら、刃更よりもまず坂崎を先に始末しようとするだろう。それに、坂崎はこのタイミングで刃更に長谷川の事を打ち明けてきた――何故だ？　坂崎は、刃更も長谷川の影響を受けていると言っていた。ならば、刃更に話せば自分自身が長谷川に疑念を抱いている事が伝わってしまうかもしれないというのに。

それとも、これも敵の罠なのだろうか。坂崎の言った事は、刃更の意識を無関係な長谷川に向けるためのデタラメで、こちらの隙を窺っているのだろうか。だとしたら、坂崎自身が嘘を吐いている可能性と、犯人に操られて嘘を言わされた可能性がある。

……いや。

少なくとも、刃更が長谷川を信じ切っていた事は事実だ。全てが嘘とは思えない。

だが――長谷川を信じるにせよ疑うにせよ、坂崎を信じるにせよ疑うにせよ、現状では確証が足りなすぎる。堂上や穂積に、橘に梶浦らも含めて一体誰が襲撃犯で、誰を操っているのか解らない――いや、彼らの中に本当に襲撃犯がいるのか、操られている者がいるのかさえも不確定だ。これでは、とてもじゃないが次の手など――、

「……っ、違う、それじゃ駄目だろ……っ！」

ベッドの上に起き上がり、東城刃更は前を見据えた。一体何を弱気になっているのだ。しっかりしろ。冷静になれ。思い込みを捨てて、あらゆる可能性を疑え。

そして――その全てに対処するのだ。

……大丈夫だ。だって……。

自分には、信じられる確かなものだってある。すると部屋の扉が外からノックされ、

『刃更……？』

絶対に信じられる存在の一人――成瀬澪が扉の向こうから呼び掛けてくる。
『学校から帰る途中からずっと様子が変だったけど……何かあった？』
こちらを気遣う声。いけない、心配させてしまっている。刃更は深呼吸を一つして、
「悪い……ちょっと色々あってさ、考えをまとめてたんだ」
でも、もう大丈夫。
「リビングに他の皆を集めてくれ。全部話すよ。今日あった事と、新しく解った事」
それに、と東城刃更は言った。
「正体も目的もはっきりしない敵と――俺達が一体どう対峙するべきなのかを」
まだ解らない事は多くて、容疑者は片手で数えきれない程いるけれど。
それでも解っている事はある。敵の狙いは刃更で、周囲を巻き込む事も厭わない。
そんな卑劣な相手に負ける訳にはいかない。それだけで充分だ。
だから、そのための話をしよう。恐らくは体育祭が重要な鍵になる。
無事に当日を迎えられるか。そして、無事に当日を乗り切れるかが勝負だ。
戦おう。学校の仲間を疑うのは苦しいが、今はそれしか方法はない。
たとえどんなに辛くても――もう一度全てを信じられるようになるためには。

第3章　譲れない想いを君と

1

私立聖ヶ坂学園体育祭。
第二十四回を迎えた今年の本番の空は、雲一つない澄み渡った秋晴れだった。
間もなく九時になろうとしている現在、東城刃更は橘七緒と共に正門近くにいた。
保護者や近隣住民など、生徒以外の来場客の受付が今の二人の担当だからだ。
パンフレットとチラシを積んだ来場受付の長机の前で、
「そろそろお客さんが来るのも一段落かな……？」
来客対応の合間を縫って隣の橘に話し掛けられ、刃更は「多分な」と頷いた。
体操服姿のため女子と見紛うばかりの可愛らしさを湛えている橘に、

「もうすぐ生徒の入場が始まる。家族からしてみれば、そこが今日の最初のシャッターチャンスだしな。今頃は来場者用スペースでカメラの確認でもしているんじゃないか」

「あはは、そうかもしれないね」

橘が口元に手を当て、ふふっと可愛らしく微笑んだ。そして、

「……どうにか間に合ったね」

堂上の暴走が判明した日から一週間。一度は実行委員会の空気が最悪な状態にまで落ち込んだものの、刃更達はどうにか無事に体育祭当日を迎える事ができていた。

例のトラブルが起きた翌日に、実行委員会へ現れた堂上が梶浦に謝罪したからだ。屋上で刃更と交わした言葉を坂崎が果たしてくれたのか、或いはそれ以外の理由で心境の変化があったのかは解らないが、不本意そうにしながらも堂上が謝罪の言葉を口にした事で、実行委員会は再びまとまる事ができ、本番へ向けてラストスパートを掛けられた。

……てっきり、堂上先輩は体育祭をブチ壊そうとすると思っていたんだけどな。

しかし謝罪した以降の堂上は澪が委員会に来ても絡むような事はなく、ずっと不機嫌そうにしながらも、自身が担当している部門の作業はこなしていた。

まだどうなるかは解らないが、例の花火についても梶浦と坂崎の方で何とかキャンセルできたらしく、ギリギリながらも全部門が準備を終える事ができていた。

よって刃更が実行委員会に参加したまま本番を迎えられたという事は、襲撃犯は刃更を辞退させる事で体育祭を成功させようという勢力の線は消えた事になる――「完全に」ではなく「ほぼ」ではあるが。それでも新しくできた友人をこれ以上疑わなくても良いかもしれない事に、改めて喜びを得ながら隣の橘の横顔を眺めていると、

「……どうかした、東城君？」

橘に問われ、刃更は「いや何でも」と首を横に振った。すると、受付に新たな来場客がやって来る。聖ヶ坂学園とは異なる制服を着ているその少女に、

「よう――迷わずに来れたみたいだな」

刃更がパンフレットを差し出しながら笑い掛けると、

「馬鹿じゃないの……お姉の通ってる学校に来るのに、あたしが迷う訳ないじゃん」

フンとぶっきらぼうに言って、少女が――野中胡桃がパンフレットを受け取った。

「もしかして……東城君の知り合いの娘？」

「ああ。柚希の――ウチのクラスの野中の妹だよ。胡桃、コイツは同じ実行委員の橘だ」

「えっと、あの……東城君の友達の橘七緒です……よろしくね」

「……どうも」

胡桃は橘をチラッと一瞥すると、そのままグラウンドの方へと行ってしまった。

「もしかして、ボク嫌われてる……？」
「いやいや、そんな事ないって」
心配そうにこちらを見た橘に、刃更は苦笑し――しかし、ふっと表情を硬くする。
「？　どうかしたの東城君……あ」
一瞬キョトンとなった橘だったが、すぐにその理由に気が付いた。グラウンドの方から、受付の交代要員として二人の実行委員がやって来たのだ。軽く頭を下げたこちらに、
「……交代だ」
視線を合わさずに、二人の内の片方――堂上が不機嫌そうに言った。だから、
「はい……それじゃあ、後をよろしくお願いします」
受付を堂上達に任せると、刃更と橘は自分達のクラスには合流せずに、グラウンドにある本部テントへと向かった。グラウンドの入り口に差し掛かるにつれ、徐々に増してゆく人混みによる熱気と喧噪。程なくして見えてきたのはテントや様々な機材が設置され、各プログラムの競技用具なども準備されてすっかり体育祭仕様になったグラウンドと、来場者用スペースにひしめく観客達だった。
そして刃更達が本部へと戻ると、既に受付や誘導以外の実行委員が集まっていた。
澪や柚希、榊や相川の姿もある。すると、その中心にいた梶浦が刃更達に気が付き、

「お疲れ様。これでひとまずは全員揃ったわね」
そう言うや腕時計に視線を落とし、それからメンバーを見渡して言った。
クラス単位の振り分けが行なわれているため、額に巻いた鉢巻きの色は赤・白・黄とバラバラ。当然、競技に関しては成績を競うライバルとなる。それでも――ここに集まっている実行委員メンバーは、共に体育祭を成功させるための大切な仲間だ。だから、
「時間よ――私達の体育祭を始めましょう」
梶浦の表情には、人員過多に悩んでいた委員会当初の不安さや、先日の堂上とのトラブルで狼狽えていた時の危うさは微塵もない。最後の一週間、実行委員会をきちんとまとめあげて無事にこの日を迎えた、頼もしいリーダーの顔をしている。そして梶浦を中心に自然と円陣が生まれる中、刃更を挟むように左右へ澪と柚希がやって来た。
「……刃更。胡桃は？」
「もう来てる。俺より先に会場に入った筈だ」
そっと柚希に問われ、刃更が胡桃の存在を告げた。すると澪が僅かに声を硬くして、
「そう……じゃあ、いよいよね」
その言葉に、東城刃更は「ああ」と頷いて言った。
「こっちも始めよう――俺達の体戦祭を」

2

そして生徒入場が始まった。流れるＢＧＭに合わせて体操服姿の生徒達が、学年順に陸上トラックを一周し、クラスごとにグラウンドへと整列してゆく。

来場者用スペースにいる観客のほとんどが、そちらに視線やシャッターを向ける中、

「……」

人混みの中にいる野中胡桃だけは、別の事を行なっていた。刃更達から説明を受けた襲撃犯の可能性がある者達の中で、要注意だと言われていた人物の確認とカウントだ。

取り分け、刃更と立場や感情的に強い因果関係にある者達の容疑は濃い。

ここに来るまでに見かけているのは、入り口で刃更と共に居た橘七緒。

グラウンドに来る途中ですれ違った堂上翔平。本部テントに詰めていた梶浦立華だ。

こうして開会式が始まった以上、刃更に恨みを持っている堂上と比べて、体育祭を成功させたい橘と梶浦の要注意度は下げても良いのかもしれない――だが、野中胡桃は油断しない。橘や梶浦が犯人じゃないと良いというのは、刃更の希望的観測によるところが大きいものだ。二人を信じるのが刃更の役目なら、二人を疑うのが胡桃の役目だろう。

それに現在、万理亜はゾルギアの一件で東城家の外に出られない。そして澪が表立って動けば穏健派や現魔王派の魔族達に、柚希が動けば勇者の一族に、それぞれ刃更達にとって不利となる判断や行動を許す理由を作ってしまう可能性がある。

よって今回の件で前に立って動けるのは、実際に襲われた刃更と、

……その現場を目撃して、介入したあたしだけ……。

やってやる、と胡桃は思う。刃更の事を大切に想っているのは、何も柚希や澪や万理亜だけではない。今の胡桃だって、昔と同じように刃更を掛け替えのない存在だと想っているのだから。そして――一般の生徒とは別に、刃更ら実行委員が並んでいる本部テントの中に、柚希の熱狂的なファンという穂積海司の姿があるのを見つけ、

……これで四人。

心の中でカウントを増やすと、胡桃はそのまま視線を横へとスライドした。すると本部の右端――教員用の待機テントに、残る二人の容疑者の姿を確認する。

一人は、爽やかな笑顔でグラウンドの生徒達を眺めている坂崎守。

……そして。

もう一人は、鮮やかな白衣を身に纏った養護教諭――長谷川千里だ。

これで六人。今回胡桃が頼まれているのは、刃更襲撃の容疑者達の動向の監視と追跡だ

った。その数は一般の実行委員も含めれば三桁に上るが、胡桃にとっては問題ない。

壇上で校長の挨拶が始まる中、胡桃はそっと瞳を閉じた。そして、

「――――――」

精神を集中し、己を中心に魔法陣を展開する。一般人には見えない魔力の輝きの中で、

……お願い、みんな……。

周囲の大気に宿っている精霊達へ、心の中で語り掛ける。この学校の敷地内を見張り、怪しい行動を取る者がいたら教えて欲しいと。こちらの呼び掛けに精霊達が応えてくれたのを感じて胡桃が眼を開けると、ふと刃更達と視線が合った。

魔法を使った事で、人混みの中に紛れていたこちらを見付けられたのだろう。

そして――恐らく会場の中に潜んでいる犯人も、胡桃の存在と魔法に気が付いた筈だ。

もし何か動きを見せたら、自分と刃更で一気にケリを付けてやる。

精霊達と胡桃が見詰める中、校長の挨拶が終わり、選手宣誓が始まろうとしていた。

壇上へと一人の女子生徒が上り、右の手を真っ直ぐに天へ向かって掲げる。そして、

『――宣誓。我々生徒一同は、これまでの学園生活で培ってきた知識と経験を活かし、またこの学園で育まれた健全な肉体と精神をもって、全ての競技を正々堂々と行なう事を誓います。生徒代表――梶浦立華』

そう宣誓がなされた瞬間、グラウンドを拍手の渦が包み込んだ。
様々な者達の思惑が交錯する中、ついに聖ヶ坂学園の体育祭が始まったのだ。

3

実行委員会のメンバーにとって、体育祭の本番という舞台は戦場になる。
まずはトラック競技とフィールド競技に分かれて、必要な機材の準備と参加生徒の誘導。
そして競技の実施と記録の集計を行ない、本部では次々に入ってくる結果を集計。
競技が終われば、すぐさま機材の撤去や入れ替えを行ない次のプログラムに備える。
そうした直接の競技運営の他に、放送部と協力して競技ＢＧＭと実況を放送。
怪我人や体調不良者が出れば救護テントへ連れて行き、機材トラブルや競技進行に遅れが発生すれば、即座にインカムに流れる梶浦の業務連絡に従い誰かがヘルプへと走る。
また体育祭という性質上、競技に参加する者も観戦する者もどうしても熱くなりやすいため衝突が生じてしまう事もあり、その際は注意や制止を行ない、生徒では対応できない場合は教師と共に対応に当たるなど、その仕事は多岐に亘っていた。よって、
「百ｍ走予選最終組の集計結果急いで。一発日の中間成績発表そろそろだよ！」

「幅跳びの二―A男子がまだ来ない？　もう一回放送で呼び出せよ！」
「PA担当何やってんの！　北側スピーカーの音出てないぞ！」
「砲丸投げで遅れが出てるって？　ふざけんなよ順番に鉄球放るだけだろうが！」
序盤の競技こそ予定通りに消化できたものの、一時間も経つと本部テントは慌ただしさに包まれた。刻々と変化する状況に、各部門がフル回転で対応してゆく。そんな中、
「総務で誰か動ける人いる？　高跳びの方で怪我人が出たらしいの」
応援要請を受けた梶浦が発した新たな指示に、
「――俺が行きます」
柚希の隣で集計作業を手伝っていた刃更は、即座にその役を買って出た。現在、本部テントで仕事をしている総務メンバーは二年の女子ばかりだ。こういう使いっ走りの仕事は一年生が率先して行なうべきだし、救護テントに連れて行くなら男手の方が良いだろう。
「助かるわ。悪いけどよろしく頼むわね」「……気を付けて刃更」
こちらを送り出す柚希の言葉に「ああ」と頷きを返してから、刃更はトラック競技の邪魔にならないように迂回したルートで高跳びの競技エリアに向かう。すると、
「あ、東城君……こっち！」
負傷者と思しき男子に付き添っていた橘が、手を挙げてこちらを呼んでくる。

「跳んだ時に勢い余って腰からマットの外へ落ちちゃって……ボクが救護テントまで連れて行けたら良かったんだけど、競技の手伝いでここを離れられないの。ゴメンね」
「良いって。お前にはお前の仕事があるんだし、こういう事は俺の方が向いてるよ」
何せマットの傍らに蹲っているのは三年の男子で、橘はおろか刃更よりも大きい身体をしている。華奢な橘がこの人を支えるのは厳しいだろう。
「摑まって下さい……立てますか？」
刃更は肩を貸して歩き出そうとしたところで、ふと思い出したように、
「――っとそうだ、橘。確かお前、この後の四百m走に出るんだったよな？」
いくら実行委員が忙しいといえども、だからといって競技への参加が免除になる訳ではない。仕事の合間を縫って、一般の生徒と同じく決められた種目に出場する必要がある。
「この人を送ったら、こっちに誰か交代を送るように梶浦先輩に言っておくよ」
刃更が代わってやれれば手っ取り早いのだが、残念ながらそれはできない。四百m走の次は、刃更の出場する競技が控えているからだ。
「……あの、東城君」
「？　どうした……？」
ふと静かな声で呼び止められ、刃更は問い掛けを返した。しかし、

「……ううん、ゴメン。何でもない」

橘はそう言うと、「……また後でね」と笑顔でこちらに軽く手を振った。

ああ、と頷きを返すと、刃更は怪我をした三年の男子を連れて救護テントへ。

競技が始まってしばらく経っている事もあり、刃更が連れて行った男子以外にも、テントには何人もの生徒の姿があった。すると救護班の女子が刃更達を見付けて、

「消毒ですか？　手当てですか？」

と訊ねてくる。本来、「消毒」は広義の「手当て」に含まれる行為だが、これは担当の振り分けに関する問い掛けだ。消毒で済む擦り傷などであれば、手伝いの女子が。包帯を巻く捻挫や体調不良など「手当て」が必要なものは長谷川が対応する。刃更が後者だと伝えると、三年の男子は別の生徒を手当てしている長谷川の方へと連れて行かれた。

「……じゃあ、よろしくお願いします」

軽く頭を下げてその場を後にする際、刃更はふと足を止めて長谷川の様子を見た。

丁寧な手付きで、膝を痛めた男子に包帯を巻いている横顔を見詰める。すると、

「どうした東城……お前もどこか怪我でもしたか？」

こちらを見ずに長谷川が言った。そんな彼女に刃更は「いえ」と首を横に振ると、

「……失礼します」

それだけを言って、救護テントを出た。そして来た道を戻っていると、ふとチャイムが鳴り響いた――いつもならば三時限目の始まりを報せるためのものだ。

……今の所は、大きなトラブルもなく進んでいる感じか。

競技のタイムスケジュールを脳裏に思い浮かべた刃更は、そう現状を認識する。

実行委員の数が例年の二倍近くいる割には忙しいが、これは午前の部に個人競技が集中しているせいだろう。競技に参加する者のフォローのため、仕事の交代や細かい配置転換を頻繁に行なう必要があるし、各種目の成績集計も煩雑だ。しかし午後になれば、クラス・色別対抗などの集団競技へシフトする。少しずつ各自の負担は減ってゆくだろう。恐らく今が一番キツイ時間帯――だが、ここを乗り切れば体育祭の成功が見えてくる。

「……」

刃更はふと立ち止まると、グラウンドを見渡した。そこにあったのは熱狂的な空間だ。

競技に参加している者も、観戦している者も。生徒も教師も来場者も。

この場に集った多くの人達が、刃更達の作り上げた体育祭を楽しんでいた。

実行委員のメンバーとして、その事を誇らしいと思う。

……だけど。

この光景を滅茶苦茶にするかもしれない敵がいる。そして、それは刃更の知り合いの可

能性が高いのだ。その事を改めて想い、刃更はギュッと右の拳を握り締めた。
胡桃の精霊魔法が牽制になったのか、今のところ相手が動くような気配はない。
それでも周囲に対する警戒を緩める事なく、東城刃更はグラウンドへと戻っていった。

4

ほとんどの競技が身体能力の優劣によって勝敗が決まる中。
刃更や澪、柚希の三人が参加しても卑怯になりにくいプログラムが一つだけある。
コンビネーションに加えて運がものを言う、三人四脚で行なう障害物競走だ。
『さあ、午前の部の最後を飾るのは――男女混合トリオ de 障害物競走です！』
テンションの高い声がスピーカーから響いた。その声は刃更のよく知るもの。この種目の実況担当は、刃更と同じクラスの放送部員・島田太一だ。
『各クラス男子1名女子2名の代表による三人四脚で、三つの障害をクリアしながらトラックを一周するという、男子が出たい競技ナンバー1のこの種目。参加できるのは、一緒に走る二人の女子から指名を受けた選ばれし男だけ。最初の一年生対決の注目は、何と言っても第六レーン。今年入学するや同級生の男子は勿論、上級生の先輩達をも一気に魅

了した成瀬澪と野中柚希を擁するB組だぁっ！』

島田の興奮気味のアナウンスで一気に沸き上がる男子の観客達。ところが、

『そして、我が校きっての二大アイドルと共に走れるのはこの男――東城刃更っ！』

右足を澪と、左足を柚希と縛られた状態でスタート位置に立った刃更に、容赦なくブーイングが浴びせられた。だが仕方がない。これは出場する男が妬まれる競技だ。現に、他のクラスから出ている男子だってブーイングを、

……あれ？

気のせいか、俺だけがブーイングを浴びているような……えっと頑張れ、超頑張れ俺、と完全アウェイの洗礼を浴びた刃更は、せめてとばかりに自分を励ました。

体育祭実行委員を引き受けているという事もあって、刃更達は優先的に参加種目を決めさせて貰えていた。すると澪と柚希が選んだのは、この障害物トリオ競走だった。

そして――二人は当然のように刃更を指名したのである。

――実は、澪と柚希の二人にこの競技へ出る事を勧めたのは万理亜だ。といっても、どんな種目があるのか聞き出したロリエロサキュバスが、自身の本能に忠実に欲望を全開にした訳ではない。刃更達三人がこの種目に出るのは、例の襲撃犯対策のためだ。敵の狙いである刃更に、この体育祭中に最も隙ができるのは競技への参加中をおいて他にない。

そんな中、同じ競技に澪と柚希が一緒に出て周囲を警戒しておけば敵も仕掛けにくいだろうし、もし襲われても三人一緒ならばそれだけ対処もしやすくなるという訳だ。

……まあ。

容疑者の中には堂上と穂積らも居る。こんな密着度の高い競技に出て、彼らを刺激するような真似は避けるべきかとも思ったが——逆に彼らが犯人だったとしたら澪や柚希を巻き込むような真似はしないだろう。これだけのメリットを考えると、他の男子から多少やっかまれてブーイングを受けるくらいの事は我慢しなければ。すると、

「気にしなくて良いわ。カボチャか何かが騒いでるとでも思えば良いのよ」

「大丈夫——刃更は私が守ってみせる」

そう言って、澪と柚希がまるで周囲に見せつけるようにして身体を寄せてきて、

「……まあ、良いか」

刃更は苦笑しながら身体を密着させてきた二人の腰を抱いた。澪や柚希の体温や、身体の柔らかさを感じる、それは正に「両手に花」状態。途端にブーイングが一層ヒートアップするが、東城刃更は構わない——改めて実感したからだ。

「俺がお前達とこうしていられるのは、やっぱり——凄く幸せな事だもんな」

そう刃更が言った直後、乾いたスターターの音が鳴り響いた。

『さあ各クラスが一斉にスタート――っと、D組が一歩目から転倒！　C組とE組が巻き込まれてしまったーっ！　残りのクラスは被害を免れたが……おおっと、これは凄い！　注目のB組が、早くも他のクラスを置き去りにしてグングンスピードを伸ばしている！』

レースの模様を実況する島田の声を聞きながら、成瀬澪と野中柚希は自分達がトップに躍り出た事を当然と捉えていた。何せ自分達と刃更は、この競技に出る事が決まってから本番の今日まで、家にいる時はずっと三人四脚の状態で過ごしていた。足を解いたのは、誰かがトイレに行く時と夜寝る時くらいで、毎日のお風呂も一緒だったのだ。

一時期は自粛していた刃更との入浴も、胡桃が来た晩からは解禁となっていて、最初こそ三人繋がった状態で身体を洗ったり湯船に入ったりする際に苦労したが、互いに助け合わなければいけない不自由さを楽しむ内に、次第に普通に行なえるようになっていって。いつしか澪と柚希は二人で刃更の身体を洗ってあげるようになり、刃更もまたこちらの洗いにくい所を洗ってくれるようになっていった。

そうして刃更とチームワークを深めた澪と柚希にとって、最初の平均台渡りなど障害でも何でもなかった。横向きになり、三人の呼吸を合わせたカニ歩きであっという間にクリ

ア。再びトラックを走り始めると、いよいよ他のクラスを完全に置き去りにした。そして、

『B組は早くも二つ目の障害――この競技で男子が最も嬉しい、挟んでW風船割りへ！』

「三人ともこっちこっち～」

この競技のアシスト担当の一人である相川がこちらを手招きした。そして、

「はーい、それじゃあこの風船でよろしく」

澪と柚希に一つずつ、膨らませてある風船を渡してくる。澪はそれを刃更とお腹合わせに、柚希は刃更と背中合わせで互いの身体の間に挟んだ。そして身体を密着させて風船を割ろうと身体を押し付ける――だが、これが中々に割れない。そのカラクリを、実行委員である澪と柚希は知っていた。二人が渡されたのは濃いピンク色のもの――それはラブピンクと呼ばれる一番割れにくい風船だ。イベント競技を盛り上げるため、勝負が接戦になるように割れやすい風船と割れにくい風船が用意されているのだ。だから、

『おーっと、ここまで順調に来ていたB組の足が完全に止まってしまった！　この間に、後続が次々に第一ポイントを通過。トップのB組との差をどんどん詰めてゆく』

いけない、と焦りを得た澪と柚希が何とか風船を割ろうとするのだが、胸や尻だけが刃更の身体へ密着してしまい、割ろうともがく度にいやらしく擦り付けてしまう。すると、

『おおっ、これはエロいっ。これではまるで、東城君を使って二人の女の子がポールダン

スをしているようだ！』

「あの馬鹿……っ！」

観客を煽るような島田の実況に刃更が呟くように毒づくと、こちらを見ていた男子達のブーイングが一気に大きくなった。しかし澪と柚希は一瞬視線を合わせると、

『……』

互いに小さく頷くや、周囲に見せ付けるように刃更へ自分達の身体を擦り付けた――一緒に入ったお風呂で、澪は胸で、柚希は尻で刃更の身体を洗ってあげた時のように。

――成瀬澪と野中柚希には、一つ決めていた事があった。

それはこの競技を通じて、自分達が誰のものかを周囲にはっきり解らせる事だ。ファンクラブのようなものを作って自分達だけで騒ぐ位ならまだ好きにすれば良いと思っていた。だが、実行委員やそれこそ刃更に迷惑を掛けるようなら教えてやるべきだろう。

成瀬澪と野中柚希は彼らのアイドルではなく――今はもう東城刃更のものなのだと。

まるで刃更に抱き付くようにして、澪と柚希は周囲に自分達の想いを見せ付けた。

すると最初は恥ずかしがっていた刃更が、やがて二人の想いに気付いたのかフッと苦笑すると、やおら澪の腰を抱いて身体を密着させながら、柚希に背中の体重を預けてきた。

そして後から来た二クラスに追い抜かれたところでまずは澪の、続いて柚希の風船が割

れて――そして三人は再び駆け出す。向かうのは最後のポイント、網くぐりだ。

5

網の中を絡み合うように進む刃更達の様子を、動画で撮影している者がいた。

一般来場者用の観覧スペースでビデオカメラを回しているのは、聖ヶ坂学園の敷地内に刃更を狙う不審者がいないか精霊達に監視を頼んだ野中胡桃だ。

「……全く。何でこんな事まで」

胡桃はやってられないとばかりに嘆息した。こんな真似をさせられているのは、留守番中の万理亜から刃更達を撮ってくるよう頼まれたからだ。本来言われた通りにする義理などないのだが――断れない理由もあった。先日、売り言葉に買い言葉で万理亜の挑発に乗った結果、自分はとんでもない弱みを握られてしまっている。万理亜のサキュバスの洗礼を受けて激しい催淫状態に陥った胡桃は、心と躰に凄まじい快楽を刻まれ、たった一晩でこれまでの価値観を大きく揺るがされてしまった。さらに――実はあの晩だけでなく、刃更達が学校に行っている間に、胡桃は内緒で万理亜から色々な事をされていた。

……だって。

胡桃は僅かに頬を赤くした。柚希や澪は刃更と親密な関係を築いている。それに追い付きたくはないかと言われれば――そんなのは断れる筈がないだろう。

――今回、柚希の応援要員として胡桃が派遣されたのは、長老達の指示ではない。

誰を派遣するかの話になった時、胡桃が自分から志願したのだ。前回の再会の後、一度は《里》へ戻ったものの、再び刃更達の下へ柚希が戻る事を許されたのを見て――胡桃は素直に羨ましいと思った。五年ぶりに刃更と再会して、まだ苦しみ続けている彼の想いを知って――胡桃も自分の気持ちを、もう誤魔化せなくなってしまっていたからだ。だから少しでも刃更や柚希の傍にいれば、みんなで仲良く過ごしていた頃のような関係を取り戻せるのではと思って志願したのである。しかし現在――刃更と柚希は既に、澪や万理亜と共に全く新しい関係を築き始めていて。昔のように刃更や柚希に思う存分甘えられるようになるには、万理亜の言うように柚希や澪に追い付き、刃更達の輪の中に入るしかない。

……だから。

胡桃は最近、澪や柚希がこれまで刃更に屈服させられた時のビデオを万理亜に見せられ、密かに同じ事を一つずつ体験させられている。勇者の一族だというのに、魔族である万理亜に少しずつ逆らえなくなってきているのが自分でも解るが、

……でも、こうしていればまた……。

この五年――刃更とは離れて会えなくなり、それ以来姉の柚希は別人のように変わって、胡桃は辛く寂しい想いをしてきた。だけどこの間の晩、刃更と柚希に沢山された時はまるで幼い頃のように一緒の時間を過ごす事ができた。たとえ快楽を共にする形でも、昔に戻れるというなら胡桃は構わない。柚希と澪にできて、自分にできない筈はないのだから。

そんな事を想いながら撮影を続けていた胡桃は、

「――――」

ふと表情を硬いものにした。見張りの精霊達が警告を発したのだ。そして、

「東城君達を撮ってるの……？」

控え目なトーンで声を掛けられた。振り返るとそこには橘が立っており、

「……何か用でも？」

「うん……ちょっとキミにお願いがあって来たんだ」

橘は浮かない表情でそう言うと、そっとこちらを見据えてきた。

――精霊達は橘の接近を報せてはきたが、魔力反応については何も言っていない。

少なくとも、既に周囲の人間が操られてしまっているような事はなさそうだ。

……でも。

刃更達が競技中の今、胡桃は完全に単独の状態だ。自分や周囲に意識操作の魔法が掛け

られる可能性を考え、胡桃はいつでも動けるように意識を緊張させた。そして、
「お願い、ね……あたしにアンタの頼みを聞く理由があるとは思えないけど」
「うん……でも、これはボクだけの話じゃないの。東城君や、野中さん――キミのお姉さんにも関係している話だから」
「刃更とお姉も……？」
駆け引きか、或いは罠か――胡桃が眉を顰めて問い返すと、橘は「うん」と頷いて、
「だから、この体育祭が――」
そこまでを言ったところで不意に表情を固まらせた。その視線は胡桃ではなく、胡桃の後方を見ている。こちらの背後に何を見たのか――振り返った胡桃はそれを見た。
本校舎の屋上に、グラウンドを見下ろすようにして立つ人影があるのを。
「あれは……」
それが堂上である事を胡桃が確認したのと、精霊達が一斉に警告を発したのは同時。
胡桃がハッとなった瞬間、堂上は右手を天へと掲げると巨大な魔法陣を展開して。
直後――体育祭が行なわれているグラウンドへ巨大な竜巻が降ってきた。

大気を震わせる轟音と共に、グラウンドの砂が舞い上がった。
突然の事態に生徒も教師も、一般の来場客も例外なく悲鳴を上げる中、
「そんな……」
竜巻が生まれる瞬間を目撃した橘七緒は、愕然の声を漏らした。
「――――っ！」
表情を厳しいものに変えた胡桃が自身の服を戦闘衣装へと切り替えると、風の飛行魔法を展開。地面を蹴って宙へと――屋上へと向かって飛び立っていった。
魔力を帯びた戦闘衣服に切り替わった時点で、普通の人間には胡桃の姿は見えなくなっている。風の魔法も、常人には突風が起きたとしか感じる事はできないだろう。
――だが、胡桃が取ったそれらの動作を、橘七緒はしっかりと認識できていた。
それでも立ち尽くす事しかできなかったのは、絶対にあり得ない事が起きていたからだ。
「何で……っ!?」
信じられなかった。堂上が魔法を使用したのだ――だがそんな筈はない。
……だって堂上先輩は、ボクの魔眼で……。
思わず茫然自失に陥った橘を、不意に覚醒させるものがあった。
それは鈍い破砕音。空から降ってきた竜巻が、設営されていたテントの天幕を吹き飛ば

し、骨組みを破壊したのだ。そして無数の悲鳴が新たに上がる中、

「あ、ああ……」

橘七緒は呻くようにして呟いた。橘が目の当たりにしたのは、自分達が作り上げた大切な体育祭が、今まさに破壊されようとしている瞬間だ。人も、物も、このままでは何もかもが滅茶苦茶にされてしまう。みんなで頑張ってきたのに、全てが消し去られてしまう。

――だが、そうはならなかった。

轟風が吹きすさぶ中、キュイイイイイイイン！　と甲高い鳴動音が生まれて。

次の瞬間――地面に迫っていた巨大な竜巻が、跡形もなく消滅した。

「え――……？」

再びの呆然を得た橘は見る。巨大な竜巻が落ちようとしていた場所――グラウンドの中心に一人の青年が立っていた。右腕を装甲化し、片刃の大剣を振り抜いた体勢でいるのは、障害物競走に出ていた筈の東城刃更だ。

……東城君が、どうして……？

堂上がどうやって魔法を使用したのか解らない中、橘はさらに思考を混乱させた。

――別に、刃更が異能の力を使用した事に驚いた訳ではない。開会式の最中に胡桃が魔法を使ったのを橘は見ていた。恐らく彼女は、橘を消滅させに来た勇者の一族なのだろう。

体育祭を成功させるために、橘は己の魔眼で堂上の意識を操ってしまったのだから。

だけど、せめてこの体育祭が終わるまでは待って欲しくて胡桃に声を掛けたのだ。

そして胡桃の姉である柚希も、柚希や胡桃と幼馴染の刃更も、彼らと同居している澪も、同じ勇者の一族の可能性が高い事は橘も推測できていた。現に橘の視線の先で、刃更の下へ駆け付けた澪と柚希の表情には、焦りや混乱などの戸惑いは見られない。それでも橘が改めて驚きを得たのは、刃更達の対応の早さと、その手順に違和感があったからだ。

――堂上が魔法を使用したのは突然の出来事だった。

急に想定外の事態が起きれば誰だって反応は遅れる。現に、橘はすぐには動けなかった。それなのに――澪や柚希と共に競技中だった刃更の方が、早く動けたのは何故なのか？

おかしい事はまだある。竜巻が発生した後の胡桃の動きだ。胡桃は竜巻が降ってきていたあの状況で、周囲の人間を助ける事よりも堂上のところへ向かう事を優先した。

勇者の一族である彼女が眼の前で危険に晒されている人を無視するとは考えにくい。だとしたら、刃更があの竜巻を何とかする事が予め解っていたという事だろう。

つまり――刃更が早すぎる対応を取れたのも、胡桃が周囲の人を無視したのも、予めこうなる事が解っていた上での、打ち合わせ済みの動きだった事になる。だが、

……でも、それなら何で……？

堂上を操った橘を消滅させようとしていた刃更達が、堂上が橘の支配を無視してあんな魔法を使う事をどうして事前に解っていたのか。思考を巡らせていた橘は、

「まさか……」

かつて母親から聞いた事がある。中世のヨーロッパで起きた魔女狩り――あれを主導したのは、欧州地域を担当していた当時の勇者の一族だったと。こちらの世界へ侵入していた魔族と人が交わった例は無数にある。そうして生まれた人と魔族のハーフや、その血を受け継ぐ者達を危険因子と判断した勇者の一族は、魔女狩りと称して大規模な処刑を行なったのだ。橘七緒は、そうした一方的な弾圧からどうにか逃れる事ができた家系に生まれた存在である。だが魔女狩りが行なわれた際、一部の勇者の一族が監視で問題ないような存在まで処刑するために、わざと悪質な証拠を偽装した事もあったという。

――それと同じ事を、刃更達が企てていたとしたら？　橘を消滅させるために、堂上をさらに操って強力な魔法を使わせて、しかし死人が出る前に事態だけは収束――人々を助けた功績だけは自分達のものにしつつ、罪だけを橘に着せようと企んでいたとしたら。

刃更達が、この事態を予見できていた事の説明が付く。付いてしまう。だから。

「……」

橘七緒は、東城刃更を見詰める瞳をゆっくりと冷たいものにしていった。仲の良い友人

を――この学校で初めてできた親友を見る眼から、己の敵を見る冷酷な瞳へ。そして、

「――――」

そんなこちらに気が付いたのか、ゆっくりと刃更がこちらを振り返った。

6

巨大な竜巻を《無次元の執行》で消し去った刃更は、速い動きで屋上を振り仰いだ。そのまま視線を合わせると、堂上はニヤッと笑い、踵を返して屋上の向こうへ姿を消した。その後を、飛行魔法を発動した胡桃が高速で追ってゆき――一瞬だけこちらを振り返ってきた胡桃に刃更は頷きを返した。ここまでは、何かあった際にどう対処するか予め決めておいた通りに自分達は動けている。そしてグラウンドにざわめきが生まれる中、

「……刃更」

まずは柚希が、続いて澪が障害物競走のトラックからこちらへ追い付き、

「今の――堂上先輩よね。やっぱりあの人の仕業だったって事？」

「どうだろうな。明らかにこっちを誘ってるし、操られているだけかも……でもたとえそうだったとしても、捕まえて魔力の元を追跡すれば黒幕の手掛かりは得られる筈だ」

だから逃がさない。刃更はギュッとブリュンヒルドの柄を握り締めると、
「よし――当初の作戦通りに行こう。俺は胡桃と一緒に堂上の後を追う。二人は、ここでこれ以上混乱が大きくならないようにしてくれ。頼んだぞ」
今の竜巻で驚いた人は多いだろうが、転んだりして手や足を捻った程度で、酷い怪我を負った人はいない筈だ。現状被害は一部のテントや放送機材だけで済んでいるし、今ならまだ体育祭を中止にせずに済むかもしれない。そのためには生徒や教師、来場客が得ている混乱がパニックに発展するのを防ぐ必要がある。それは、今回の件ではバックアップを担当して貰う澪と柚希の役目だ。二人は頷くと、それぞれ混乱を抑えるために走っていった。見れば本部テントがあった所では教員達より先に梶浦が実行委員メンバーに指示を出しているのも見える。流石だな、と頼もしさを得た刃更は、
「――――――」
ふと視線を感じて振り返った。戸惑いとざわめきが満ちている来場者用スペース――その人混みの中からこちらを見詰めている瞳と目が合った。
「橘……」
初めて見る冷たい色を宿した友人の瞳に、刃更は彼の名を呟いた。
――その瞬間だった。結界が展開され、辺りが暗くなったのは。

途端に建物だけを残し、周囲にいた刃更以外の人達が消えた。澪や柚希の姿も見当たらない。恐らく刃更一人が結界内に取り込まれたのだろう。思わず息を詰めた刃更は、

「――――っ！」

それでも辛うじて反応した。とっさに横へ跳んだのだ。すると刃更の脇を掠めるようにして風が抜けてゆく――いや、正確には風ではない。視線の先、爪を鋭いものに変化させた右手を突き出す体勢だった背中がこちらへと振り返り、

「……やっぱり凄いね、東城君」

橘だった。こちらへ攻撃を仕掛ける際に眼鏡が外れたのだろう。こちらを見据えた瞳が、薄暗い結界内で赤く輝いていた。だから、

「そういう事、か……」

橘の正体を察した刃更は、納得の呟きを放った。今回の敵は人の意識を操る事に長けており、操った者に魔法を使わせる事もできる相手だ。よって万理亜から眷属化という言葉が出た時、魔族の各勢力以外に刃更の脳裏に思い浮かんだ敵の正体があった。

――それがヴァンパイアだ。

数百年前。こちらの世界へ来ていた魔族と人とが交わる事で、魔界にいる魔族とは別に独自の進化を遂げた亜人種や幻獣種が誕生した。現在、彼らが人を襲う事はほとんどな

い。それは、人を襲うような種族は随分前に勇者の一族が倒し尽くしたからだ。そして一部を除き、生き残った者達はこの世界でひっそりと暮らす事を選んでいる。中でも亜人種は、普通の人間と交わりながら世代を重ねていく中で血が薄まり、どんどん力を失っているのが現状だ。よって勇者の一族は彼らが罪を犯したとしても、余程の事がない限り滅ぼすような事はしない。人間の中にも、他人を傷付け殺す者だっているのだから。

……しかし。

何事にも例外はある。人と変わらない者達がほとんどでも、何かの拍子に隔世遺伝や先祖返りが生じる事があるからだ。それでも橘の正体に勇者の一族が気付かなかったという事は、橘がずっと力を使う事なく人間として生きてきたからだろう。それなのに、

「……残念だよ、橘」

たとえ橘が刃更を襲った犯人だったとしても、それが体育祭を成功させたい思いから生じた行動だったのなら――東城刃更は別に構わなかった。本当だ。

実行委員会に参加する事で堂上達まで連れてきてしまい、橘の大切な日常を壊してしまったのは自分達だ。刃更も、澪達の日常を少しでも守るために戦っている。当たり前の日常がどれだけ大切で、どれだけ得難いものかも知っている。だからこそ、共に体育祭を成功させようと頑張ってきた。それなのに――先程の竜巻はもう、橘の日常を守るためのも

のではなかった。多くの人の想いが込められた体育祭をぶち壊し、周囲の人達の日常まで壊しかねないものだった。刃更達に残された、学校生活という最後の日常も一緒に。

――だから、それを守るために、東城刃更は己の心を冷酷なものへと切り替える。

そしてブリュンヒルドを構えると、友達という言葉を忘れて橘を見据えた。

『――――――』

互いの視線が交錯し、次の瞬間――刃更達はどちらからともなく動いた。

ほぼ同時に地面を蹴った瞬発で、一撃目から互いの全力を激突させたのだ。

7

刃更が橘との相対を始めた頃。

一足先に堂上の後を追っていた野中胡桃は、既に彼とその仲間達を制圧していた。

裏庭で追い付いたこちらを、澪のファン仲間達と合流した堂上が迎撃してきたが、精霊魔法を操る胡桃の相手ではなかった。

澪を慕っている彼らが、嫉妬に駆られて刃更を襲ったとしたら確かに筋は通る。だが、

「……随分と呆気ないよね」

厳しい表情のまま、地面に倒れている堂上達を見下ろした。
――確かに堂上はグラウンドに向かって魔法を唱えていたし、ここへと追い込んだ胡桃との戦闘でも常人とは思えないような戦闘力を発揮した。
だが、それは先日の駅のホームで刃更を襲った客達と大差があるとは思えなかった。そして、つい先ほど刃更と橘を呑み込むように結界が展開された事を考えると、
「コイツらも操られていただけ……それに、この感じ……」
胡桃は、学校の敷地全体をいやな気配が覆っているのを感じていた。
間違いない――結界が二重に展開されている。グラウンドから校舎にかけてだけではなく、学校の敷地全体をさらに別の結界が覆っているのだ。力の波動が似ている事を考えると、別々の者が張ったのではなく同じ者が重ねて結界を生み出したという事だろう。だが、
「結界の重層展開なんて、あたしやお姉だって出来ないのに……」
そんな真似ができるのは、勇者の一族の中でも結界魔法に特化しているなど、ごく限られた者しかいない。だがこの状況を生み出しているであろう一連の黒幕は、結界の重層展開を行ない、さらには堂上達をも操ってみせている。だとしたら、
「……っ」
その実力を想像した胡桃の中で嫌な予感が一気に膨れ上がり、ゴクリと喉が鳴った。

……お姉達に伝えないと。

胡桃が結界の重層展開に気が付けたのは、精霊魔術師（エレメント・マスター）として使役（しえき）している精霊（せいれい）達が教えてくれたからだ。柚希も精霊を宿している霊刀（れいとう）『咲耶（さくや）』を持ってはいるが、技タイプの彼女は『咲耶』に自身の意思を伝える事はできても、『咲耶』が持っている意思をはっきりと理解する事はできない。澪は胡桃と同じ魔力タイプではあるものの、彼女は自身の内にある魔力を使用する上位魔法士（ハイ・ウィザード）だ。まだ魔力を使い始めて一年足らずという話だし、周囲に存在する波動に対して敏感（びんかん）さを求めるのは酷（こく）だろう。

「――ううん、でもその前に」

恐（おそ）らく犯人は、向こうで結界が展開すると同時に刃更と一緒に気配が消失した橘だ。

だから胡桃は、堂上の中にある魔力の元の追跡を精霊達に頼んだ。結界内に取り込まれた刃更の後を追うには、橘の魔力を追跡して突破口（とっぱこう）を開くのが一番だからだ。しかし、

「……え？」

程なくして精霊達から返ってきた答えに、野中胡桃は呆然（ぼうぜん）の声を漏（も）らした。堂上を操っている魔力を遡（さかのぼ）ったところ、辿（たど）り着（つ）いたのはやはり橘七緒だった。しかし――それとは別に、橘の魔力の裏に隠れて堂上を操っている力がある。

「何よこれ……」

これまで感じた事のないような波動に、戸惑いを得た胡桃はその元を辿ろうとして、

「――え？」

突然背後に気配が出現し、胡桃はとっさに振り返ろうとして――しかしできなかった。

それより先に、胡桃の意識が急速に遠ざかって。

声を上げる事すらできず、そのまま野中胡桃は気を失った。

8

ヴァンパイアに代表される吸血種は厄介な存在である。

吸血や自身の血を与えた相手を眷属として使役可能なだけではない。人間を遥かに上回る身体能力に加え、魔法を操る事もできる器用さを併せ持ち。魔眼による強制暗示や意識操作が行なえる上に、白らの肉体を霧や蝙蝠へと変える形態変化まで行なえるからだ。

――一切の油断が許されない相手。よって戦闘が始まった直後は、橘の多彩な攻撃によって刃更は防戦を強いられた。だが、戦いの中で東城刃更は徐々に押し返してゆく。

橘は強かった。澪や万理亜と出逢い、柚希と再会したばかりの頃の刃更ならば、恐らく負けていただろう。しかし――今の刃更はもうあの頃とは違う。

五年のブランクが完全に解消された訳ではないのだろうが、実戦の勘は大分取り戻せてきているし、主従契約を結んでいる澪や柚希との関係を深めて戦闘力も向上している。

そして――一度の実戦が百度の鍛錬に勝る事もある。刃更は成体化した万理亜や高位魔族のゾルギアといったS級クラスの相手とも戦った。立て続けに訪れ、それでも必死に潜り抜けた死線が、刃更の実力をさらに引き上げていたのだ。

――そして空間複製タイプの薄暗い結界の中。

グラウンドで始まった戦闘は現在、校舎内へとその場を移していた。二階の廊下に連続して生じる甲高い金属音――それは、ブリュンヒルドと橘の両手の爪とがぶつかる事で生じる戦闘音だ。そして互いに攻撃を繰り出す中、

「――――っ！」

後方へと跳んだ橘が着地した廊下に片手を付いた。すると紫の魔法陣が展開され、途端に無数の巨大な円錐が床から出現。鋭い先端が刃更を串刺しにしようとする。

しかし、刃更は一瞬早く跳躍してこれを回避。スピードタイプの高速を活かして足場を左の壁から天井へと移し、さらに右の壁へと回り込みながら疾走を行なった。その一歩後ろを、円錐状に変形した壁や天井が轟音を響かせながら追い掛けてくる。

そして行く手を阻むように円錐が壁面に生じた瞬間、刃更は壁を蹴って橘へと迫った。

宙を水平に跳んだこちらに、橘が行なったのは変形させた床や壁や天井の円錐部分の一斉発射だ。宙を水平に跳びながら斬撃の体勢に入っていた刃更は、

「はあああああああああああっ！」

宙で身体を捻ると、気合いの声と共にブリュンヒルドを一閃。背後から迫っていた無数の円錐を斜めへの斬り上げで弾き散らすと、そのままさらに身体を捻転。

背後への迎撃を正面の橘への攻撃へと繋げ、疾走の勢いを止めずに斬撃を繰り出した。

橘は背後へ退きながら身体を霧へ形状変化。ブリュンヒルドが橘の身体をすり抜けるが、

「っ……！」

橘が表情を苦痛に歪めた。僅かにだが霧への変化が間に合わず、こちらの斬撃のダメージを負ったのだ。それでも刃更が床に着地したタイミングで、

「くっ――あああああああああああっ！」

橘はとっさに右の貫手を突き出してきた。迫る鋭い爪先の速度と軌道を、しかし刃更は見切っていた。首を横に捻る最小限の動きで橘の爪を避けると、カウンターでブリュンヒルドの柄の先端で橘の顎をかち上げた。脳を揺らされた橘が刹那に動きを止める。

その胴へ、刃更は逆薙ぎの斬撃を叩き込んだ――ただし、峰打ちだ。

直後、轟音が響いた。右にあった教室のドアへ、橘が背中から激突したのだ。そして

衝撃で外れたドアもろとも、橘は教室内へと吹っ飛んだ。床を転がった橘は、

「く……う、っ……！」

苦悶の表情を浮かべながら、それでも身体を起こし、

「っ……馬鹿にして……！」

敵意を込めた眼差しを向けてきた。その紅の瞳は、橘の戦意が微塵も失われていない事を刃更に教えてくる。その瞳を真っ向から受け止め、

……どういう事だ？

正体がヴァンパイアだった事を考えると、状況的に見て橘が今回の犯人である可能性は極めて高い。しかし、これまで自分の正体や力をひた隠しにしてきたからだろう。橘は明らかに実戦慣れしていなかった。そこまではまだ良いのだが、

……動きが正直すぎる。

橘の攻撃は、どれも感情任せで単純なものだった。確かにこれまで刃更と接していた橘は素直な性格の持ち主だったし、追い詰められれば攻撃は読みやすいものにはなる。

だが——橘の攻撃が直情的なのは戦闘開始直後からだった。今回の敵は、無関係な人達を巻き込む事を厭わない相手だ。それは駅での襲撃や、先程グラウンドに生み出された竜巻が証明している。そして、同時にこちらへ自分の正体を決して悟らせない周到で慎

重な相手でもあった。そんな犯人像と、眼の前の橘がどうしても一致しない。だから、

「……」

ある可能性に思い至った刃更は、橘の手首を摑んで強引に立たせると、そのまま黒板へと華奢な身体を押さえ付けた。そして、激しい戦闘中にはできなかった事を試す。

「ちょっと、何を……っ!?」

「――動くな。黙ってジッとしてろ」

慌てる橘に構わず、刃更は顔を近付けて、そして意識を集中させて橘を視た。

《無次元の執行》の完全消去を発動させる条件は、対象となる存在の根源ともいうべき〝天元〟を断つ事にある。以前から刃更はこれを視る事ができたが、澪や柚希とキスをして主従契約の関係を一層強化できたのか。これまでよりもかなり能力が上がっているようで、意識を集中すれば体内で顕在化している魔力の波動が視えるようになっており、

……やっぱり。

橘の中に、彼を操る他者の波動は視当たらない――橘は正気だ。しかし橘の波動は、刃更達のいるこの結界の波動と完全に異なっている。

つまり――犯人は橘じゃない。別の誰かだ。ならば橘が刃更を攻撃してきたのは、

「……橘。まさかお前、あの竜巻は俺の仕業だと――……？」

「何を今更っ。こんな結界を張れるクセに、よくもあんな酷い真似……っ」

黒板に押さえ付けられた状態で、橘は涙を浮かべながらキッとこちらを睨んだ。

「無関係な人達を巻き込んで、体育祭まで滅茶苦茶にしてっ。どうせ結界の中でボクを殺すんなら、あんな事せずに最初からこうしていれば良かったのに！」

その感情任せの叫びに、

……クソっ、やられた！

刃更は、自分達が完全に真犯人の手の平の上で踊らされていた事を悟った。刃更も橘も、互いの事を信じたかった。だからこそ裏切られたと思ったらもう許せなくて。その感情を利用され、必要のない戦いで折角できた友人との信頼を自分達の手で壊してしまった。

……っ、それでも……。

幸い、どちらかの命が失われるような最悪の事態は免れた。ならばこれ以上、犯人の思い通りにだけはさせられない。だから刃更はブリュンヒルドの具現化を解いた。

「な、何の真似……？」

予想外の行動に警戒を露わにした橘に、

「橘――今からお前の魔眼で俺の眼を視てくれ。それで俺が武器を消した理由が解る」

「えっ……？」

「知っての通り、俺達勇者の一族には魔法の耐性がある。意識を防御に集中すれば余程の事がない限り精神操作は効かない。だが、精神を操る魔眼は瞳を通して深層意識に干渉するものだ。俺の心の奥底を覗く事ぐらいならできるだろう」

そして、

「そうすれば――俺が戦う事を止めた理由が解る筈だ」

刃更は敢えて過去形で言った。「止める」ではなく「止めた」だ。それは、既にこちらには戦う意思がない事を言葉で先に伝えるものだった。しかし、

「……何を企んでいるの？　ヴァンパイアを相手にこの距離で武器を消すなんて。魔眼じゃ無理でも、吸血を行なえばボクにだってキミを支配する事はできるのに……」

橘は警戒を解かなかった。当然だ。今さら何を言っても信じて貰える筈はない。だが、

「確かめて欲しいんだ、お前に……」

それでも東城刃更は告げる。本当の事を――自分の中にある本当の気持ちを。それは、

「橘……俺は、お前と一緒に体育祭を成功させたかった。今でも、そう思ってる」

その言葉に、橘は僅かに身を震わせた。深層意識は己の発言の影響を受ける。橘の魔

眼ならば、刃更の瞳を視れば今の言葉が真実か嘘かはすぐに解るだろう。そして、

「……解った。でも嘘だったら、その時はボクの牙でキミの首を」

そう言って、橘はこちらの眼を覗き込んできた。

心を見通す紅の瞳が、ジッと刃更を見詰めて――やがて、

「……っ？」

その瞳がハッと驚きに見開かれた。そして、その瞳にゆっくりと浮かんだのは涙で、

「そん……な……、じゃあ……ボク達は……」

残酷な真実を知り、呆然の声を漏らした橘は力なく項垂れた。その頬を、大粒の涙が零れ落ちてゆく。だから刃更は、摑んでいた橘の両手を放した。すると橘はズルズルと床へ尻餅をつき、そして肩を震わせ始めて――そんな友人に対し、

「橘……」

東城刃更は、その名を呼ぶ事しかできない。お互いがすれ違っていた事は解った。

だけど――だからといって壊れてしまったものが元通りになる訳ではない。

慰めの言葉なんてある筈がなかった。それに、立ち止まっている訳にもいかないのだ。

橘が犯人ではなかった以上、敵はまだどこかに居るのだから。

……まさか俺を結界内に閉じ込めて、その隙にアイツらを狙ったりとか……？

思わず不安に駆られた刃更は、

「っ――――……!?」

とっさにある気配を感じ取り、ゾワッと一気に全身を緊張させた。そして、

「？　東城君……？」

何事かと泣き顔を上げた橘に、

「橘、お前はここに居てくれ……――解ったな!?」

叫ぶようにして告げると、東城刃更は弾かれたように教室を飛び出した。

東城刃更が向かったのは、主従契約の位置特定で感じた澪と柚希のいる場所だった。

――本来なら、結界内にいる刃更が、外にいる二人の気配を感じ取る事はできない。

だが、刃更達の主従関係はかなり強化されている。だから、或いは結界を超えて二人の気配を感じ取れるのではないか……そう思い、澪と柚希の位置特定を試してみたのだ。

すると二人の気配を感じ取る事ができたのである――ただし結界の外ではなく内側で。

……クソっ、やっぱりあの人が絡んでいたって事なのか……っ？

結界内で感じる二人の反応へと向かって走りながら、刃更は表情を苦いものにした。

容疑者は絞られていた。覚悟もしていた筈だ。だけど、それでも東城刃更は心のどこかで信じていた——あの人だけは違うと。しかし、

「あれは……」

階段を駆け下り、目的の場所が廊下の先に見えたところで東城刃更は目撃する。

それは鮮やかな白の色彩。トレードマークの白衣を身に纏い、彼女は自身が司る部屋の扉に右の手をかざしていた——その手に金色の輝きが宿っているのを見て、

「っ——長谷川先生っ！」

刃更は叫ぶように相手の名を呼んだ。その声は間違いなく彼女に届いた筈だ。だが、

「————」

長谷川千里は刃更の制止に構う事なく右手の先——扉の上に魔法陣を展開した。直後、キンという甲高い音と共に保健室の扉と壁全体が灰色に変化。途端に、澪と柚希の気配が消失する。それは特殊な結界を持つゾルギアの館に澪が囚われた時と同種の現象だ。

——そして、ようやく長谷川がこちらへと振り返った。

静かな瞳でこちらを見据え、いつもと変わらぬ壮絶な美しさを湛えて。だから、

「……先生、そこを退いて下さい」

対する刃更は足を止め、十mの距離をおいて対峙しながら長谷川へ言った。

刃更の中に、己の感情に都合の良いような希望的観測は既になかった。あるのはただ、眼の前にある現実を受け止め、それでも己の目的を果たそうとする意思だけだ。だから長谷川が魔法を唱えた事も、ブリュンヒルドを手にしている刃更を見ても驚かない理由も問わない。長谷川が、澪と柚希を何らかの結界内に閉じ込めた――それだけで充分だ。

「退いて下さい……中に澪と柚希がいる筈です。二人を返して貰います」

ブリュンヒルドの柄をきつく握り締めながら刃更は告げた。それは、退かなければ力尽くで通るという決意の表れだ。しかし、

「……悪いが、それはできないな」

対する長谷川が静かに首を横へと振った時――東城刃更は既に動いていた。

……どんな結界か知らないが……！

たとえどれだけ強力な結界だろうと、《無次元の執行》ならば消し去れる。

――無論、《無次元の執行》は相手の攻撃へのカウンターでしか発動させられない。

しかし現在、刃更は学校とグラウンドを覆う結界内に囚われている。ならば《無次元の執行》の発動条件はクリアしている。だとしたら、

……発動条件はそのままに、狙いを澪と柚希を閉じ込めている結界にすれば……っ。

強引な応用技だ。今までに、同時に二つの対象の天元を見極められた事はない。とても

じゃないが完全消去は不可能だろう。だが、完全消去は無理でも結界の一部を弾き散らす事くらいならばできる筈だ。そして結界に綻びを作れれば、そこから突破口を開く事ができるかもしれない。だから――東城刃更は行った。

「おおおおおおおおおおおおおおっ！」

廊下の床を蹴って、一瞬でスピードタイプの神速領域へと入った刃更は、そのまま長谷川にブリュンヒルドの峰打ちを横薙ぎに放った。対する長谷川は左手を軽く持ち上げた。長谷川の選択は回避ではなく防御だ。魔法の防護障壁か、それとも具現化した武器や防具で受け止めるのか――いずれにしても、激突の衝撃を支点にして衝撃を活かした加速は可能な筈。ブリュンヒルドの剣身が長谷川が上げた左腕へと吸い込まれ、

「なっ……!?」

加速の動作に入ろうとした刃更は、しかし驚愕と共にその場に立ち尽くした。

分厚く巨大なブリュンヒルドが、長谷川の華奢な左手によって摑まれていたからだ。こちらの加速はおろか、動きまで完全に封じてみせた長谷川は、

「――当てが外れたな」

そう言って右の手を刃更にかざしてくる。その手に眩い金色の輝きが生まれ、

「――下がれ、東城っ！」

しかし背後から放たれた突然の声に、

「っ――……!?」

東城刃更は、反射的な動きでブリュンヒルドの具現化を解いて飛び退った。

と同時、ドンッという大気を震わす轟音と共に長谷川が巨大な炎柱に包まれる。

激しい熱波を前方から浴びながら、それでもどうにか床に着地した刃更が背後を振り返ると、そこに立っていたのは刃更のよく知る人物――クラス担任の坂崎守だ。

「どうして先生が……？」

「ボサッとするな、逃げるんだ！」

突然の担任の登場に呆然となった刃更の腕を、坂崎はガッと摑むと、強引にこちらを連れて駆け出そうとする。しかし、刃更はとっさにその場へ踏み留まり、

「ま、待って下さい！　まだ澪と柚希が……」

そう言った瞬間、轟っと空気を巻く音と共に長谷川を包んでいた炎柱が薙ぎ払われた。

「――っ!?」

風ではない。坂崎の炎を薙ぎ払ったのは、多重立体構造の魔法陣によって強引に歪められた空間そのものだった。そしてあれだけの炎を受けても全くの無傷だった長谷川は、

「貴様……」

低い声を吐き出すと、その全身から金色のオーラを迸らせた。坂崎の攻撃が怒りに火を付けたのか、刃更を相手にしていた時には見せなかった激しい憎悪を向けてくる。

「っ……！」

発せられたのは、ゾルギアや成体化した万理亜以上の圧力だった。冗談ではない――こんなのはもう、S級云々の次元を超えている。思わず息を呑んだ刃更に坂崎が叫んだ。

「正面から戦っては絶対に彼女には勝てない。今は一旦引いて体勢を立て直すんだ！」

「……行かせると思うのか」

そう言って、長谷川がこちらへ右手を向けてくる。

だが長谷川が攻撃を放つより先に、今度は黒い霧が彼女を覆い尽くした。そして、

「――急いで、東城君っ！」

廊下の向こうからこちらを呼ぶ声がした。上に置いてきた筈の橘七緒だ。

橘の声のトーンと焦りを帯びた表情は、切実なまでに刃更へ撤退を促している。

――澪と柚希を置いて行く訳にはいかない。だが坂崎が言うように、何の作戦もなしに長谷川と戦っても、とてもじゃないが勝てるとは思えなかった。だから、

「クソっ……！」

刃更は悔しそうにギリっと歯を噛み締めると、坂崎や橘と共にその場から駆け出した。

9

一時的な撤退を選択した刃更達が駆け込んだのは、三階にある特別教室だった。
シンクやコンロ、引き出しなどが備え付けられた重厚な調理台が等間隔で並ぶその空間は、調理学校に引けを取らない広さと設備の家庭科実習室だ。
「――二人とも大丈夫か？」
ふう、と深呼吸を一つしてから坂崎が言った。
「はい……何とか」「……ボクも」
刃更は橘と共に頷きを返すと、
「でも、一体どうして先生が……？」
眼の前の坂崎に改めて問い掛けた。なぜ自分を助けてくれたのか――そして、なぜ異能の力を使えるのかという疑問を込めて。同様の疑問を持っていたのか、橘も坂崎の言葉を待っていた。すると坂崎はいつもの爽やかな笑みを浮かべて、
「実は、俺と迅は古い馴染みでな。魔界に行っている間、お前の事を見てやって欲しいとアイツから頼まれていたんだ」

「親父の……？　それじゃあ」

刃更は転入初日に坂崎と交わした会話を思い出す。すると坂崎は苦笑して、

「そうだ。初めて会った時にお前が訊いた、ウチの学校にいる迅の知り合いは俺だよ。勇者の一族って訳じゃないんだが、見ての通りちょっとした力を使う事ができる」

坂崎が発した言葉に、刃更は幾つかの可能性を思い浮かべた。勇者の一族が主に魔族と相対するために組織的に存在しているのに対し、橘のようなヴァンパイアなどの亜人種や、その他の幻獣種を相手に個人的に活動している存在として、フリーの退魔師や陰陽師、エクソシストなどがいる。恐らく坂崎は、そういった類いの存在なのだろう。

「そうだったんですか……」

「黙っていて悪かったな。ただ、できれば俺の素性は明かさずにいたかったんだ。その方が裏で色々と動けるし、いざという時に助けてもやれるからな。本当は成瀬を巡る魔族や勇者の一族との戦いにも手を貸してやりたかったんだが……」

そこで坂崎は表情を真剣なものにして、

「悪いが、俺はこの学校の教師なんだ。東城だけじゃなく、他の奴らも守ってやらなくちゃならない。そしてこの学校は現在、関係者全員を長谷川に人質に取られているような状態でな。下手に動いて長谷川が俺の正体に気付きでもしたら、どれだけの数の人間が盾にさ

れてしまうか解らなかった――すまない」
「いえそんな、さっき助けて貰っただけで充分です……ありがとうございます」
澪に関する魔族や勇者の一族との問題は、刃更らが自分達の手で解決しなければならない事だ。他人の手を借りる訳にはいかない。しかし、
……また親父に助けられちまったな。
柚希が《里》で処罰されないように手を回してくれた時もそうだったが、恐らく色々と手を打ってくれていたのだろう。頼りになる父親に改めて心強さを得ていると、
「しかし東城、お前には言っておいた筈だろう――長谷川には気を付けるようにと」
「……すみません」
窘める口調で坂崎に言われ、刃更は頭を下げた。
「あの、坂崎先生……長谷川先生って、一体何なんですか？」
横から怖ず怖ずと問い掛けた橘に、坂崎は首を横に振って、
「それは俺にも解らない……ただお前達も見たように、凄まじい力を持っている。それでも、これまでは大きな問題を起こす事はなかったんだ。面倒事に巻き込まれないように、自分に都合の良いように周囲の意識を自分から逸らしてはいたがな。だから、下手に刺激せずに様子を見ていたんだが……最近になって、急にこれまでと状況が変わってな」

「じゃあ、ひょっとして堂上先輩の様子がおかしかったのも……？」
坂崎が「ああ」と頷くと、訊ねた橘は「そんな……」と呆然の声を漏らした。
無理もない。橘に生徒会に入る事を勧めたのは、長谷川という話だった。その彼女が、体育祭を滅茶苦茶にしようとしていたと聞かされれば、ショックを受けて当然だろう。
「……坂崎先生。先生が張った結界は、どれくらい保つと思いますか？」
「確実なところは言えないが、一つ五分と考えて、合計三十分ってところだろうな」
「そうですか――なら」
と、刃更はいきなりブリュンヒルドを横薙ぎに払った。全ての予備動作を排した、完全な不意打ちだ。普通なら間違いなく避けられない。現に、
「っ――と、東城君っ!?」
橘はその場で、驚愕の声を漏らす事しかできずにいる。
しかし――坂崎は違った。刃更の斬撃を後方へ跳んで躱すと、ふわりと床に着地して、
「東城……色々な事があって、お前が疑心暗鬼になってしまうのは解るが、見ての通り俺は彼女に操られてなどいない」
「ええ……先生は間違いなく、自分の意思で俺達をここへ連れてきています」
だが、と刃更はブリュンヒルドの切っ先を坂崎へ向けて言い放つ。

「その事が、アンタが敵であるという何よりの証拠だ」
「ど、どういう事……？」
意味が解らず困惑する橘に、刃更は「ああ」と言って、
「俺にこの学校へ転入するように勧めたのは親父でさ、この学校に知り合いがいると言っていた。坂崎先生は、それが自分だって言っていたが……それはあり得ないんだよ」
何故ならば、
「長谷川先生の驚異的な圧力……あれは間違いなく坂崎先生を遥かに上回るものだった。でも坂崎先生は、そんなあの人の力を以前から認識していたと言った。もし先生が本当に親父の知り合いなら、普通に考えれば俺が転入しようとするのを止める筈だろう」
「あ……」
橘がハッとなったように声を漏らすと、
「言っただろう。確かに力は凄まじいが、刺激さえしなければ長谷川は大した脅威ではなかったんだ。それにお前がこの学校へ来たのは、成瀬を守るためで――」
「下手すれば手に負えないような相手は充分な脅威だろう。普通に考えれば、俺がこの学校へ転入するんじゃなく、澪を俺の通っていた学校へ転入させる事を勧める筈だ」
坂崎の反論を遮って、刃更は言葉を続ける。

「それに親父は、滞達の事を少し前から調べていたと言っていた。だとしたら、その過程で間違いなく長谷川先生の存在には気が付いていた筈なんだ」

「現役の野中や滝川が、長谷川の正体には気が付けなかったんだ……お前と同じで、勇者の一族を離れて久しい迅に気付ける訳がないだろう」

「だとしたら、アンタが親父に長谷川先生の事を警告しないのは余計におかしい。それに、五年やそこらのブランク程度でウチの親父の勘が鈍るなんて事はまずないな。俺だって、相手の力が大体どれくらいかは読める。アンタも相当な実力の持ち主だろうけど」

そう言って、刃更は坂崎を見据えて、

「悪いが――アンタが親父より上だとは思えない。アンタが長谷川先生の事に気が付けた以上、間違いなく親父も気が付いていた筈だ。それでも親父は、長谷川先生があれだけの力を持っているのに、その事を俺達には一切忠告しなかった……何故か？」

そんなのは決まっている。

「忠告する必要がなかったからさ。長谷川先生の力を知りながら、それが俺達の脅威には決してならない事を親父は知っていた」

長谷川の凄まじい力が、逆に真実を物語っている。つまり、

「親父の知り合いはアンタじゃない――長谷川先生の方だ」

その確信を得られたのは、皮肉にも敵である坂崎に助けられたと勘違いし、この家庭科室へと連れて来られてからだったが。しかし、そうなると長谷川が澪と柚希を保健室に閉じ込めたのは、きっと何か意味がある筈。

二人はきっと大丈夫だ――だから、後は坂崎を倒せば全てが終わる。

……三十分か。

敵の言葉にどれ程の信憑性があるかは不明だが、もし坂崎の言っていた事が本当なら、待っているだけでは長谷川との合流には三十分程は掛かる事になる。長谷川と合流できれば難なく倒せるだろうが、当然坂崎もその事は理解しているだろう。だとしたら、

……え？

そこでふと、東城刃更は思考を遮られた。坂崎が、このタイミングでいつものように爽やかな笑みを浮かべてこちらを見たからだ。その視線は、夜の駅での襲撃以降、刃更が学校にいる時に何度となく感じていたもので、

「やれやれ、仕方ないな……」

坂崎が笑顔のままそう言った瞬間、

「がっ――……っ!?」

不可視の衝撃を腹に食らい、刃更は吹っ飛ばされた。勢い良く背中から黒板へと叩き

付けられ、刃更の肺が動き方を忘れる。激突の衝撃を殺しきれず身体が宙へと弾む中、

「っ――東城く」

橘の上げかけた悲鳴のような声が不意に途切れた。刃更と同種の衝撃を真上から受けたのだ。一撃で意識を刈り取られたのだろう。床へ叩き付けられた橘はピクリとも動かない。

その光景を、全身を走る衝撃に呼吸ができず、視界を霞ませながら見た刃更は、

「――――っ！」

辛うじて倒れる事なく足から着地――床を蹴って一気に前へ出た。

橘が気絶してしまった以上、この家庭科室を脱出して、坂崎の結界を破壊しながら長谷川と合流するという選択は不可能だ。スピードタイプの速さを活かして橘を抱えて逃げても、ここまでに結界が幾つも張られているため、あっという間に追い付かれてしまう。

あの結界は長谷川に対する時間稼ぎだけでなく、刃更達を逃がさないための障壁でもあるのだろう。逃げられない……ならば戦うしかない。

「っ――っっっぉぉおおお

そして恐らく後方からも来ない。既にこちらは坂崎を正面に捉えている。もし背後から衝撃を食らえば、こちらはそれも前へと出る勢いに変えるだけだ。その予想は的中し、衝撃は真上から来た。しかし、刃更はこれを加速を入れる事で回避。そのまま一気に坂崎との距離を詰め、放ったのは大上段からの斬り下ろしだ。坂崎はこの攻撃を避けられない筈だった――もし避ければ、刃更はそのままブリュンヒルドを床へと叩き付ける。そうなれば家庭科室の床が破壊され、下の二階フロアへと通じる穴が生じるだろう。長谷川との合流を阻止したい坂崎にとって、それは最も避けたい事態の筈だ。だから坂崎の取る動作から回避の可能性を捨て、防御が来ようと強引に押し切るつもりで力任せの斬撃を放った。

「――成る程」

しかし坂崎は笑みを崩す事なく、不可視の衝撃を刃更の斬撃にぶつけてくる。しかし刃更の斬撃の威力が上回り、ギャンッという甲高い音と共に坂崎の衝撃波が弾けた。刃更はそのままブリュンヒルドを振り下ろし――しかし衝撃と激突した事で斬撃に生じた僅かなタイムラグの隙に、坂崎にバックステップで距離を取られる。しかし、

……させるかっ！

刃更はすぐにその後を追った。坂崎の衝撃波はこちらの間合いの外から攻撃が行なえる。だがゼロ距離近くまで接近できれば、自分まで巻き込まれてしまわないよう衝撃波の使

用を控える筈だ。武器を使用していないため、恐らく坂崎は魔力タイプ――ならば距離を詰めさえすれば、スピードタイプの神速剣術使いのこちらが手数で押し切れる。

刃更が勝つには、とにかく近接戦闘に持ち込むしかない――だからそうした。

「はあああああああああああああああああああっ！」

一気にブリュンヒルドが届く間合いへと踏み込み、そこから連続斬りへと繋げてゆく。

下手に回避をすれば刃更に床を破壊されかねないため、坂崎はその場で障壁を生み出し、こちらが縦横無尽に繰り出す斬撃を防ぎながら、

「困ったな……彼女が来てしまうから、こちらは余り時間を掛けられないんだが」

やれやれと笑顔のまま言った瞬間、坂崎は衝撃波を生み出した。

ただし――刃更にではなく、離れた場所で床に倒れている橘に対して。

真上からの攻撃だ。床に穴を開ける訳にはいかないため手加減もされている。ヴァンパイアの耐久力や回復力を持つ橘ならば、深刻なダメージにはならないだろう。だが、

「っ……!?」

それでも意識を失い無抵抗でいる友人を攻撃された事に、刃更は動揺を得て思わず攻撃の手を緩めた。その隙に坂崎は一歩後ろへ下がると、こちらへ右の手の平をかざして、

「ははは――東城は優しいなあ」

そう言われた直後、刃更の肩から上を坂崎の放った衝撃が直撃した。
「がっ、あ……っ！」
仰け反るようにして宙を舞った刃更に、防戦一方だった鬱憤を晴らすかのように追い打ちが来た。壁際のガラス棚に吹っ飛ばされた刃更へ、無数の衝撃波が叩き込まれる。
「がああああああああああああああああっ!?」
衝撃による打撃が続く中、破砕したガラスに全身を切り刻まれる。それでも、次々に襲い来る衝撃波の一つをブリュンヒルドで斬り裂くと、刃更は壁際から脱出。しかし、
「――――っ!?」
再び坂崎へと向かおうとしていた刃更は、とっさに息を呑んで動きを止めた。ダメージのせいではない。坂崎のすぐ脇に――真横の宙に一人の少女が浮いていたからだ。
「っ……胡桃！」
思わずその名を叫んだが、胡桃は反応しなかった。代わりに坂崎が口を開く。
「大丈夫だ、気を失っているだけだよ――何せ大事な人質だからな。ただし、このまま気を失っているだけか、それとも命まで失ってしまうかは東城、お前次第だ」
さあ、と一層爽やかに笑って、
「すまないが時間がないんだ――武器を捨ててくれないか？」

「……っ」

刃更はギリっと歯を噛み締めたが、仕方なく坂崎の言葉に従う事にした。胡桃の命には代えられないからだ。しかし――断じて諦めた訳ではない。

……まだだ……っ！

坂崎の狙いは刃更だ。しかも、狙いは恐らく《無次元の執行》。だとしたら、そう簡単に殺す訳にはいかないだろう。反撃のチャンスは必ずくる。そう思いながらブリュンヒルドを宙に放ろうとした。その時だった――不意にヒュンと風が鳴ったのを刃更は聞いた。

「――――」

見れば、坂崎が人差し指と中指を立てた右手を振り上げていて。

――直後、ガシャンという金属音が生じると、刃更の身体が右へと傾いた。

とっさにたたらを踏んだ刃更は、一体何が起きたのかと思い、そして見た。

ブリュンヒルドが床に転がっていた――装甲化していた右腕もろとも。

……え？

思考の静止は刹那。切断された腕の付け根――肩口から大量に鮮血が噴き出した。

痛みはなかった。ただひたすらに血液が溢れ出て、そして急速に意識が遠のいてゆく。

……っ、これは……っ！

刃更は激しい焦りを得た。この意識の混濁は大量失血だけが原因ではない。恐らくこちらの重傷による意識の隙を突いて、坂崎が精神操作を仕掛けてきたのだ。

何としても耐えなければ――そう思うのに、一気に身体の力が抜けていって。

気が付けば眼の前には家庭科室の床があった。そして瞬く間に視界が真っ暗になり、

……クソ……っ。

このまま負ける訳にはいかない。刃更は残った左手で必死にブリュンヒルドを摑もうとした。だが暗闇に包まれた視界の中、手探りでは床を掻く事しかできなくて。

やがて、それすらもできなくなった。そして、いよいよ意識を手放しかけたその時、

……誰、だ……？

東城刃更は、最後にふと誰かの声を聞いたような気がした。

完全に意識が闇に包まれたのは――その直後の事だった。

10

坂崎は床の刃更が意識を喪失し、戦闘不能になったのを確認した。

「さて、と……急がなくては」

刃更と戦っている間に、結界は二つまで突破されていた。程なくして彼女はここへやって来るだろう。その前に、何としてもこの場を離れなければならない。

「――ただ、その前に後始末はしないとな」

そう言って、坂崎は気絶している胡桃と橘に視線を向けた。こうして刃更を手に入れた以上、もはや人質に用はない。不要な手荷物を持てば移動速度は落ちるし、空間を渡る際の痕跡もそれだけ残りやすくなる。足がつかないように、心配事の芽はきちんと潰しておくべきだろう。だから、坂崎は二人へ向かって右手をかざし――視界の端に捉えていた、床の刃更の姿が掻き消えたのはその瞬間だった。

「なっ……――ぐあああああああああああああああああぁぁぁっ!?」

とっさに振り向き、発した驚愕の声が絶叫へと変わった。正面からの見えない衝撃に吹き飛ばされたからだ。そして、連続した轟音が生じた。宙を弾丸のように飛ばされた坂崎の身体が家庭科室の壁を突き抜け、横に並んでいる教室を次々に突き破った音だった。

硬い黒板、教卓、並ぶ机と椅子、ロッカーを巻き込み、無数の破砕音を響かせながら、吹き飛ばされた坂崎の身体が五つの教室を薙ぎ払い――最後に技術実習室の巨大な工作機械へ背中から激突してようやく止まった。そして、

「ぐっ……う、……は……っ？」

苦悶の声と共に、坂崎は大量の血を吐き出した。その量が、複数の内臓が破裂した事を否応なく教えてくる。肋骨に至っては骨折を通り越して粉々だろう。

……い、一体何が……っ？

激痛に視界が歪む中、坂崎はどうにか意識を集中した。すると金色の光が坂崎を包み、肉体の傷が急速に修復されてゆく。それでもすぐには動けず、坂崎が顔だけを上げ、

「っ……!?」

自分が吹き飛ばされてきた方向に、揺らめく緑のオーラを見て息を呑んだ。薄暗い結界の中、それは鮮やかな光の粒子を放ちながら、ゆっくりと坂崎の方へとやって来ていた。東城刃更だった。坂崎の激突によって生じた教室の残骸――その瓦礫や破片を踏みしめながら、確かな足取りで一歩ずつこちらへ向かってくる。それを目の当たりにした坂崎は、思わず眼を見張った。刃更の出血が止まっていた――それどころか、

……切断した右腕が……っ!?

斬り落とした筈の刃更の右腕が元通りになり、ブリュンヒルドを握り締めている。

いや――正確には元通りという訳ではなかった。これまでは、ブリュンヒルドを具現化した際に行なわれていた装甲化は右腕だけ。しかし今の刃更は、胴や背中にまで装甲化が及んでいた――あたかも侵食されているかのように。

そして、

『――――――』

ギラリと刃更の眼がこちらへと向けられた。まるで獲物を捉えたかのように、普段と異なる色の輝きを宿した獣のような瞳が坂崎を見据えてくる。それを目にした瞬間、

「っ――ああああああああああああああああっ！」

回復を終えた坂崎守は、湧き上がる恐怖を振り払うように叫びを放った。

理性を恐怖という名の本能が上回り、生け捕りにしなければならない事を忘れて無数の金の光球を宙へ生み出すと、刃更へと向かって一気に解き放つ。光の尾を引きながら、まるで流星のように宙を水平に駆け抜けた光球が刃更へと迫り、

「――――――っ!?」

斬撃の跡だけを宙に残して放たれた剣閃が、その全てを完全に消滅させた。立て続けに生じた甲高い鳴動音が報せるのは、間違いなく《無次元の執行（ハニシングシフト）》の発動だ。しかし、

……っ、連続で発動させた……!?

馬鹿な。そんな事がある訳がない。あの技の完全消去の成功条件を考えれば、連続で繰り出す事などまず不可能の筈だ。動揺を得た坂崎が、思考に刹那の空白を生じさせる。

すると光の粒子を残して刃更の姿が掻き消えたと思った瞬間、

「っ――――!?」

反射的に身を捻ったのが坂崎の命を救った。坂崎の頭があった場所を、振り下ろされたブリュンヒルドの剣閃が抜けていったのだ。しかし完全には避けきれず、途端に坂崎の左耳が聴力を失った。とっさに耳を斬り落とされたという思いが頭をかすめ、

……違うっ。

耳殻を斬り落とされただけで聴覚まで失われる筈がない。回避動作を取りながら、坂崎は左側頭部に触れた。痛みはなく、出血もなかった。だが、坂崎の左耳は確かに聴力を失っていた。まるで――存在そのものが消え失せてしまったかのように。

「まさか、カウンター以外でも……っ!?」

とっさに刃更と距離を取りながら、坂崎守はかつてない驚愕を得る。完全消去の連発に加え、自らの攻撃に《無次元の執行（バニシングシフト）》を使用した？　あり得ない。《無次元の執行（バニシングシフト）》の発動に必要な条件は、その強大すぎる力の制限でもある筈だ。

それを無視するなど、

「これでは、まるで……ぐっ、あぁあぁぁぁあぁっ!?」

先回りをされた直後――放たれた横薙ぎに、今度は右の脇腹が持っていかれた。

激痛によろめいた坂崎は、次の瞬間ガッと喉笛の辺りを摑まれ、

「っ……か……、はぁ……っ!?」

首の骨が軋む程の力で身体を持ち上げられ、呼吸困難に陥りながら坂崎は見る。

緑の燐光を放ちながら、ブリュンヒルドを手に凄惨な笑みを浮かべている刃更の顔を。

――とっさに坂崎は制止の言葉を放とうとした。

何でも良い。デタラメでも良かった。

とにかく刃更を止められる言葉を何か言おうとした。しかし、坂崎の首を摑んで今にもへし折りそうな刃更の握力が、あらゆる言葉を声にする事を許さない。そして、

『――――――』

刃更がスッと眼を細め、ブリュンヒルドの柄を握る手に力を込めると――そのまま坂崎を存在ごと消し去る《無次元の執行（バニシングシフト）》を繰り出そうとし、

「――そこまでだ」

不意に静かな声が響いた瞬間――金色の鎖が刃更に巻き付き、全ての動きを封じた。

坂崎守の命が助かったのは、ほとんど紙一重と言って良いタイミングだった。

「っ……はぁ……はぁ……、この俺が、こんな……っ」

呆然と床に両膝を突き、憎悪を込めた呟きと共に拘束された宙の刃更を睨むと、

「――無様だな、オルニス」

酷薄な声に本当の名を呼ばれた。見れば、彼女がゆっくりとこちらへと歩いてくる。

「どうやってここに……」

「何を驚いている。私を立ち入らせないように張っていた結界なら、お前が暴走させた刃更の無次元シフトの乱射を受けてとっくに消し飛んでいるぞ」

そう言って、長谷川千里はフッと冷たく笑った。

「勇者の一族が、能力を暴走させる可能性のある刃更をあっさりと里の外へ追放する決定をしたのは何故だと思っている？　この世界に堕ちて邪精霊にその身と魂を窶したとはいえ、ブリュンヒルドはかつて主神のために多くの魂を狩ってきた最強の戦乙女だぞ」

「っ……まさか、封印されてなおここまでの力を残していたとは」

恐らく大地に突き刺さっていた期間は封印していた邪精霊と、その後は使用者となった刃更と密かに霊子的な融合を果たす事で、ブリュンヒルドは剣という器の中で強大な力と自我の一部を維持していたのだろう。右腕の再生から始まった刃更の一連の暴走は、ブリュンヒルドが己の存在維持に必要な刃更から斬り離された事で、形振り構わずに宿主へと戻り、そのまま自分を殺そうとした坂崎に本能的な殺意をぶつけてきたに違いない。

……だが。

暴走したのは、ブリュンヒルドが宿主である刃更の意識を押しのけて彼の肉体に顕在化

したからなのだろうが、かといって刃更の肉体の中に入った以上、行なえる事は宿主にできる事に限られる。何故なら、《無次元の執行（バニシングシフト）》はブリュンヒルドの技ではないのだ。

つまり――《無次元の執行（バニシングシフト）》の乱射や、カウンターにしか使用できない筈の制限の無視、そして坂崎が知覚できなかった神速も、全て刃更自身が持つ潜在能力という事になる。

先程からずっと傷の回復を密かに行なっているのだが、一向に修復されない。《無次元の執行（バニシングシフト）》で存在の根源を断たれた事で、その部分が最初から存在しなかった事になっているのだ。改めてその力の恐（おそ）ろしさと凄（すさ）まじさを坂崎が想（おも）っていると、

「しかし……成瀬や野中ではなく、まさか野中の妹を人質（ひとじち）に選ぶとはな」

「……成瀬や野中を狙（ねら）えば、間違いなく貴女（あなた）に読まれると思いましたから」

長谷川の言葉に、坂崎は答えた。

「現に、貴女があの二人を保健室に入れて二重結界で閉じ込めたのは、私が手出し出来ないように保護するのが目的だったのでしょう」

だから、坂崎は逆にそれを利用したのだ。長谷川が犯人だと思ってしまっていた刃更は、その現場を目撃（もくげき）してさらに疑心暗鬼（ぎしんあんき）を深めていた。そこへ刃更に加勢する形で介入（かいにゅう）し、さらに迅の名前を出せば、刃更を油断させられると思ったのである。

「成る程……そうやって無次元シフトを手に入れるために、橘や堂上の感情や存在を利用

し、私に疑いを向けさせようと私が堂上の人格を変化させたなどとデタラメを吹き込んだ訳か。それで刃更を揺さぶり、同時に私の事も出し抜こうとしていたようだが……逆に刃更にその事を見破られ、挙げ句の果てには足まで掬われた訳だ」

その言葉に苦々しげに表情を歪ませた坂崎に、

「――しかし解せないな。私の家から帰る途中の刃更を襲ったのは何故だ？　あんな真似をすれば、コイツを警戒させるだけだろう。無次元シフトを手に入れるなら、何もせず油断させておいた方が良かった筈だ。何故わざわざ成功率を下げるような真似をした？」

その問い掛けに、坂崎は――オルニスは言った。

「……そんな事は決まっているでしょう、アフレイア様」

長谷川の本当の名を呼び、そして告げる。

「東城刃更が――身の程知らずにも、貴女の寵愛を受けたからです」

長谷川千里は、オルニスの憎悪の篭もった声を聞いた。

「保健室や貴女のマンションには不可視の結界が張られています。中の様子を視る事はできない……それでも貴女の家から出てきた東城を視れば、何があったか見当はつきます」

何故です、と怒りに声を震わせながらオルニスが言った。
「どうして貴女のようなお方が、あんな真似を……っ」
「成る程……だから無次元シフトを強引に取り出し、コイツを殺そうとしたのか」
と長谷川。スッと眼を細めて告げる。
「――本物の坂崎守を殺した時のように」
するとオルニスは口の端を吊り上げた――その途端、坂崎守から本来の姿へと戻り、
「ええ。一体それの何がいけないというのです？　たかが人間如きが、己の下賤な身の程も弁えずに貴女へ近付いた……そんな薄汚い虫ケラなど駆逐して当然でしょう」
浮かべた笑みを、はっきりと狂気を滲ませた凄惨なものへと変えながら、
「貴女の至高の美しさは、何者も冒してはならない絶対の聖域です。たとえ力を封印されてこの世界へ来ても、その事実が変わる事はありません。それを守るのが、この世界で貴女を見詰める役目を仰せつかった私の使命です」
オルニスの言葉に、長谷川千里は心の中で辟易した。
――かつて長谷川は、刃更に嫉妬という感情の厄介さについて説いた事があった。
単純な反面、こじれると厄介だと。それは何も推測や一般論ではない。長谷川自身も、オルニスという厄介な存在を抱えていたからだ。それでも、これまで長谷川はオルニスを

放置してきた。こちらを監視するため、本物の坂崎守を殺して成り代わった時も、敢えてその事実に眼を瞑った。人間の坂崎守も、裏で女生徒に対して色々と汚い事をやっていた男だ。遠からず、問題をこじらせて背後から刺されて命を落としていただろう。

そして長谷川は、それ以降オルニスが男子生徒や男性教諭に危害を加えないよう、周囲の意識を自分から逸らして言い寄られないようにしていた。たまにアルコールが入るなどして精神が解放状態にある男からは、言い寄られてしまう事はあったが。

――そんな長谷川にとって、刃更だけは例外だった。本当なら遠くから視ているだけのつもりだったというのに、迅の計らいで刃更もこの学校へ通う事になって。

そして――顔を合わせてしまったらもう駄目だった。何せ、刃更が生まれたばかりの赤ん坊だった時以来の再会だ。だから立派に成長した姿を直接目の当たりにしたら、一気に愛しさが込み上げてしまって。そして澪や柚希、万理亜にも言えない相談を自分にしてくれるようになると、いよいよ感情が抑えられなくなってしまった。それこそ自宅の風呂場で、胸でたっぷりと愛してあげてしまう程に。だが、昔から長谷川に対して狂信的な愛情を抱いていたオルニスには、到底我慢ならない事だったのだろう。それで、発作的に刃更を襲ってしまったという訳だ。オルニスは刃更を据わった眼で見詰めながら、

「貴女を汚す者を私は許さない。人間などという我々の劣化種族は勿論――」

そして、決定的な一言を口にした。

「――そこの忌まわしい、穢れた『三種の混血』にも」

その言葉を耳にした瞬間、

「――――――」

長谷川千里は一瞬で感情を爆発させ、己の力を全身から解放した。

眩いまでの金色のオーラが殺気となって溢れ出す。髪と瞳の色がそれぞれ金と蒼へと変貌を遂げ、かつてアフレイアと呼ばれていた頃の姿へと戻り、

「口を慎めオルニス……その子の、刃更の中には、『彼女』の血も流れている。あの人の名誉と誇りに賭けて、刃更の存在を貶める事は誰であろうと絶対に許さん」

「っ……それを言うなら、この少年のせいで『彼女』は死んだんですよ？」

長谷川の殺気に気圧されながら、それでもオルニスは反駁した。その表情は恐怖に引き攣りながらも、長谷川の本当の姿を再び見られた事に確かな喜びを得ていた。そして、

「貴女にとっても、東城は仇のようなものでしょう。それなのにコイツのために自らの立場を擲ち、力を封印されてまでこの世界へ来て……そして何度となく守っている」

知っていますよ、とオルニス。

「幼馴染達との戦いの前――貴女は焼肉屋の帰りに東城を抱き締め、額にキスをする事で加護を与えた。だからこそ戦闘の終盤、東城は野中の睡眠薬を嗅がされても深い眠りを得ずに済んで、結果として彼女の危機に間に合う事ができた」

そして、

「先日の高位魔族との戦いの前には、突き指をした東城に巻いた包帯を聖守護符（アミュレット）として与え、決して解かないように言い含めましたね。だからこそ、東城は成体化したサキュバスやゾルギアからあれだけの致命傷を受けても、ダメージが後に残らずに済んでいる」

長谷川が肯定の沈黙を返すと、オルニスが訊ねてくる。

「何故です？　どうしてそこまで、この少年に拘るのですか……？」

その問いに、長谷川千里は指先でそっとイヤリングに触れながら、

「この子が――『彼女』が生きていた証だからだ」

刃更を見詰めながら口にしたのは、決して譲れぬ想い――長谷川千里の真実だ。

年の離れた姉のように慕っていた大切な女性が、命を賭して産んだ子供。

その子供を守るためならば、長谷川千里は何でもすると決めている。

東城刃更が生まれた十五年前のあの日に、そう心に誓ったのだ。すると、

「そうですか――ならば、仕方がありませんね」
オルニスはそう言い放った。その途端、宙の刃更を取り囲む輝きが生まれる。
それは魔法陣と似て非なるもの――長谷川と同じ、聖なる金色の光を発していた。
「東城がいる限り貴女は犠牲になり続ける……貴女を解放するには東城を殺すしかない」
とオルニス。
「これは、彼の無次元シフトの力を取り出すために構築した私の聖法陣です。ブリュンヒルドの暴走は予想外でしたが、貴女が拘束してくれている今の東城ならば問題はない。貴女の傍で奉仕する事を目的として生きてきた私は、貴女の力の性質を熟知し、支えとなれる方法を模索し続けてきました。だから――力の反発や衝突が起きる事もない」
その言葉に嘘はなかった。長谷川の拘束術の上から刃更に金色の光が流れ込んでゆく。
「成る程……だが、私がそんな真似を黙って見ているとでも思っているのか？」
「東城の無次元シフトは、我々の肉体を霊子レベルで消し去れるような能力です。どの道、この事が『あの方達』に知られたら、コイツは生きてはいられませんよ」
それならば、とオルニス。
「コイツの無次元シフトの力は私が手に入れます。この力を手土産に戻れば、私は貴女を再びあの高みへと戻して差し上げられる。貴女がいるべき場所はここではありません」

さあ、

「私と共に神界へ帰りましょう――アフレイア様」

手を差し伸べられた長谷川は、しばしの沈黙の後に問い掛けた。激怒を孕んだ声で、

「……私が刃更を見殺しにして、お前と一緒に帰るとでも？」

「お怒りになるのは自由ですが、以前の貴女ならばともかく、今の貴女に私を止める事はできませんよ。貴女の力は現在、防護系を除いて『あの方達』にほとんど封印されている。それこそが、貴女がこの世界へ来るための条件だったんですから」

だから、とオルニスは言葉を続けようとして――その先を長谷川は奪った。

右手の無造作な一振りで、オルニスの作り出した聖法陣を粉々に砕く事で。

「っ――――!?」

愕然となったオルニスに、長谷川は告げる。

「十五年前……全てを捨てる決意をした時、確かに私は多くの批判を受けた。他の『十神』達からは特に。だが――それでも私の味方になってくれた奴は少しだが居てな」

その結果、長谷川が得たのは『抜け道』だ。

「確かに私は、力の大半を封印されている。しかし、たった一つだけ――『ある目的』のためならば、私は以前と同じ力を使う事ができるんだよ」

それが何だか解るか？

「――刃更を守るために必要な時だけ、私の封印は限定的に解除されるのさ」

そう宣言し、長谷川はオルニスへと向かって歩を進めた。

ようやく自分に死が迫っている事を理解したのだろう。途端にオルニスは狼狽えて、

「と、とんだ戯れですね、アフレイア様……貴女は、私を消し去ろうとしていた東城を止めたじゃないですか。本当に東城を守りたいなら、彼が私を消すのを黙って見て――」

「――私が刃更を止めたのは、別にお前を助けるためじゃない」

と、長谷川は冷たく笑った。そして――真実を教える。

「あのままではお前はおろか、私の張った結界まで消去されてしまいそうだったんでな。そんな状況で刃更がお前を殺せば、お前の言うように連中に刃更の能力を気付かれてしまう可能性がある。それだけは何としても避けたかった」

「アフレイア様の結界……？　そんな、いつの間に……」

「気が付かなかったのも無理はない……何せ、他の十神に全力を使ってもバレないよう、特別に編み出したものだからな」

「う、嘘です……もし今言った事が本当なら、滝川や幼馴染達や、それこそゾルギアとの戦いの時にもその結界を張り、東城を守るために十神の力を振るっていた筈だ！」

「勿論、いざという時には助けに入れる準備はしていたとも。だが成瀬の力を狙う魔族とのいざこざや、野中ら幼馴染との因縁は、刃更が自分で乗り越えなければいけない事だからな。過保護になるのもいけないと、手を出すのを我慢していただけの事だ」

だが――お前は違う。

「お前のように神族が絡んでくるというなら、それは成瀬も野中も関係ない。私の手で潰すべき因縁だ。他の誰にもやらせはしない」

そして、と長谷川。

「刃更を殺そうとしただけでも許せないというのに……お前は私を利用した挙げ句、刃更が私を疑うように仕向けてくれたな。お陰でコイツに、酷く冷たい眼で見られてしまったぞ。一体どうしてくれるんだ……なあオルニス？」

そう言って、長谷川は右の手に金色の輝きを集中させた。幾重にも聖法陣を連ならせ、

「刃更の代わりに、私がお前を塵一つ残さず消し去ってやろう」

そしてその手をオルニスへとかざすと、

「アフレイア様っ……わ、私は貴女のために――」

そう口走った言葉が、彼の最後の言葉になった。

長谷川の解き放った力が、宣言通りオルニスを跡形もなく消し飛ばしたからだ。そして、

「……まさかとは思うが、今のが命乞いだったなどとは言わないだろうな？」

フンと鼻を鳴らして、長谷川千里は言った。

「私のために刃更を害そうとしたなどと――殺してくれとしか聞こえなかったぞ」

11

一撃の下にオルニスを葬り去った後――長谷川千里にはやるべき事があった。

「さて……」

そう言って長谷川が相対したのは、拘束された状態で宙に浮かんでいる刃更だ。

そして右腕だけでなく、胴まで装甲化してしまうほど刃更へ干渉している魔剣に、

「右腕を再生する手間を省いてくれた事は感謝するが、生憎とコイツをお前にくれてやる訳にはいかない。お前を害そうとした愚か者の魂はくれてやる――それで我慢しろ」

そう言ってブリュンヒルドに手で触れると、

『――――』

鋼を打ち鳴らすような鳴動音と共に、具現化されていたブリュンヒルドが虚空に溶けるように消失し、装甲化していた刃更の右腕と胴が元に戻った。そして長谷川が拘束を解く

と、刃更はゆっくり宙を滑るようにして床へと降りてきた。その身体を受け止めると、

「無事で良かったよ……刃更」

長谷川は一緒に床へ腰を下ろし、愛しい青年をギュッと抱き締めた。

――本当は、全てを話してやりたかった。

自分の正体も、刃更の出自も、オルニスが口にした『三種の混血』の意味も。

そして――長谷川千里が、東城刃更の事をどれだけ愛おしく想っているのかも。だが、

「すまないな……今はまだ、お前に私の事を教えてやる訳にはいかないんだ」

一息、

「そして――二人いるお前の母親の事も」

父親である迅がまだ伝えていないのだ。長谷川がそれを教える訳にはいかない。

……全く、損な役回りだな。

そっと刃更の頬を撫でながら、長谷川千里は苦笑した。まだ自分の事を教えてやれない以上、今回の件に長谷川は一切関わっていなかったと刃更達の記憶を操作する必要がある。

とはいえ澪と柚希は保健室に保護した際に既に済ませておいたから、細かい辻褄合わせが必要なのは刃更と橘――それと念のため胡桃に記憶操作を施せば大丈夫だろう。

それ以外にも、長谷川がやっておくべき後始末はあった。まずは、オルニスが堂上を操って生み出した竜巻のせいで体育祭が中止にならないようにする事だ。刃更は仲間達と共に実行委員としてずっと頑張ってきていた。長谷川に対するオルニスの歪んだ愛情のせいで、中止の憂き目に遭わせるような結末にはしたくない。

次にオルニス――坂崎の存在についてだ。このまま放っておいても、刃更達が何も言わなければ行方不明という事で決着するだろうが、例の竜巻の問題もある。下手な証言であの竜巻と坂崎の失踪に因果関係があると警察や学校側に判断されれば、来年以降は体育祭が行なわれなくなるかもしれない。そうならないよう校長や教頭などの記憶を念のため操作しておくべきだろう――その程度の事など、今の長谷川ならばどうとでもできる。

……そして。

最後に、一番大事な事があった。それは刃更から、坂崎に対して《無次元の執行（バニシングシフト）》を乱発した記憶を消す事だ。ブリュンヒルドに意識を乗っ取られていたため恐らく覚えてはいないだろうが――それでも深層意識では記憶している可能性がある。もし何かの拍子に思い出したら、五年前の悲劇を未だに引き摺っている刃更は間違いなく苦しむ。

だからまずは刃更の記憶を操作しようと、長谷川は自身の額を刃更へと重ねた。別に手で触れても記憶操作はやれるし、実際に他の者にはそうするつもりだが――刃更にだけは

こうしたかったからだ。吐息が感じられる程の距離で記憶操作を行ないながら、眠っている刃更の顔を見詰めていると、ふと湧き上がってくる想いがあって、

「――――――」

長谷川千里は、自然と東城刃更にキスしていた。これ位の役得は良いだろう。唇の感触をたっぷりと堪能すると、長谷川は舌を口の中へと滑り込ませた。すると刃更は、

「ん……」

眠っているのに、まるで応えるようにこちらへ舌を絡め、さらには胸まで触れてくる。

……ふふ、仕方のない奴だな。

長谷川は刃更の好きにさせてやった。そして、お返しとばかりに一層激しくキスをする。舌を絡め、唾液をたっぷりと交換し、いやらしく音を立てて互いの粘膜を愛し合った。

すると――ふと刃更のズボンのポケットから携帯電話が床に落ちた。

「おっと……」

長谷川はキスを止めて、床へと手を伸ばし――そこで手を止めた。

床に落ちた弾みで点灯した液晶画面に表示されているものを見たからだ。

音声が録音されていた。表示されている経過時間から察するに、恐らくオルニスの結界内に取り込まれた直後からだ。人の意識を操れる襲撃犯と相対した際に、万一自分が操

られてしまった時の事を見越して、保険として録音していたのだろう。

後で聞き直せば、そこに残されている真実を確認する事ができる。だから、

「ふ……ははっ、あははははっ」

長谷川千里は、込み上げる笑い声を抑え切れなかった。刃更が滝川と組んでゾルギアを嵌めた事は知っていたが——まさか自分やオルニスの裏まで掻いてみせるとは。

何という青年だろう。東城刃更は十神のアフレイアに戦闘力では至る事ができなくても、思考では上回ったのだ。長谷川が刃更の携帯に気が付く事ができたのは、ほとんど偶然と言っても良いのだから。このまま記憶操作だけ済ませて家に帰していたら、自分は何もかもを刃更に知られてしまっていたかもしれない。しかし、

「流石のお前でも、私がこんなにもお前を想っていた事までは読めなかっただろう」

悪戯っぽく長谷川は笑った。刃更の知略も大したものだが、今回は長谷川の想いが上回ったという訳だ。勝因はキス。その行為をもう一度行なうため、そっと唇を寄せながら、

「いつかの未来に……お前に今日あった事を話せる日が楽しみだよ」

そう長谷川千里が語りかけ、再び唇が重なった瞬間。

眩い金色の光が、まるで未来を祝福するかのように二人を優しく包み込んだ。

エピローグ　ずっと見たかった光景

1

東城刃更（とうじょうバサラ）が眼を覚ますと、心配そうにこちらを覗（のぞ）き込む顔があった。
「橘（たちばな）……？」
その名を口にすると、可愛（かわい）らしい友人は心の底から安堵（あんど）したように、
「良かった……ちゃんと意識が戻ってくれて」
「？　何を言って――」
と、そこまでを言ったところで刃更はハッとなって跳（は）ね起（お）きた。
「胡桃（くるみ）はっ？　坂崎（さかさき）はどうしたんだ!?」
「お、落ち着いて……胡桃ちゃんなら大丈夫だよ、ほら」

橘は視線を刃更から横へ移した。すると家庭科室の壁にもたれるようにしている胡桃がいた。気を失っているが身体に傷は見られず、また呼吸も穏やかな事にホッと安堵を得た刃更は、そこである事に気が付く。家庭科室の空間が元に戻っている——つまり、

「結界が消えてるのか……じゃあ、坂崎は」

「もしかして、覚えてないの……？」

と橘。

「胡桃ちゃんを人質に取られた東城君は、先生の魔法か何かで右腕を切断される重傷を負ったんだ。酷い出血だったし、絶対に致命傷だと思ったんだけど——その事は？」

「ああ……そこまでは覚えてる。でも」

薄れゆく意識の中で、誰かの声を聞いた気がして——そこから先の記憶がなかった。

まるで頭の中に霧が掛かったように思い出せない。すると、

「あの後……東城君の身体が輝いたと思ったら、すぐに腕が元通りに再生されたんだ。そして、別人みたいになったキミは、気に坂崎先生を——」

「俺が……坂崎を倒した……？」

容赦なく周囲を巻き込むような相手だ。胡桃を人質に取ってきた事もある。もし逃がせば今度は澪や柚希、万理亜が狙われ、下手をすれば無関係な一般人が盾に取られる可能性

もあった。よってゾルギアと同じで、確実に倒すべき相手だったのだが、

「……」

刃更は斬られた筈の右腕に視線を落とすと、試しにブリュンヒルドを具現化した。

戦場で死者の魂を狩ってきた戦乙女を銘に持つ刃更の魔剣は、斬った存在の魂を記憶している。すると、確かに坂崎と思われる新しい強力な反応があった――間違いない。

……取り敢えずは、終わったって事か。

だから、東城刃更はようやく胸を撫で下ろした。これだけの反応があるという事は、坂崎は相当な力を持っていたらしい。しかも人間だけでなく別の霊的な反応も混ざっているところを見ると、邪精霊か何かと融合していた可能性がある。刃更だけでなく、澪をマークするため潜入していた柚希や滝川が検索しても気付けなかったのもこれならば頷ける。

頷けるのだが――だとしたら次に考えなければいけない事があった。

……どういう事だ？

言われてみると、確かに自分は坂崎と戦った気がしないでもない。しかし――いかに勇者の一族が一般人よりも回復力が高いとはいえ、欠損した肉体の再生などは不可能だ。高レベルの回復魔法なら或いは可能かもしれないが、そんなものは刃更は勿論、精霊魔術師の胡桃ですら習得には至っていない。もし可能性があるとしたら、

「ブリュンヒルド……」

「？　東城君、今何て……」

聞き返してくる橘に、刃更は「……いや」と首を横に振った。

――勇者の一族が使用する武器の中で、銘を持つものにはその存在が宿っている。『咲耶』や『白虎』のように、聖なる精霊を宿したものは霊刀や霊槍と呼ばれ。対する『ブリュンヒルド』のように、邪精霊など魔の存在を封じているものは魔剣と呼ばれる。

五年前に《里》で起きた悲劇の原因となったS級の邪精霊すら封じ込めていた『ブリュンヒルド』ならば、或いは人体の再生くらいは容易かもしれないが、

……まさかな。

柚希のように「咲耶に選ばれた」者であれば、宿っている精霊と意思疎通ができたり、修行次第で力を引き出す事は可能になるだろうが、刃更や高志のように単に『ブリュンヒルド』や『白虎』を「使っている」だけの者に、そこまでの力を貸してくれるとは思えない。意識を失う前に頭の中に誰かの声が響いた気もするものの、

……いや。

坂崎は複数の人間の意識を操る事ができていた。だとしたら、刃更が腕を斬り飛ばされたのは幻覚系の魔法だった可能性がある。頭の中に響いた声も、こちらを操ろうとしてい

た坂崎のものだったとしたら説明が付く。おかしい所は何も――…、

「……どうかしたの？」

「橘……坂崎の結界に取り込まれてから、何があったか覚えているか？」

「？　まずはボクと東城君が戦ったんだよ。そしてボクは東城君には歯が立たなくて……」

「……その後は？」

「その後って……ボクらが戦っていたのは、お互いの誤解が原因だったって解って」

一息、

「そこへ――坂崎先生がボクらに不意打ちを仕掛けてきたんだよ。ボクは最初の不意打ちでやられて動けなくなっちゃったけど、東城君はそれでも戦おうとして……そうしたら坂崎先生は胡桃ちゃんを人質に取って――後は、さっき説明した通りだよ」

「……だよな」

橘の説明に不自然な点はないし、嘘を吐いている風でもない。うろ覚えの刃更の記憶とも一致するし、恐らく橘の言った事は間違ってはいない筈だ。

それなのに――何だろう、このおかしな感覚は。自分は何か大切な事を忘れてしまっている気がする。記憶も状況も、刃更が坂崎を倒したと言っているのに。

どうして――こんなにも自分は、誰かに守られたような気がするのだろう。

……もしかしたら。

刃更は携帯をポケットから取り出して液晶に触れてみるが、残念ながら作動しない。

イチかバチかの保険だったのだが――やはり戦闘の衝撃で故障してしまったのだろう。

それでも音声データが残っている可能性はある。家に戻ったら取り出せるかどうか試してみよう。携帯をしまった刃更は、次に澪と柚希の無事を確認するため主従契約の位置特定を使用した――すると、向こうの方が一足先に位置特定を使用していたのか、二人の反応がこちらへと向かってきているのを感じる。きっと心配してくれていたに違いない。それはとても嬉しいのだが、二人が来る前にやらなくてはならない事がある。だから、

「なあ橘――ちょっと聞いて良いか？」

東城刃更は、橘七緒へ呼び掛けた。そして――その数十秒後、

「――刃更っ!?」

ガラッと勢い良く扉を開けて、家庭科室の中へ澪と柚希が飛び込んできた。

――橘には、ひとまずの狸寝入りを頼んだ。

なるべく澪と柚希には隠し事をしたくないのだが、橘が刃更以外にはヴァンパイアである事を伏せておきたい――人間として平穏に生きたいと希望を口にしたため、友人としてその希望を叶えてやりたかった。胡桃も坂崎の結界内では橘と接点がない以上、刃更が言

わなければ橘の秘密を守る事はできる。だから状況を聞いてきた澪と柚希には、坂崎が犯人で彼を倒した事は伝えたが、橘の事は誤魔化して説明した。一緒に坂崎の結界に取り込まれたが、その拍子に気を失ったのでこちらの事情は何も知られていないだろう――と。

「――で、そっちの方は大丈夫だったのか？」

「私達は平気……」

反対に刃更が問い返すと、柚希が即答した。しかし隣の澪はやや申し訳なさそうに、

「まあ……こっちも気絶している堂上先輩達を発見してすぐに、坂崎に不意を突かれて気を失っちゃって、つい先刻意識を取り戻したばかりなんだけどね」

「……そうか」

澪達が到着した時点で堂上達が気を失っていたのは、先行した胡桃の仕業だろう。

坂崎が澪や柚希を一緒に人質に取らなかった事が少し引っ掛かるが、主従契約の位置特定で刃更に気付かれる可能性を考慮してリスクを避けたのかもしれない。

とその時、校舎の外――グラウンドの方からわっと悲鳴のような声が聞こえてきて、

「っ――何だっ!?」

「心配ない……体育祭が再開されてるから、今のはきっとその歓声」

その言葉に、床で意識を失ったフリをしている橘の身体がほんの僅かな反応を見せたが、

澪と柚希に気付かれる事はなかった。刃更はホッと胸を撫で下ろしながら、

「再開されたって……あのまま中止にならなかったのか？」

「ええ。テントや機材が一部壊れたりはしたけど、幸いあの竜巻による怪我人はいなかったから。もう風は完全に収まっているし、問題ないだろうって事で再開になったの。今は、丁度クラス対抗の応援合戦が始まったところよ」

『――では、まずは一年Ａ組の入場です。張り切ってお願いしまーす！』

そして入ったアナウンスは、刃更達Ｂ組の出番が近づきつつある事を報せるもので、

「そうか……なら二人は先に行ってくれ。今からなら、まだウチの出番に間に合う」

「え、でも……」

「せっかく坂崎を倒したのに、最後にお前達がいなくてウチのクラスは棄権なんて結末はご免だ。一体何のために、俺達ここまで準備を頑張ってきたんだよ」

そうだろ、と刃更。

「障害物競走は途中で駄目になっちまったけど……体育祭はまだ終わってない。二人とも『楽しみにしてろ』って言ってくれてただろ。だから見せてくれよ、お前達が今日までずっと頑張ってきた事の成果を。胡桃と橘を運んだら、俺もすぐに行くから」

その言葉に澪と柚希は互いに顔を見合わせて――やがて刃更に笑顔で頷いてくれた。

――そして家庭科室を出て行った澪と柚希の気配が完全に遠ざかった後。
刃更は胡桃を背負うと、密かに橘と共にグラウンドへと向かった。
橘は嬉しそうだった。何せ体育祭実行委員の中でも、梶浦らと共に中核を担った生徒会メンバーなのだ。中止にならなかった喜びは、きっと刃更よりも上だろう。そして、
「じゃあ……ボクは先に本部に戻ってるね」
校舎の外に出た所で橘が言った。結界内にいた間の刃更達は、行方知れずだったようなものだ。一緒に本部へ戻って、二人でサボっていたと思われるのは避けた方が良い。
タッと前に駆け出した橘は、しかしすぐに立ち止まるとこちらを振り返った。
「ねえ東城君……」
「……どうした？」
すると、橘はそっと瞳を伏せたものにして、
「まだちゃんと謝ってなかったよね……先刻はキミの事、疑って本当にゴメンなさい」
「……いや。こっちこそ、お前の事をもっと信じてやれなくてすまない」
「ううん……あのね、こんな事言うの凄く図々しいって解ってるんだけど」
ねえ、
「ボク達……まだ友達かなぁ……っ？」

体操服の裾を両手でキュッと握った橘が、泣きそうな顔でこちらを見てきて。
だから刃更は力強い頷きと共に、確かな肯定の言葉を口にした。その声はタイミング悪くグラウンドで生じた歓声に掻き消されてしまったけれど、間違いなく伝わったと思う。
頷きを返してきた橘の顔はまだ泣きそうで――それでも嬉しそうに笑っていた。

刃更がグラウンドへ足を踏み入れたのは、A組の演技が終わった直後だった。
……ギリギリ間に合ったみたいだな。
ホッと胸を撫で下ろしながら、胡桃を背負った刃更は本部テントへと向かう。
すると案の定、梶浦から持ち場を離れていた事を注意された。ただ橘が胡桃の事を伝えてくれていたのか、梶浦の声に怒りは感じられず。さらに先に戻っていた橘がやって来て、胡桃は自分が見ているから、刃更はもっと前に行くようにと言ってくれた。
「――約束したんだから、ちゃんと成瀬さんと野中さんを見てあげないと駄目だよ？」
そう言って笑った橘に背中を押され、刃更は人の波を掻き分けて前の方へと進んだ。
そして、ダンスフィールドをしっかりと見渡せるポイントを確保すると、
『では――続きましてB組の入場ですっ！』

実況アナウンスを受けて、一年B組の女子達が勢い良く駆けてきた。
――すると途端に歓声が上がった。その理由は間違いなく彼女達の衣装にあった。
B組の女子達が扮していたのが――驚く事にレースクイーンだったからだ。しかも安っぽいものではなく、随分としっかりした作り。さらに手にはダンスの小道具として使うのか、色鮮やかなパラソルも持っている。衣装関係は相川の姉にツテがあると言っていたが、
「一体何の仕事やってんだ、相川のお姉さんって……？」
素朴な疑問が湧き上がる中――音楽が流れ始め、B組の演技がスタートした。
どこかで聞いた事のあるメロディだった。確か何年か前に有名な賞を獲った女性シンガーの洋楽だ。ダンスを盛り上げるためか、元々の曲調より少しアップテンポにしてある。
澪と柚希は、捜すまでもなくすぐ見つかった。聖ヶ坂学園が誇る二人の姫は、それぞれ自分の後ろに並ぶ他の女子達を引っ張るチームリーダーとして、最前列で踊っていた。

『――――』

秋の太陽の下で躍動する少女達に、観客達の興奮はあっという間に最高潮に達する。
凄い演技だった。パラソルもあるため、普通のダンスよりもダイナミックな演技が可能という事もあるが、それ以上に驚くべきは彼女達の踊りの一体感だ。
二つのチームは左右対称の動きから、途中でパラソルを開くと互いに位置を交換し、

さらにダンスを続けてゆく。一糸乱れぬとまではいかないが、それでも高い統率が取れた動きは、一朝一夕でできるようなものでは断じてない。それを生で見せられれば、その迫力に観客達は否応なしに興奮以外の感情を忘れる。いつしか誰もが曲に合わせて手拍子を打ち鳴らし、大地を踏みしめビートを刻んでいた。まるで地鳴りだ。その一体感に、

「……はは っ、凄え！」

東城刃更もまた、湧き上がる興奮を抑えられなかった。

これが澪と柚希が見せたいと言い、刃更が見る事を望んだものの答え。

――きっと放課後、皆でずっと練習していたのだ。澪や柚希、相川や榊などは実行委員の仕事もやりながら、他の女子だって部活があっただろうに。それでも、膨大な努力と練習があった事などを感じさせないように、彼女達は笑顔でダンスを踊り続けている。

すると――刃更の周りには沢山の人がいるにも拘らず、ふと澪や柚希と眼が合った。

気のせいじゃない。二人は確かにこちらを見て、ダンスの合間にウインクしてくる。

……アイツら。

さては、主従契約の位置特定を使ったな――刃更は思わず苦笑する。

プライバシーのために、なるべく使わないようにという約束なのに。

でもまあ良いか……今日だけは特別だ。だから軽く手を挙げて応えてやると、

『――――』

二人は嬉しそうに表情を輝かせ、踊りの躍動感をより一層アップさせる。

そんな澪と柚希の踊りを眺めながら、東城刃更はぼんやりと思う。

……そうだったな。俺も、この瞬間のために頑張ったんだっけな。

身体能力を誤魔化す以上、裏方じゃないと全力で体育祭を楽しめないから。

他のクラスの友達が欲しいから。色々な理由を付けたけど、一番の理由はこれだった。

だからこそ、実行委員なんて慣れない仕事に立候補までして関わったのだ。

――東城刃更には、どうしても叶えたい事があった。

魔王の娘に生まれてしまった澪と、勇者の一族として生まれた柚希のために。

残念ながら今はまだ、二人が当たり前の日常や平穏を手にする事はできない。

だけど――それでも我慢して、手を伸ばす事を諦めてしまうには、その幸せは余りにも大きすぎて。だから許される範囲で、二人には学校生活を楽しんで欲しかった。

望んだのは、ただそれだけ。勇者の一族でも、かといって普通の人間でもない――中途半端な今の自分には、一緒に戦う事以外にできる事は本当に少ないけれど。

それでも自分には、戦う事以外にも何かができると思った。そう信じたかった。

――そして今、その答えが眼の前にある。

確かに今この時、澪と柚希は当たり前の日常の中にいた。楽しそうに踊っていた。
嘘じゃない。見間違いじゃない。刃更だけじゃなく、皆がそれを目撃してる。
重なり合う手拍子と、高まる興奮と熱気がその証拠だ。
青春なんて単純な言葉では片付けられない、片付けたくない光景がそこにはあった。
ここに居る誰もが、確かに想いを一つにして、この瞬間の永遠を想ってる。
それでも——やがて僅かに変わった曲調が、間もなく訪れるフィナーレを教えた。
あっという間だった。後にはまだ他のクラスが控えているし、午後の部の団体競技だって残っている。そして明日からは、またそれぞれ新たな日常が始まってゆく。
だから。このダンスの事をずっと覚えていてくれる人は、きっとそれほど多くない。
——それでも東城刃更は忘れない。ずっとずっと忘れない。たとえこの先どれだけ辛い戦いが待っていても、この瞬間の記憶を胸にきっと乗り越えてみせる。
そして——来年もまた、きっと皆でこの場所へ帰って来るのだ。

2

それから午後の団体競技も盛り上がりを見せ、体育祭は無事に閉幕した。

色々な事がありすぎて、肉体的にも精神的にも疲労はほとんど限界に達している。

それでも今日――競技中やふとした瞬間に何度となく、生徒や教師、観客達の歓声や笑顔を見る事ができ、東城刃更は今回の実行委員会に関われた事を誇りに思った。

準備期間中の様々なトラブルや、本番中にグラウンドを襲った竜巻による一時中断を乗り越え、こうして最後まで自分達の体育祭をやり遂げる事ができたのだ。無事に閉会式を迎えられると、副会長の梶浦や生徒会メンバーの橘らは感極まって泣いていた。それを見た澪や榊など、一般の実行委員達の多くも達成感や感動に涙を流していた。

――その陰で、坂崎の行方が解らなくなっている事が教員達の間で問題となっていたが、竜巻の後にも姿が確認されていたため、事故ではなく失踪扱いで処理され、そのまま消息が明らかになる事はないだろう。

唯一――刃更が驚いたのは、後で聞かされた橘の血筋についてだ。ヴァンパイアは日本では珍しいため、あの後二人きりになった時に何気なく訊いてみたところ、橘の母親は『紅蓮の真祖』と恐れられたスカーレット・ブラッドなのだという。『紅蓮の真祖』と言えば、『漆黒の真祖』と並んで史上最強と恐れられたヴァンパイアだ。戦い慣れていない橘があれだけの強さを持っていたのは、母親から受け継いだ血と力のお陰だったらしい。

そして閉会式が終わって一般の生徒が帰ってゆく中、実行委員の刃更達はグラウンドで

使用した機材の後片付けを教員と共に行ない、全ての作業が終わる頃には夜になって。

実行委員会の打ち上げは後日という事になり、ひとまずこの日は解散となった。

色々あったが体育祭は何とか無事に終了したし、ずっと正体が解らなかった襲撃犯を倒す事もできた。取り敢えずは一件落着した――そう思っていたのだが、

「……何でこんな事になってるんだ」

東城刃更は思わず嘆息した。刃更のいる東城家の浴室には現在、甘い声が満ちている。

刃更が見詰める先――速乾性に優れた床に敷かれた巨大なビニール製のマットには、澪・柚希・胡桃の三人が仰向けの状態で寝かされていた。澪と柚希は、体育祭の応援合戦で着用したレースクイーン姿。胡桃は彼女用のビスチェに犬の耳と尻尾を着けている。

彼女達には幾つか共通点があった。濡れた瞳に紅潮した頬、熱を帯びた甘い吐息。

そして澪と柚希の首には、主従契約の呪いの首輪の痣がくっきりと出ている。

三人は今――激しい催淫状態に陥っていた。すると湯船から、

「――さあ刃更さん、楽しい調教の時間です。張り切って行きましょー」

この状況の元凶――バスタオル姿の万理亜がビデオカメラを手にキュー出ししてくる。

――事の発端は、刃更達が帰宅した後に遡る。襲撃犯だった坂崎を倒した事は、予め電話で報告していたが、刃更達を出迎えてくれた万理亜は改めて喜びを爆発させていた。

ずっとひとりで留守番させていたのだ。心配させてしまっていた事を謝ると、万理亜は「いいえ」と優しく笑って、そして準備していた夕食のご馳走を振る舞ってくれた。

ところが食後――胡桃が撮影していた体育祭のビデオを、リビングのテレビでみんなで見ていた時に悲劇は起きた。会場を感動の渦に巻き込んだ、澪と柚希の応援合戦のダンスの映像が撮られていなかったのである。とはいえ無理もない。坂崎は倒したものの、あの時の胡桃はまだ意識を失ったままだったのだから。しかし澪や柚希らのダンスは、間違いなく今日の体育祭で最も会場が興奮に包まれた瞬間だった。そのため、夕食での話題は当然のように二人のダンスやレースクイーンの衣装について盛り上がってしまっていて。

結論から言うと――万理亜がキレた。凄まじい勢いで。それから、澪と柚希のレースクイーン姿でのダンスをどれだけ楽しみにしていたか、マジ泣きしながら刃更達に語った。

あまりに気の毒だったので、澪と柚希がレースクイーンの衣装を着て二人でリビングで踊る事になったのだが、音楽は再生できても流石にパラソルまでは振り回せないし、何よりあの感動を再現する事など不可能だ。そのため二人の踊りを見ても完全には機嫌を直さなかった万理亜が次に希望したのが、胡桃に先日と同じサキュバスの洗礼を与える事だった。約束は言うなれば一種の契約である――それを破った罰を与えたいと言ったのだ。

無茶苦茶な話だったが、「気高い勇者の一族が約束を違えるなんて……」という万理亜

の挑発に、根が律儀な上に意地っ張りな胡桃はあっさりと乗ってしまい、サキュバスの洗礼をモロに受けてしまった。そしてまた刃更が胡桃を楽にしてやる事になると、万理亜はそこまで計算していたのか、横で見ていた澪と柚希が嫉妬して主従契約の呪いが発動してしまい――こうして三人まとめて屈服させる事になったのである。しかし刃更が三人の服を脱がそうとすると、折角だから今回は着衣で行きましょうと万理亜に提案されたのだが、

「――いつもならリビングでやるのに、何で今日に限って風呂場なんだ？」

「良いじゃないですか。ネット通販で届いたばかりのこのソープマットを試してみたかったですし、着衣プレイはリビングやベッドでやるよりも、本来なら服を脱がなければならないお風呂でやる方が背徳感があって燃えるものですよ。では刃更さん、これをどうぞ」

「……何だこれ？」

万理亜が差し出した、ピンク色の液体が入ったボトルを受け取りながら問うと、

「またまた刃更さん、性感ローションに決まってるじゃないですかー。折角ソープマットを敷いたというのに、これが無いと何も始まりませんってば」

「お前こそ何を始めるつもりだ。ってか、服着てるのにローションなんて使ったら」

「大丈夫ですって。どうせ下着は勿論、澪さま達の衣装だって私が綺麗に洗ってアイロン掛けて返すんですから。だったら、その前にたっぷりと楽しんじゃいましょう！」

と、鼻息をフンフン荒くしながら万理亜。

「さあさあ刃更さん、一体誰から行っちゃいます？　やっぱここは胡桃さんですか？」

「それは……」

刃更は言葉を濁したものの、確かによく考えれば一人目は胡桃にするべきだろう。

刃更と主従契約を結んでいない胡桃を屈服させようとしたのを見て、澪と柚希は嫉妬してしまい催淫の呪いを発動させてしまっているのだ。先に二人を屈服させても、その後で胡桃をやったら澪達はまた嫉妬して再び催淫状態になってしまう可能性がある。

だから、刃更が胡桃へと視線を向けようとした——その時だった。

「っ……ま、待って」

ふと、制止の声が発せられた。それは自分が最初になる事に焦った胡桃でも、刃更に対して積極的にアプローチしてくる事が多い柚希でもなかった。

澪だ。

主従契約の催淫の呪いで、全身を甘い熱に冒されていた澪は、

……やだ、あたし……っ。

刃更の視線が向いた事に、とっさに自分が声を上げてしまった事を悟った。

――いつもの澪なら、間違いなく柚希や胡桃よりも後にされる事を選ぶ筈だった。

別に後回しにされたい訳ではない。性の快楽に素直になる事へ強い恥じらいがある澪は、可能ならばまだ免罪符が欲しかったからだ――刃更にされる淫らな行為を受け入れるのは、柚希や胡桃に対抗して仕方なくという自分への言い訳ができるように。

だから、一番後回しにされても我慢しようと思っていた。

……でも。

今回ばかりは駄目だ。だってそうではないか。刃更が駅で襲われ、胡桃がこの家へやって来たあの日――刃更にいっぱい服従するため、淫らな雌犬の格好をして彼の足を舐めたところを胡桃に見られてしまった澪は、恥ずかしさのあまりその場から逃げてしまった。

ところが澪が自分の部屋へと逃げ込んでいる間に、胡桃と柚希だけが刃更に屈服させて貰っていたのだ。とはいえ、澪だって学校のシャワールームで自分だけ刃更にされた事がある。だから、きっと澪の知らないところで刃更が柚希を屈服させる事だってあるだろう。

でもそれは仕方がない。柚希もまた、刃更と主従契約を結んでいるのだから。

だけど同じ主を持つ者同士という事で、柚希だけが刃更にされた事を知った澪が嫉妬しても、もう主従契約の呪いが発動する事はなくて――そのため嫉妬だけが残って。

澪は思う。もし今ここで後回しにされて、柚希や胡桃が先に刃更にされるのを見せられたら――自分はきっとおかしくなってしまうと。だから、

「お願いお兄ちゃん、一番にして……っ、今度はあたしの番だよ」

成瀬澪は、形振り構わずに自分から刃更に懇願した。免罪符なんてもうどうでも良かった。今だけは、誰よりも先に刃更に滅茶苦茶にされたかった。すると万理亜が意外そうに、

「珍しいですね、澪さまが自分からおねだりするなんて。でも澪さま……先に楽にして貰っても、胡桃さんがされているのを見たら後でまた切なくなるだけですよ？」

「っ……それ、は……っ」

澪は己の嫉妬を言えず、泣きそうな表情を浮かべる事しかできない。だが、

「……解った。澪を先にしよう」

刃更が静かな声で言った。万理亜は驚いたように、

「私は別に良いですけど……でも、それだと二度手間に」

「その時はまたしてやる。澪の気が済むまで何度だって。これは主従契約の呪いなんだから……信頼関係を深めるためにする筈の行為が、効率考えた作業になったらお終いだろ」

だから、

「柚希と胡桃は少し待っててくれ……澪の後で、お前達にもきちんとするから」

「っ……ん……解った」

「……っ」

刃更の言葉に柚希がコクンと頷き、胡桃は恥ずかしそうに眼を逸らした。

たった今――最初に刃更に屈服させて貰うのが澪に決まったのだ。そして刃更が、マットの上で仰向けになっていた澪の腰を抱いて躰を起こした。

「んっ……ぁ……」

たゆんと胸を揺らしながら身を起こした澪は、刃更がローションボトルのキャップを開けたのを見た。眼の前で向かい合う体勢で、中身がとろりと澪の躰へと掛けられ、

「んっ……やぁ……ふ、ぁん……んっ……んぅ……っ」

首筋を伝って鎖骨の窪みにいやらしく溜まり、胸元から谷間へ零れ落ちてゆく――そんな自然の重力に従って流れているだけなのに、澪は確かにローションに愛撫されていた。濡れたレースクイーンの衣装が僅かに透け、胸の先端の桜色が薄っすらと見え始める。そして右も左も、上も下も、全てをたっぷりとヌラヌラにされた澪の敏感な胸は、そのボリュームもあって今までに見た事もないようないやらしさになった。

……凄い……。

以前にも、澪は刃更にメープルシロップを使って胸を滅茶苦茶にされた事があった。あ

の時は自分でも信じられないほど乱れてしまったが、あれからも澪は刃更によって何度も快楽で屈服させられている。あの頃よりも、澪の躰は間違いなく開発されているだろう。

だが、澪は自分の考えがまだ足りなかった事を思い知った。変わったのは澪だけではない――刃更もまた、あの時よりも澪を感じさせられるようになっていたのだ。だから、

「行くぞ……」

刃更がそう言って、衣装の上から澪の胸に触れた。

……え？

その瞬間――澪の視界が真っ白に弾け、一切の音が聞こえなくなった。余りに激しい絶頂で感覚に空白が生じたり、眼の前が真っ白になった事はこれまでにもあったが、

……な、何これ……？

視覚と聴覚が飛んだ状態が続く。澪の中にあるのは尋常ではない浮遊感だけだ。戻らない感覚に、段々と不安が恐怖へと変わり、澪は思わず刃更の名を呼んだ。

「っ――――」

だけど声が出なかった。いや、耳が聞こえなくて解らないだけだろうか。

すると――遠く彼方で、ほんの少しだけ音が聞こえた。やがて徐々に聞こえてきたのは、

……波の音……？

さざめくようなその音は、急速に大きさを増し始めた。激しい波の音が澪へと迫ってくる。だから、澪は本能で巨大な何かが近付いている事を感じ取り、ようやく理解する。

……嘘、まさかこれ……っ？

間違いない。澪は今、己の快楽神経を激しい絶頂が駆け抜ける音を聞いていた。

いけない——そう思った時にはもう遅かった。加速していた意識に感覚が追い付き、

「〜〜〜

笑みを含んだ万理亜の声に、無言を返した刃更が澪の腰を抱く体勢を入れ替えた。
快感で躰に力が入らず、対面座位のようだった体勢を背面のそれに変えられて、
「やぁっ、お兄ちゃ……何で、こんな……ぁっ」
柚希と胡桃によく見えるようにされてしまった澪が肩越しに振り返ると、
「――ご免な。多分、この方法がお前を俺に一番屈服させてやれるから」
そう言うや、刃更は澪のレースクイーン衣装の胸の辺りを強引に脱がそうとする。
「まっ……駄目ぇ、借り物なの……っ、衣装、破けちゃうよぉ……っ」
「その時は俺が相川に弁償する……今は、お前が俺に屈服する方が大事だ」
そして衣装の上を乱暴にずらされた澪は、大きな胸を全て露出させられた。
「……あ、あぁ……っ」
ローションでヌラヌラにされた澪の胸は、信じられない程いやらしかった。先端は限界までピンと張り詰め、空気に触れているのを見ているだけでおかしくなりそうになる。
澪だけじゃない。柚希と胡桃も、万理亜もそれを見ていた。そんな中、限界まで敏感になっていた胸に刃更の手がそっと添えられて――次の瞬間、澪の屈服の時間が始まった。
刃更の手が、澪の胸をいやらしい音を立てながら揉み始めたのだ。だから、
「っ……あぁっ、んっ――ふあぁん……ひうっ、はぁっ……ふぁあぁんっ！」

刃更の膝の上で、澪は快感に全身を暴れさせた。刃更に揉まれる度に、ローションに濡れた澪の胸が淫らに粘着質な音を鳴らし、聴覚で快楽を教えられる。だがそれ以上に、

「やっ、何これぇ……はぁっ、気持ち良すぎて……っ、恐いよぉ……あぁぁっ！」

「気持ち良いのは当然ですよ澪さま……たかがメープルシロップと、快楽を得るためだけに作ったサキュバスの性感ローションが同じ筈がないでしょう。でも、大丈夫です」

刃更の膝の上で淫らに乱れている澪に、万理亜がふっと笑い掛けてくる。

「媚薬効果もありますから、催淫の呪いと合わさればすぐに何も考えられなくなります」

「そっ、や――――あぁぁぁっ？」

そう言われた途端、喉を反らしながら再び澪は激しく達してビクンと躰を震わせた。

「っ……」「凄、い……」

その瞬間を見た柚希と胡桃が、ゴクリと喉を鳴らして呟いた――それ程の絶頂だった。

すると刃更は澪の胸から手を放した。完全に腰の力が抜けていた澪は、刃更の膝の上から前へ倒れるようにマットの上へ俯せになる。すると衣装の下のホックが外され、ジィィィっとファスナーが下ろされた。何をされるか解った澪は、

「やっ……駄目、ぇ……っ」

腰を振って何とか必死に逃れようとした。しかし拒絶の筈のその行為は、淫らに尻を振

るだけで――あっさりと刃更の手で摑まれ、澪は衣装の下を強引に引き摺り下ろされた。
すると、途端に浴室に女の匂いが満ちた。ローションで透けている澪のショーツ――その股間が、澪が自分で溢れさせた熱い潤滑液で濡れていやらしい湯気を立てていた。
「あ、あぁっ……あぁぁあっ」
見られてしまった。もう言い訳はできない。羞恥に顔を真っ赤に染めた澪の背に、刃更が覆い被さるようにして、こちらの耳元に口を寄せて囁いた。
「――良いんだよ。これは呪いのせいなんだから」
その声は驚くほど優しくて……だから澪はその言葉に甘えてしまう。自分は乱れて良いのだと、成瀬澪は快楽に弱い己を許してあげた。だから刃更によって躰を起こされて向かい合う体勢になると、柚希と胡桃に見られ、万理亜にビデオカメラで撮影されていても、もう刃更にされる事を拒まずに――ただ、あるがままの己の全てを公開した。
ローションでどこを触られても滅茶苦茶に感じる躰になっていた澪は、自分でも信じられないような場所で次々に絶頂を刻まれ、新たな性感帯を開発されていって。
そして――その上で改めて敏感な場所を攻められ始めた澪は現在、右の胸を吸われながら、左の胸と尻を彼の左右の手で滅茶苦茶に揉まれている。いやらしい音を立てながら胸をしゃぶられると、理性がとろけそうな位に気持ち良くて、澪は濡れた髪を振り乱しなが

ら甘い嬌声を漏らし続ける。はしたない動きで腰が動いてしまうのは、尻を揉む刃更の手が後ろからショーツの中へ差し込まれ、澪の生尻に五指を食い込ませているからだ。鷲摑みにされていやらしい形になった尻を快楽に振りながら、

「やっ……ああっ、んっ……ふあぁん……ひうっ……、やぁっ……んあっ、はあぁあっ！」

澪は喘ぎ声も腰の動きも止められない。すると刃更が澪の右胸から口を離すと、

「……澪」

その胸を下から持ち上げるようにして、張り詰めた先端を澪の口元へと持ってきた。とっさに周囲が息を呑む。澪もまた刃更が何をさせようとしているか解り、

「だ、め……っ、そんなのぉ……っ、お兄ちゃ、駄目……っ」

唇を震わせながら思わず拒絶の言葉を吐き出した。刃更は澪に、自分で吸ってみろと言っているのだ。だから顔を真っ赤にしながら横に振った澪は、

……っ……絶対に、駄目……だ、めぇ……こんな……事、しちゃ……あっ。

そうやって自分に言い聞かせるのに。いつの間にか刃更の瞳がゾルギアとの戦いの後に澪を強引に押し倒した時と同じになっていて——だから澪の唇は、自分の心を裏切って刃更に従った。拒絶の言葉を吐いた口が、刃更の命令に従って己の胸の先端をゆっくりと迎えにゆく。それはローションでいやらしくコーティングされ、刃更の唾液で濡らされた胸

の先端でする、おかしくなりそうな位に淫らな間接キスだ。その凄まじい背徳感に、

「――――――っ」

これまでにない禁断の快楽を知らされ――成瀬澪は盛大に絶頂した。

――そして、東城刃更は、澪の体勢を元の仰向けの状態へと戻した。

刃更によって新たな性の悦びの扉を開けられた澪は、

「ん……あぁ……はぁ、お兄、ちゃ……や……ぁ……んぅ」

一向に収まらない激しい絶頂感に、マットの上でいやらしく胸を震わせながら、愉悦の残滓に酔いしれるような声を漏らしている。それを見た刃更は深呼吸を何度か繰り返すと、暴走しかけていた己の思考を冷静なものにした。すると、

「っ……」「……ん、ぁ……っ」

全てを見ていた柚希と胡桃が、ゴクリと喉を鳴らした。これから自分達も、澪と同じような事をされ、同じような絶頂を与えられる事を想像してしまったのだろう。

澪の痴態を撮影していた万理亜が、そんな柚希と胡桃の方へとカメラを向けて、

「――さあ、次はお二人の番です。では刃更さん……柚希さんも胡桃さんも、澪さまがさ

れているのを見てすっかり出来あがっています。たっぷりと屈服させてあげて下さい」

「……解った」

催淫状態で待たされていたのだ。早く楽になりたいだろう。刃更が、敏感になっている身体をマットの上で寄り添わせている姉妹へと向き直ると、

「――ああ、でもちょっとお待ちを。刃更さんが無茶して、澪さまに半分以上もローションを使ってしまいましたから……柚希さんと胡桃さんに使うには、残りでは量的に少し物足りないですね。お二人も澪さまより少ない量でされては、刃更さんに手を抜かれたと感じてしまい、ちゃんと素直に屈服できないでしょう」

「そんな事あるのか……？」

ローションの量＝想いやりの大きさとか、そんな嫌な等式はないと思うが。しかし、

「刃更さんは女心が解らなくて駄目ですねえ。柚希さんも澪さまと同じ、立派な刃更さんの下僕です――そして胡桃さんは、そんな柚希さんの妹なんですよ？　不公平のないように、ここは徹底的にやってあげないと女の子は嫉妬しちゃいます。むしろ待たせてしまった分、お二人にはもっと過激にやってあげても良い位です」

「もっと過激って……そんなのどうすりゃ良いんだよ？」

見当もつかない刃更に、万理亜は我が意を得たりとばかりに頷いて、

「お任せ下さい刃更さん。こういう困った時のために、私にはとっても頼りになる使い魔が居るのです――さあ、お出でなさいスラ吉っ！」

カメラを置いてそう言うなり、天井に召喚用魔法陣が展開され、浴室に光が生まれた。

そして魔法陣から現れたのは、中央に一つ眼を持ったバスケットボール大の球体だ。

万理亜は、天井から降ってきたそれを両手でキャッチして、

「さあスラ吉……お前の力で、そこにいる二人を滅茶苦茶にしてあげて下さい」

まるで頭を撫でるようにしながら語り掛けると、スラ吉と呼ばれた球体モンスターの眼が喜んだように笑みへと変わった。そして球体の左右と下から一気にピンク色の粘体物質がドバっと大量に溢れ出る。思わぬ事態と光景に、

「っ……!?」「やぁっ……何それっ！」

柚希と胡桃がギョッと身を固くした。これには刃更も流石に、

「いや万理亜……流石にスライム責めってのは、ちょっとレベルが高すぎるだろ」

「何を言ってるんですか刃更さん。気高い魂を持った勇者が、低級のモンスターに陵辱される――その背徳感が最高なんじゃないですか」

「背徳感云々はどうでも良い……柚希と胡桃を陵辱されるのは嫌なんだよ」

「成る程――コイツらを陵辱して良いのはこの俺だけだからな、って事ですか？」

「……お前な」

何だそのムカツク言い方は。物真似のつもりか。すると万理亜は笑みを浮かべて、

「ご安心を刃更さん。スラ吉はサキュバスである私の使い魔として性感を与える以外の力は持っていません。それに――実はこの子、こう見えて女の子なんです。うふっ」

「そうなのか……」

いや知らねえよ。大体、粘体のスライムにオスもメスもないだろ。

「確かに見た目はちょっとグロいですけど、スラ吉のゲル状部分は先ほど刃更さんが滞さまに使った性感ローションの原料なんですよ？　結局やる事は同じなんですから、今更ローションプレイもスライム責めも、そんな大差ないですって」

「ちょっと待て。いきなりしれっと何を言い出して――」

言い掛けた刃更の言葉が止まった。スラ吉のゲル状部分の量が、いつの間にかあり得ない程に増量してとんでもない事になっていた。それを見た万理亜は頬に手を当てて、

「あらまあスラ吉ってば、久しぶりに呼ばれて嬉しかったんですかね。湯船のお湯を吸収してこんなに大きくなっちゃって……いやはや増えるワカメもビックリですね？」

「アホかあああぁぁぁっ！　一体どうすんだよ、バスタブから溢れそうになってるぞ！」

と身を引きながら刃更。すると万理亜はペロッと舌を出して、

「こうなっては仕方ありません――諦めて、皆で仲良くスラ吉に陵辱されましょう」

そう言った瞬間、スラ吉の身体が一気にぶわっと膨れ上がった。こちらへ襲い掛かる予備動作かと刃更は身構えて――しかし、不意に生じたキンっ！　という甲高い音と共にスラ吉のゲル状部分が凍り付いたと思ったら、そのまま粉々に吹き飛んだ。

「す、スラ吉いいいいいいいいいいいイイ――――――っ！」

それは舞い散るスライムのダイヤモンドダスト。浴室に絶叫を響かせた万理亜が、

「うぅう、む、惨い……こんなの絶対惨すぎますっ。一体誰がこんな残酷な真似をっ!?」

無惨な使い魔の末路に、ワナワナと怒りに打ち震える。すると、

『――マリア、貴女は謹慎処分で大人しくしていると聞いていたのですが』

ふと浴室に冷たい声が響いた。そして壁に空間移動用の魔法陣が展開し、ゆっくりと歩み出るように一人の女性が姿を現す。メイド姿の美しい女性だった。

いきなり現れた容貌もスタイルも圧巻の美女を見て、思わず息を呑んだ刃更は、

……あれ、でも……？

その顔にどこか見覚えがあった。すると顔を青ざめさせた万理亜が答えを口にする。

「る、ルキア姉さま……っ」

「姉さま……って」

刃更が思わず呟くと、美しいメイドは絶対零度（れいど）の瞳でこちらを見回して。
そして、浴室に冷たい声が響いた。
「我々穏健（おんけん）派の決定を伝えに来ました――貴方（あなた）達には全員魔界へ来ていただきます」

あとがき

既に本編をお読みの方も、これから読まれようとしている方も、本書を手に取っていただきましてありがとうございます。上栖綴人です。

さて、今回は長谷川メイン巻ですね。この作品で、年上の女の人が刃更を本気で甘えさせてくれると一体どうなるかを追求してみました。そして皆さん聞いて下さい――ついに今回、一稿目を読んだ担当さんから「エロが物足りない」と言われませんでした！　ああ良かった……どうやら悩んだ末の長谷川のお風呂シーンのお陰で命拾いしたようです。

そして戦闘面では、その正体と併せて圧倒的な強さを持つキャラとして長谷川を描きました。3巻でゼストを倒した澪・柚希コンビが全く手も足も出なかったのは、長谷川とゼストの実力差を鑑みた結果によるものですね。とはいえ今回は刃更の可能性についても触れましたし、刃更の母親の秘密を少し明かしたり、本作での魔族・神族・人間の関係や歴史を突き詰めた事でヴァンパイアの橘のような存在も登場したりと、今回は色々と物語の伏線を回収しつつ作品の幅を広げさせて貰いました。次巻以降で刃更達の覚醒などと併せて、少しずつその辺りについても明らかにしていけたらと思っています。

次に「少年エース」で絶賛連載中のみやこかしわ先生の本編コミカライズの第1巻が、本書より一足先に発売になっています。それはもう超絶クオリティの漫画ですので、ぜひぜひお買い上げいただければとっ。エロもバトルも超必見ですよっ！

そして、9月に情報解禁となった『新妹魔王ダブルコミカライズ企画』についても改めて告知させていただきます！「少年エース」での本編コミカライズに加えて、白泉社さんの「ヤングアニマル嵐」でも、外伝コミカライズの企画が進行中です！　これも読者の皆さんから沢山のご声援をいただき、関係者の皆様にご尽力いただけたお陰です。本当にありがとうございます！

では、本作の関係者の皆様に謝辞をー。ニトロプラスの大熊さん、今回も最高のイラストの数々ありがとうございました！　オルニスのデザイン超格好良かったです！　そしてみやこ先生も毎月コミックの連載ありがとうございます。毎回ネームと本誌を読むのを一ファンとしてとても楽しみにしています！　担当さんやその他の関係各所の皆さん、そして何より本書をお買い上げいただいた読者の皆さん、今回もありがとうございました。

それではまた次巻でお会いしましょう。5巻はいよいよ魔界を舞台に、色々な事が動き出す予定でいます。今回は胡桃が再登場しました――次は当然『彼女』です。

上栖綴人

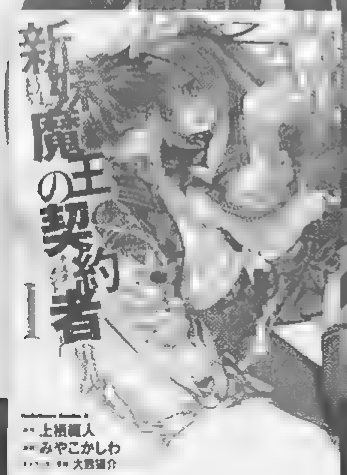
ウィルベルトの
忘れ形見か
……殺せ
万理亜の姉ルキアの手引きで
魔界へと赴く事になった刃更達。
穏健派と現魔王派が魔界の未来を巡って争う中、
初めて訪れる異界の地で待つ出逢いと再会——
その果てに、人と魔族の大戦後に生まれた刃更達は
戦争の現実を見る——
新妹魔王の契約者 The Testament of Sister New Devil テスタメント V
COMING SOON!

ウィズのお忘れ形見

万理亜の姉ルキアの手引きで
魔界へと赴く事になった刃更達。
穏健派と現魔王派が魔界の未来を巡って争う中、
初めて訪れる異界の地で待つ出逢いと再会――
その果てに、人と魔族の大戦後に生まれた刃更達は
戦争の現実を見る――
殺戮
新妹魔王の契約者
The Testament of Sister New Devil
テスタメント
V
COMING SOON!

新妹魔王の契約者
しんまいまおう テスタメント

みやこかしわの描く、
最強の限界突破コミックが
月刊「少年エース」で大人気連載中!!



［原作］上栖綴人
［漫画］みやこかしわ
［キャラクター原案］大熊猫介
（ニトロプラス）

角川コミックス・エース
『新妹魔王の契約者』1 絶賛発売中!!

4巻発売おめでとうございます!!

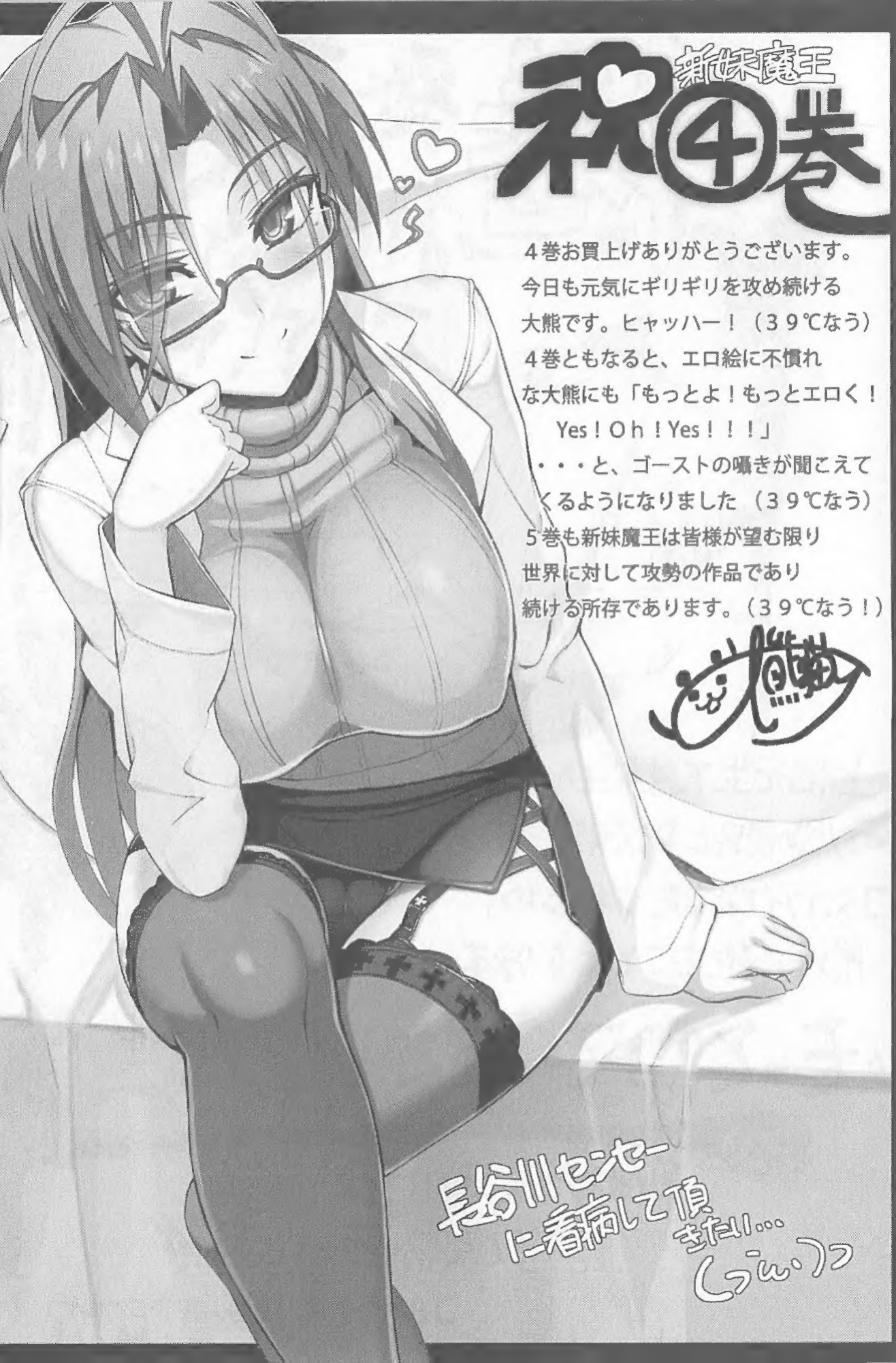
上栖先生、大熊先生が
ラノベの限界に挑む程に
コミカライズもまた少年マンガの
限界に挑むことになります。

✧もっとやってください。✧

みやこかしわ

新妹魔王 コミカライズ1巻も
よろしくお願いします!!

・コミカライズ担当・みやこかしわ



新妹魔王 祝④巻

4巻お買上げありがとうございます。
今日も元気にギリギリを攻め続ける
大熊です。ヒャッハー！（39℃なう）
4巻ともなると、エロ絵に不慣れ
な大熊にも「もっとよ！もっとエロく！
Yes！Oh！Yes！！！」
・・・と、ゴーストの囁きが聞こえて
くるようになりました（39℃なう）
5巻も新妹魔王は皆様が望む限り
世界に対して攻勢の作品であり
続ける所存であります。（39℃なう！）

熊

長谷川センセーに看病して頂きたい…しくしく

新妹魔王の契約者Ⅳ

著　上栖綴人

角川スニーカー文庫　18221

2013年11月1日　初版発行

発行者　山下直久

発行所　株式会社KADOKAWA
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
電話　03-3238-8521（営業）
http://www.kadokawa.co.jp/

編　集　角川書店
〒102-8078 東京都千代田区富士見1-8-19
電話　03-3238-8694（編集部）

印刷所　旭印刷株式会社
製本所　株式会社ビルディング・ブックセンター

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

※定価はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本は、送料小社負担にて、お取り替えいたします。KADOKAWA読者係までご連絡ください。（古書店で購入したものについては、お取り替えできません）

電話 049-259-1100（9:00～17:00／土日、祝日、年末年始を除く）
〒354-0041 埼玉県入間郡三芳町藤久保 550-1

©2013 Tetsuto Uesu, Nekosuke Okuma

Printed in Japan　ISBN 978-4-04-101061-7　C0193

★ご意見、ご感想をお送りください★

〒102-8078 東京都千代田区富士見 1-8-19
株式会社KADOKAWA　角川スニーカー文庫編集部気付
「上栖綴人」先生
「大熊猫介」先生

[スニーカー文庫公式サイト] ザ・スニーカーWEB　http://sneakerbunko.jp/

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日